伏佛拂物糞分粉文

ヘ……並瓶併餅弊兵柄閉陛皿表俵苗錨猫壁糸別捌　塀幣米丙標僻廟辯勉鞭
返變邊片便

ホ……捕浦補暮墓畝母保歩奉棒俸峰蜂豐崩封夢睦　募慕舗牡盲邦剖朴沒勃
僕北牧墨本盆

マ……磨麻馬埋妹每滿　摩猛幕末秣漫

ミ……密蜜民眠　味脈

ム……務　霧

メ……迷名明鳴命妙免面綿　盟滅麺

モ……目木門問　毛蒙默勿

ヤ……夜野也羊養樣陽的譯　耶洋揚楊厄藥

イ……以移易壹一飲陰引印因　椅倚異

ユ……憂優又有右友尤由油勇郵遊　輸融雄熊

エ……榮影要曜幼葉益驛役鉛烟　營鋭腰遙閲悅液炎演緣

ヨ……余餘用預容浴欲慾翌　予豫譽與翼抑

ラ……來雷賴老勞郎落藍卵　羅裸瀨牢狼廊駱欄蘭覽亂

リ……里裏理厘利梨吏離履領凉良兩料量旅留流略　狸鯉李柳龍瀧隆虜栗律輪倫臨
陸力綠立笠林隣

ル……類　屢累壘涙

レ……令冷齡禮例療暦列烈劣憐鎌　勵嶺遼歴裂連聯練

ロ……路露弄六論　魯樓鹿祿錄

ワ……和話黄横往王或惑椀　隈腕灣

キ……位爲違圍慰遺委院　威唯惟胃畏萎員

エ……越遠園圓　猿

ヲ……於屋溫　汚

國字……辻働畑匁　俥腺扨

以上の字數は普通字選定の結果自ら積もり來たつたものであつて、始めから一千六百五十字と計畫して置いたものではない。然し尚これで不足を感ずる場合には更に左の三百七十字を增加し二千〇二十字としたならばいかゞと思ふ。

三　増補三百七十字案

ア行……挨隘殃鴨軋案庵洩脅泳宛詠燕援應穏
カ……苛葭稼榎芽駕誡楷偕刈亥該涯嚆膏濠構購媾慷剛閤愕割渇陷鑑奸翰函閑漢慽
キ……稀軌飢姫毀祈僞技巨拒距虚禦丘柩朽鳩窮況嚮彊鞏逆脚麹橘迄筋
ク……驅倶恢魁慌廓濶熏換纏
ケ……渓頸詣掲仰矯峡激隙喧牽
コ……弧顧姑胡涸鋼沍洪苟拘酷哭痕
サ……些鎖紗劑濟箱痩遭詹削策擦霰餐讒
シ……侈厠璽赦瀉醜儒繻鯛庶徐叙訟娼晶唱祥樟傷衝鑑襲拭嗇橋叱針審寢塵順巡徇筍遵
ス……瑞
セ……棲贅宵消硝渉竊褻箋煽籤薦詮遷禪
ソ……疏聰續遜
タ……舵駝頽戴萄桃塔託卓諾迭脱膽憚男
チ……笞宙酎猪寵塚眺誂帖舳軸嫡峡蟄陳陣
ツ……槌
テ……邸訂艇泥嘲櫂狄摘典
ト……妒屠鍍逗偷騰筒篤鈍曇呑
ナ行……嚢捺納喃任姙侵
ハ……播盃狽黴貿尨胞疱鞄剝帛箔搬盤判絆汎藩蟠蕃蠻
ヒ……屁毘徴眉謬紊敏
フ……膚俯腑腐釜俘敷撫楓諷覆憤噴墳蚊紛奮
ヘ……聘篇編扁辨蔑
ホ……輔葡捧鋒逢奔
マ行……魔邁網慢饅銘冥茂紋悶
ヤ行……楊夷誘域姪咽蔭愈癒諛宥幽抽游猶謁曰奕邑沿姻輿庸膺抑
ラ行……浪朗蠟悧痢狸瀏硫慮諒亮輛糧菱淋痳稟吝輪鱗鈴零齢麗戻獵僚漏勒
ワ行……賄隈謂迂
國字……栃匂畠鰯籾哩腺膵

以上三案の字數通計は二千〇二百字となる。けれども實施の上行はれ易いところは第二案の増補の

部までであらうと考へる。第三案の增補は既に義務教育を了へたる中等教育の方の場合に適用するが或は穩當な方法かも知れぬ。さて兒童に漢字を教授する上の困難なことは唯字畫の煩しいことや、字數の多いことのみが主點ではない。實はそれよりも更に注目す可き問題がある。それは同一の漢字に音訓種々の讀みわけのあることである。否音と訓との根本的相異を知らしむることである。『巴里』をトモリと讀み『卜部』をトベと讀み。『埋葬地』をリソオチと讀む如き誤りは珍らしくない。又無理もない讀み方である。又書く上にも『事務所』を『ヅ務所』と書いた中學一年生もあつたと云ふことである。かゝる實例を耳にする度毎に自分は漢字難の感を益深くする。實に漢字教授の困難は字數の如何に存すると云ふよりも、寧ろ文字そのものの音の場合、訓の場合、書き方の場合に多く存することと思ふ。

第二十二章　現行の俗字百二十箇

俗字の研究は試みにどの時代の記錄について觀ても、その數は必ず幾千幾百の多きに達する。調ぶるに從つて自ら其の俗體なることを知つて來る。而してその發見するものは隨筆漫錄の類に多くて、莊嚴を主とするものには少なかる可き筈なるも、事實は必しも然らず、歷朝歷代の碑文に於ける俗字の多きこと、亦豫想の外である。

俗字は之を俗字と知りつゝ書くこともあらうが、多くはそれと氣附かないで書くことが多い。自覺に上らないで書かれる俗字は最早や所謂俗字の域から脫しようとする程度になつて居るものと云ひ得られる。然し世間で互々の間に唯筆で書いて取りやりして居るうちは、未だ俗字上りの正字としては認めにくいのである。つまり正字たるの信用が一般から認められないのである。然るに世間一般の爲めにはその俗字がいつしか版木の上に上り又は最近の現象の如く之が活字の上に現れるに至ると、滔々たる俗字は殆んど疑問の種子となる迄もなく、立派に正字視せられる傾向がある。わけて活字には此の力が偉大であつて、その影響や實におそろしい程である。

今日東京に於ける諸活版所の活字は舊來の字畫をそのまゝ襲用せるもの多く中には遠く隋唐以前の俗體に聯絡する字畫もある位である。が然し中には最近の思潮に支配せられて種々の俗體文字を發達させて居る。漢字は由來他に影響を及ぼして、一方に言語上で例へば『只』の字からロハ（費用いらず）と云ふ語、又『獨』の字からケモノヘン（獨乙人を指して云ふ）などの語を作つて居る。然るに又一方に於いては文字が文字同志互に影響し合つて、爲めに形の上に色々の變化が生じて來る。『嘗』の字に甘の字が影響して『甞』の字が出來ると云ふ風になつて來る。その場合をこまかく分類すると種々にわけられるが、兎も角かやうにして俗字なるものが玆に生ずるのである。左に東京諸新聞に用

ひられたる活字中總べて俗字と目されるもの百二十箇丈を選定して見よう。

辞　正しくは舌偏でなく、辭
弥　正しくは旁を爾、又は彌とす。
踪　足偏に從の字
隣　偏旁を左右に入れ換ふ
抛　九の代りに尤の字を入るれば正し
舘　舍の字でなく食偏に代ふ
舗　金偏を以つて舍に代ふ
羌　厶の字が贄物
教　爻を含む故孝の頭はメとすべし
崗　岡のなかの山が再度現れたもの
拿　如の字の下に手
尋　寸の上の几は口なり
痴　正しくは知でなく疑の字を入れる。
嚙　口偏でなく齒偏に交の旁
厨　广垂れに樹の字の木偏を除いたもの
猫　豹の字の偏と同じ偏に還元したるもの
猪　豕偏に直せば正字となる
仙　山でなく遷の旁を置く
庄　正しくは莊なり
床　正しくは牀
粧　米偏に莊の字の俗なり
賍　貝偏に藏の俗體
雑　もとは衣偏に集の字
永　丫水偏に水の字

沉　正しくは沈
衡　なかは魚でなく角と大
添　旁の冠は天の代りに天とする
吉　上でなくヒと書く
叙　又でなく攴或は攵となす
嘗　行の間に金の字を入る
皷　皮でなく支に代ふ
両　なかに入の字を二つ入れる、兩
鎖　貝の上は小の字を正しとす
鬮　門構でなく、鬪と同じ構なり
妬　女偏に戸とある可きもの
悞　懼の俗か
頼　頁の代りに刀と頁を置く
勇　なかは田でなく用
髯　冉でなくなかの縦棒不用
耻　止に非ず心とする
准　もとは準なり
裡　衣の間に里を挿入する
記　已でなく改記紀忌すべて己に从ふ
逓　厂に虎の字を書く
欵　出の下に示を書いて偏とする
戯　虎偏の脚は豆の字に換へる
恠　在でなく圣の字
奈　示の上は大でなく木なり
棄　もと世なく木なく棄を脚とす
吊　弔の俗（素と叔の古攵に同じ）

却　卻の俗
俟　妄でなく女の上に二を書く
艶　豐の偏に太と皿を書く又は豐に盍
厩　もと广垂れに白に匕に殳
潤　氵偏は門構内に入り活とする
廸　正しくは進入の辶とする
着　もと艸冠の著の字の俗體なり
栢　百でなく白
蕚　品に非ず、品の上の口一つ省く蕚
厘　釐の略
寤　穴冠でなく宀冠とする
羈　奇の代りに馬を置く
胆　膽の俗

効　力でなく攵とすべし、更に正しくは攴
献　獻なり
竊　穴冠りの下に廿を挿入す
涅　土の上は臼でなく曰
麺　麥偏に面でなく丐なるを正とす
決　氵偏なり
況　氵偏なり
隙　少でなく小とする
恒　亘でなく亙なり
勅　古くより勅の俗で認めらる
宦　宦の音イなりクヮンと讀むべきは宀に臣
覇　冠は西でなく雨なり
証　證の俗

伏　丈に从ふ字なれば一點不用
刋　干の音字なれば偏は干
仮　假の字の俗、その艸書より來たる
岩　巖の俗
陷　臼の上刀でなく勹とする焔、餡も同じ
陣　陳の俗にして別意なり
嘗　尙の下旨なり甘は俗
宿　夙の俗體
査　木の下に且なり、旦に非ず
尖　肉の俗
竪　立でなく豆がもとなり
藤　もと艸冠なし又水は糸なり

謚　旁は八に丂に皿なり
聯　糸二つを旁とするものの俗體
塩　もと監と鹵とで鹽とかく
叱　口偏に七の字を書く
局　尺局居尾屆屋履屬みな尸を頭とす尸は俗
聟　婿の俗
党　尙と黒とで黨となる可きもの
迂　遷の略字なり
灯　丁は登の代用
重　もと壬と東の字の組み合されたもの
没　几でなくクでもなく回を又の上に書く
兎　もと兔なり兩耳の象形あり

帽　日でなく、曰、月でなく目とする
憇　甘でなく自なり
呈　壬に非ず、最後の一長し、壬
龕　合の冠でなく今なり
走　夭に止の兩字の構造
强　もと弘を含む故虫の上は厶とする
餝　飾の俗なり
靴　化でなく仰の字の旁をかく
花　華の俗
飲　食でなく今と酉との結合

かくの如き例は求むるに從つて限りなく發見せられる。針は鍼の俗、杯は盃の俗、猪は豬の俗と皆その沿革を辿つて見れば直ちにわかる。一概に俗字と云ふと近頃の發達にかゝるやうに思はれるが、實際はその淵源するところ甚だ遠きものがある。その數も亦決して少くはない。『龍』を『竜』とするなど既に周代の吉金文頌鼎の銘に見えて居るところである。端方陶齋藏石中漢代の罪人の墓碑銘などにも當時の俗字は盛に現れて居る。又今日書く楷書中の俗字例へば『賴』の字などでも先年 Turfan の地に發掘された北凉沮渠安周造像頌に明に見えて居るから、今から約千六百年前に既に生じて居たものであることがわかる。俗字沿革の研究は俗字の價値を益高めるものと考へる。

茶　茶毗の茶なり木の上に一あり
看　二點を一に換ふ、もと目の上に毛の字なり また翰
呑　夭でなく天とする
栖　西でなく妻なり
碁　其の字の下に木の字を書くを古しとす
散　日にあらず肉月にする
蝕　虫の上に缺ぐるものあり、飾の巾を省いて見るべし
鉢　犬の下に皿あるものの俗
坂　土は自卽ち阝の俗
訛　化でなく爲の字とするを古しとする

第二十三章　看板文字に對する希望

社會の人々の文字知識は多くどこで啓發せられるかとの問ひに對して、大抵のものは學校でとばかり答へる。たまには家庭で授かる場合はあつても、學校が卽ち兒童の文字教授所となつて居る。此の故に學校でとの答は必しも當を失して居るのではない。けれども單に教育上の側のみでなく、一般社會の人々に萬遍なく、文字を教示せるは恐らく次ぎの四大機關が有力な方便となつて居ることと思ふ。

一、新聞紙
二、雜誌
三、看板
四、廣告

此四大機關の文字普及上の勢力は世人の想像以上で、その影響感化の力に至つては學校以上ではな

いかと疑はれる程である。教育上の側のみで文字をやかましく取り締つても、周圍の社會で文字が殆んど自由勝手の姿であつて見れば、兒童に先入せし文字の觀念も固より亂されざるを得ない。のみならず社會の人々も多くは日常見る此れ等四大方便によつてよかれ惡かれ自然とそのまゝを覺えて行くのである。けれども教科書用の文字統一と違つて社會上のこの文字統一は頗る困難を感ずることと思ふ。前者が文部の仕事であれば後者は內務の仕事である。世人はとかく文部とその教育上の文字難をかつぎだすことを知つて、未だ內務とその社會上の文字難の方には眼が及んで居ないかと思ふ。然し、文字は言語又は風俗のやうなもので、權威法令のみを以つて、その統一がはかられるものではない。唯社會の個人々々が皆或るきまつた標準をもとに成るたけ文字に注意すると云ふ風にならなくては其の統一はむづかしいのである。世人があたまのうちに銘して居る文字印象はその字體に色々の差はあるであらうが、之を大別して見ると、

一、明朝活字體のもの

二、肉筆式のもの

三、所謂破體のもの（ゴジク體又は裝飾の施せる體）

などである。明朝活字體のものは新聞と雜誌類及びその他ふゝ印刷されたる廣告紙に多く見る。肉筆式のものは軒端に翳せる看板又は瓦斯燈などに多く見、所謂破體のものは主として路傍の廣告特用の文字に之を見るのである。

新聞雜誌上の活字はその字母の永續する限り經濟上その他の都合で容易に變更されることはない。爲めに、よし明朝活字は亂雜とは云へ、割合によくその統一が保たれて居る。尙統一の點では非常の缺陷はあるにしても、大體よく揃つて居る。然るに、店頭に飾れる看板と來ては、無論玉石混淆の話しではあるが、その字劃に於いて全然統一を缺いて居る。不統一の極に達して居ると云つても過言であるまい。

然し看板は云ふまでもなく商賣上行人から特別の注意を引かんが爲め、種々苦心の結果になれるものである。中には一度揮毫して揭げて見て、恰好がよくないとか店にうつらぬからとか云つて再三再四書き直させることがあり、中には又町中一等の面白い書き振りを考案して强ひて勉めて筆太の奇字を選定することもある。その字畫に誤りのあるなしの論などは敢て問ふところでない。むしろ誤字を揭げた爲めに世の注意を集むることが出來れば、反つて大福の前兆とするかも知れないと云ふ調子である。故に看板に向つて絕對に漢字の統一を强うすることは殆んど出來ないことと思ふ。體裁を唯一の目的とせる看板の文字と研究的、學術的のものとは全然その性質を異にしてゐるのである。

然し翻つて考ふるに看板は啻に恰好、體裁のことのみを以つて能事了れりとするものでなく、自分は更に一歩をすゝめて現今の文字界の反射鏡には看板程重要なものはないと思ふ。今日の所謂俗字、

通用文字で未だ活字の間に現れざるものでも、看板には既に遺憾なく發揮せられて居るものが實にたくさんあるのである。これは洋服の服の字、會社の會の字などが滿足に書かれて居るものの極めて少ないのを見ても、それは明らかである。現代の俗字の調査にはそれ故看板文字のしらべが忽諸に出來ない位置を取つて來た。尙他の例で云へば富士見軒の富の字に初の點が缺けて居たり、軒の字のつくりが干でなく行の字のつくりの字となつて居たり、旅館の館が舍の字の偏に書かれて居り、紙屋の看板に紙の字の右肩に餘分に一點が打たれ、又筆の字の右下にも點がうたれたり、此の外の看板で假事務所の假が殆んど總べて仮の字に書かれて居ると云ふやうに今の俗字の代表的のものは凡て看板に遺憾なく現はれて居る。

かやうに看板は俗字の研究材料となる外に又その字の書體とその家の商賣との關係を窺ふ一資料ともなる。近時新橋須田町間に於ても見られる通り舶來小間物店に在りては白木屋始め多くはその看板文字がかどを四角にとつた所謂ゴシック體の文字で書かれ、又婦人用小間物店の看板はへの字なりの優しい隷書體で書かれて居る。又劇場では舊派の看板に血を吸へる蛭を竝べたやうな肉太文字で書かれ、又汁粉屋の看板は「ぢるこ」と云ふおきまりの三文字が椽大に横なりに書かれ、鮨屋の看板には必ず「壽司」の二字が行書又は草書で書かれて居る。又民國人向きの料理店には赤地に黑で支那式の肉太き楷書が書かれて居る。少々の除外例はあるとしても大體かやうに見わけがつく。若し假に汁粉屋、めし屋の看板にゴシック體の文字が書かれるとか云ふやうに、その普通竝みを外れることは千客萬來の精神に反する。その爲めかあらぬか、自分は未だ東京の蕎麥屋の行燈にかゝれた一種變體の『そば』の三字がキソバと片假名で書かれたものを見た事なく、又片假名のミルクホールが平假名化せられた例も見たことはないのである。尙序でながら瓦斯燈などの硝子の色にも化粧品のは多く藍紫に白字を拔き、舶來店には透明の硝子に黃金色でゴシック體に書くと云ふ傾向が見られる。

看板にはかやうな概括的觀察が出來る。然し書籍類に在りてはその脊に書かれた外題の文字は普通の看板と違ひ差別が頗る立てにくい。事實上又左程の書き方のきまりがあるやうにも思はれない。けれどもこれに就いて注意すべきは、書物は看板の如き俗一偏のものとちがふから、その外題の文字はなるたけ字畫を正しくしておく可きことである。而してその書體には著者の好きずきもある可けれども楷書又は隷書を以つてするが最も適當で且つ讀み易くもあると考へる。然しその上下にやたらに飾の過ぎて表題の目立たないのはよろしくあるまい。その他專門の學者でなく一般のものに讀ませる書物の表題に篆書その他のわかりにくい書體を用ひることも亦あまり似合はしきことではない。こゝに書物のことは序でながら附言したのである。

かやうにすべて外題、看板は、店内の如何は兎に角として、營業の上に頗る重要なことである。商店は言葉として大音聲を揚ぐる代りに、成る可く看板文字に特色を帶びさせなくてはならぬ。自分は

この點について一點の異議を挿まない。然しながらその看板が軒に掲げられ、街衢に曝される以上は、行人の目標となり、暗に又その字形を行人の腦裏に印象せしむるものである。行人は學者、商人、兒童の區別なく、皆見て之を讀む。而かもその字畫は凡て頗る明かなるが爲め之を覺ゆるには最も都合よきものである。世界を人間の學校にたとへるならば此の看板の文字は總べて是れ吾人に與へられたる教科書の如きものである。習字手本の如きものである。

看板の文字が美術的に、恰好よく、又よく目立つやうに且つ營業の種類にも似合はしいやうな書體で書かれなければならぬと云ふことは、動かす可からざる事實である。家の主人が之を希望することはげに尤もの次第である。然しながら看板を實際に書く筆者は全く別人であつて主人ではない。界隈のペンキ屋かさもなくばひと通りの書家と仰がれる人が書くのである。こゝろみに思へ、看板を書くものの責任の如何に大にしてその一點一畫の影響は豫想の外であることを。吾人は世の所謂看板文字が今少しく洒落をやめ、正確なる字畫を美術的に而かも營業手段に反せぬ範圍内で書かれてほしいと思ふのである。兩者の調和は果して出來にくいものであるか。若し幸にして吾人の希望が實現せられる曉には啻に一般文字社會の蒙を啓き得るのみならず、又以つて兒童教育の上にも少なからぬ稗益を與へることであらうと思ふ。

尙廣告に現れた文字に就いてもライオン齒磨、花王石鹼、仁丹、ゼム、言海その他のものに亙つて多少分類して述べたいこともあるが、こゝには暫く省くことにした。なほ自分が常に氣になることは『三越吳服店』の越の字である。日本橋通り室町三丁目の同店の看板は四季に書き代へられて居るにも拘らず、いつ見ても『戉』を入れた正字の『越』が書れて居たことがなく走に戉を入れてゐる形となつてゐる。これも俗字の一好例であらう。

第二編　音韻の部

第一章　支那文字と音韻との關係

一　序論

支那に關する諸般の學術的研究のうちで、支那の文字、及び其の音韻に關する研究は今日、最も幼稚なる域に在るものの一つである。固より從來此の研究が、全然現れて居ないのではない。けれども從來の研究は、其の觀察の方法が、專ら古來の因襲にのみ支配せられて居て、殆んど全く、科學的と認めらるべきものはなかつたのである。其の材料蒐集の點に於いては、驚嘆せしめる程の、大規模のものも見出されるが、併し其の分類と研究法の、適切でなかつた爲め、今日尙未だ、其の實を結ぶに至つて居ないのは、遺憾とするところである。

支那の文字は、今日未だ世界の學者から、研究せられるに至つては居ない。けれ共嘗て埃及の文字が泰西の學者の研究對象となつたやうに、支那の文字も、亦早晩東洋の學術の一つとならなければならぬと思ふ。支那文字に關してこれ迄チャルマース氏 (John Chalmers) とか、メルレンドルフ氏 (Mo

ellendolff) などの研究も多少はあるが、孰れも、支那人のなした研究範圍以外には、一歩だも出て居らぬ。エドキンス (Joseph Edkins) 氏の研究に於いても、亦同樣である。一體、支那文字などの研究は、西人などに竢つ可きものではない。眞の研究は矢張り東洋の舞臺に於いて、東洋人の手で、大成せられなければならぬと思ふ。支那文字のうちには、今日全く、死字となつてしまつて居るものもありはするが、併し、埃及の繪文字と違つて、現今も、尙盛に行はれて居る文字のことであれば、此れに學術的調査を施すと云ふことは、單に世界の學界に向つて、一新學問を紹介すると云ふことになるのみでなく、又今日の東洋學研究に向つても、一大關鍵を與へる譯になるのである。

然るに、文字研究なるものは、東洋の本舞臺に於いてすらも、頗る難事業とするところである。何となれば、支那の文字研究は鐘鼎金石文の研究結果を、其の基礎としなければならぬ。然るに其の金石文の研究と云ふが是れ極めて困難な事業である。其の僞物と眞物との鑑識を必要とすることは素とより、尙其の歷史的の十分なる研究をも、必要とするのである。けれども從來の文字研究は、此の根本の問題に重きを置いて居なかつた。金石文を顧みないで、文字を研究するのは比較的容易に出來るやうであるが、併し、それでは眞の研究にならない。

文字の科學的研究に向つて、金石文の研究を必要とすることは、上述の如くであるが、併し文字研究は、單に此れを以つて、能事了れりとするのでない。此れは唯單に文字の形の上の觀察資料となるばかりである。形の上の方面も、素とより、文字研究の重要なる部分であるに違ひはない。けれども、總べての文字は、云ふまでもなく、言語上の符牒である。從つて、其の言語が有する音と、其の意義との兩者が必ず其の文字に含まれて居るべき性質のものである。故に文字は、又其の形を離れて、其の音の方面、及び意義の方面からも、十分の研鑽を遂げなければならぬ。つまり先づ、言語なる根本的のものを基礎にして然る後文字を論ずることにしないと、其の文字研究は、單に浮いた形の上のみの觀察となるばかりで、眞の文字研究とまでは、なることは出來ないのである。かやうに觀察して來ると、支那の文字研究は、表裏兩面からの十分な研究を必要として居ることがわかる。玆にはかくの如き研究の性質を、有して居る支那文字に就いて、特に此の文字と、其の音韻との關係に就いて、少しく述べて見たいと思ふ。其れには先づ、文字構成の有樣に就いて、大體を觀て置かなければならぬ。

二　支那文字の構造

支那の文字は、其の今日のものと、古のものとを問はず、總べて其の構成の三要素から成り立つて居ないものはない。卽ち

支那文字の要素 ⟨ 一、形の部 (Formelement)
　　二、音の部 (Lautelement)

〔三〕意の部 (Bedeutungselement)

を必ず具備して居る。然るに此の三要素が、因つて起つた所を考へると、序論のところでも既に述べたやうに、即ち

一、形の方面は――金石文字及び龜甲文字から出て、

二、音の方面は――言語上の音から出て、

三、意の方面は――言語上の意から出て、

居て、以つてそれぞれ今日のものに發達し來たつて居るのである。此の三方面は、文字構成の根本要素であるから、左に今少しく詳細に、其の沿革に就いて觀察を試みて見たいと思ふ。

支那の文字は、云ふまでもなく、象形の文字として一般から認められて居るけれども、今日の楷書の示す形は、未だ十分に其の象形たることの證左にはなりにくい。楷書體の以前の狀態たる篆書、更に泝つて籀文、更に遠く泝つては所謂古文の狀態などの、歷史的關係を辿り辿つて、最後に達し得られる支那文字の元始的狀態を、觀察する時に於いて始めて、其の眞に繪文字なる象形たることがわかるのである。其の繪文字たることの最も明かに見られるものは、鐘鼎金石に現れた文字を措いて、他に其れ以上適切なものは見當らない。依つて左に鐘鼎金石字の中から、其の一例を擧げて見よう。

及作器敦積古　戈の字の元始的狀態

立鉞尊積古　戉の字の元始的狀態

齊侯鐘嘯堂　血の字の元始的狀態

父舟器積古　舟の字の元始的狀態

上は父戉舟爵積古に據る。

此れ等の文字を觀ると、如何に支那文字の最初の形が、繪其のものであつたかと云ふことが推察せられる。即ち今日楷書體で書かれて居る戈の字も、戉の字も、素とは共に爰に示す如き形の武器に象どりたるものたることは、疑ひの餘地がない。其の今日の楷書に於いて、戈と、戉との形に相違があるやうに、本來の武器に於いても、其間に形の上の相違のあつたことは、明かである。

血の字は此の繪文字から察すると、素と一種の高杯の如きものに、生血を盛つて、所謂血祭りでもして居た時の有樣が、爰に窺はれる。血の字の古形が、かやうであるから、從つて其の容器は、卽ち今日の皿の字に相違ない。今日の皿の字に於いては、其の象形文字としての意義が、明かに見えて居ない。のみならず、其の器物としての丈けも、低く見られる。けれども、其れは單に後世の字形の上の變遷に過ぎないので、素とは矢張り、丈けの高い器物の象形と思はれる。

舟の字も、素とは船の形から出たもので、此の繪の示す通り、最初は横なりに書かれて居たものと思はれる。横なりに書かれる可き筈のもので、後世縱に書かれて居るものは、其の類例に乏しくない。目の字、盲の字、眉の字などは其の好例である。舟の字、車の字の如きものも其の偏として用ひられる時に於いて、始めて其の縱書きを必要とするに至つたものと見える。

支那文字はかやうに繪畫から出發點を發して、爾來變遷に變遷を重ね、以つて今日に至つた。其の變遷の途中には種々互に他のものと相混同して、本來は別物であるものも、一見同一物なるが如く、今の楷書で書かれて居るものも、少なくないのである。例へば賣買の賣の字の形は、今日の楷書で、讀の字の旁と同一視せられて居る。けれども、其の本來の形には、次ぎの如き區別が確然と存して居る。卽ち

賣買の賣の字

・讀の字の旁の賣

楷書で普通同一視せられて居ても、其の實別物であるものは、其の他尙多くの例がある。今日、全然同樣に書かれて居るもののうちに例へば、律、筆などに共通なる聿の字は、毫も津の字の旁の聿と區別されては居ない。けれども其の實兩者の間には、次ぎの如き歷史的の區別が存在して居るのである。

律、筆の聿

津、津の聿、（彡は筆の飾りである）

此の形の上の區別は、後者が前者に引き付けられて、省いて書かれるに至り、全く今日では、同樣に視られるに至つたのである。

以上は、支那文字の古い狀態に就いて、觀察を下したのである。若し、支那上代の繪文字の形が、上古以來其の形の方面に於いてのみ、發達を遂げたと假定するならば、其の粗笨な繪文字は次第に發展して、繪畫の方面に向つて進んだに相違ない。然るに、事實は之に反して、輕便にも思想交換の要

具として、所謂文字の役目を取るに至り、博く一般に使用せられ、流布することになつた。其の譯は、如何なる點に存するかと云ふに、そは全く、其の繪文字が言語と相聯結し[illegible]と云ふこと存すると思はれる。

抑も言語は云ふまでもなく、文字に先き立つて存して居たものであつて、言語の存するが爲めに、文字の存在を絶對に必要とするのではない。併し文字に於いては、言語があつて然る後、出來るものであつて、その文字なる資格を有する以上は、必ず言語の符牒たるべきものであることは明々白々である。既に文字は言語の符牒である。然らば言葉の有する音も、意味も、其の文字に含まれて居なければならぬ。否其の字面に之が表はされて居ることを必要とするのである。然るに、支那文字の性質として、其の意義の方面は大體其の字面に指示されて居る。上述の戈、戉、血、舟などは其の最も明かなものである。けれども其の音の表彰に至つては、何等の之を示せる部分を有して居ない。此の點に於いて支那の象形文字は音韻研究に頗る困難を感ぜしめるものである。若し今、殘酷なる義を表はす文字、例へば血とか決とか、又は蹶などの文字に就いて見るに其の音が、孰れもケツの音を取つて居る。依つて其の言語の上から、此れが音のケツなることは想像せられないでもない。併しかゝる方法は、萬般の場合に適合することがむづかしい。

要するに支那文字の音韻研究は、頗る困難である。けれども相當の方法を以てする時は其の緒が全然得られないものでもない。左に其の方法に就いて少しく自分の考へを述べて見よう。

三　諧聲文字

支那の文字中、單に象形のみで出來て居る文字とか、又は指事、會意の點に於いてのみ、發達し來たつた文字に在つては、直接に其の字の音韻を、看破することは頗る困難である。去かしかくの如き純象形、又は純指事、會意の文字は全體の上から見て、實に少數であつて、先づ十中八九までは、其の文字の組織中に表音の符號を含んで居るのである。例へば舟の字などには何等の音符號を見出さないけれども、舸の字とか、艖の字、又は舶の字になれば、各其の字の音は、其の旁に在る音符に依つて讀むことが出來るのである。此の場合に於ける舸の可は、意味を示すのでなく全く音の符牒である。艖の差、舶の白も亦同樣である。更に可、差、白の音符に依れるものに就いて、廣く觀察して見ると、尙あまたの例がある。卽ち

一、可の音符に依れるもの……何、河、柯、珂、訶、荷、苛、軻、歌、舸、砢、阿、啊、等

二、差の音符に依れるもの……槎、瑳、艖、蹉、嵯、縒、嵯、瘥、等

三、白の音符に依れるもの……百、栢、迫、伯、珀、怕、泊、拍、粕、舶、帛、魄、碧

此れ等の多くは、其の偏に於いて意義が示され、其の旁に於いて其の音が示されて居る。かやうに

文字の一部分に表音の符號が含まれて出來て居る文字は、從來諧聲文字と云ふ名稱で呼ばれて居たのである。

諧聲文字の有する音符は、必ずしも其の字の旁りに在ると定まつてはゐない。放、翻、副、敗に於けるが如く偏に在るともあれば又、帛、貧、磬、忘、裂の如く冠りの位置に在ることもある。其の他意義の符牒と共に種々の結合狀態に於いて、其の位置を占めて居る。廠は尙の字音から出で、德は直の字音から出て居ると云ふやうに、一見判然して居ないものもあれば、又尋の字の如く、昔しは彡を冠りの一部分に有して、其の音を示して居たものが、今日は全く略されて見えなくなつたものもある。同じく彡を音符に取つたものでも、杉、診、珍、參などには、今に其の音符を保存して居るが、尋の字などには、其れが殘つて居ない。然るに篆書に於いては、明かにそれが窺はれるのであるから、此れは諧書に書き改められる頃に、落ちたものと思はれる。

諧聲文字の音符が、現はす音は、卽ち其の文字が代表する言葉の音である。卽ち音符の音は、其の文字の音であると同時に、又其の言葉の音である。それ故支那文字の音の觀察には、單に其れを文字上の音として研究することの外に、更に支那語其のものの立脚地からも、觀て其の音研究に進まなければ十分であるまいと思ふ。

文字上に現れた音符の數は、本來限りがあつて、略其の音の種類もそれに依つて察することが出來る。決して後世見る如き無數の音が諧聲文字製作の當時に於いて其の音符に結び付いて居たとは思はれぬ。然るに今日では、同一の音符にして、頗る多樣の音を發達させて居るから、音符の音を以つて直ちに其の字音を推定するときは反つて誤謬に陷らしむる位である。例へば次ぎの如き、

一、谷の音コクに對して……俗、浴、欲、慾、裕、等（孰れもコクの音でなく）

二、失の音シツに對して……迭、帙、佚、跌、等（孰れもシツの音でない）

に依てもあながちに其の音符の谷とか、失とかの音で一樣に律することの出來ないもののあることがわかる。說文などの古書の解釋に依ると、どこ迄も其の音符の音で推し詰めて行つて、然るべき筈のものであるにも拘らず、實際はかくの如く、一樣に行つて居ないのである。此の原因は何處に在るかと云はば、云はずして知る、卽ち此は實際の言語上の音が、文字などには構はつて居ないで、どしどし變遷發達をして行つたからである。言語は實際の生きた生命を有して居るから、字音其のものの舊來の音などに束縛せられるやうなことはない。一例を日本音に取つて見ると、我が國では子音で終る發音がむづかしく不自然である爲め例へば英語の ink はインキ ink-i 又はインク ink-u と云ふやうに必ず母音を語尾に添へて發音する。谷、俗などの支那古音に對しても、コク kok-u ゾク zok-u とウの母音を添へて讀むのである。かやうに一國語の言語上の音の勢力は、非常なもので之に抵抗することは出來ないものであるから、其の爲めに自然字音そのものに於いても、その影響を蒙らない譯には

いかないのである。此れは支那に於いても同樣に考へることが出來る。

富の字に於ける音符畐は、早くも支那でフーの音に移つて居るが、後世北方支那語にフクの入聲の云へなくなつた爲め、福の字の音フクまでもが、其の影響を受けて今日では福はフと發音せられて居る。托福托福、(オメデトーの意)を、トーフ、トーフと現に北平で發音して居る一事に依つて見ても、此れは察せられる。畢竟するに、字音の現象は、文字其ものの音であると同時に、言語上の音韻現象であるから、諧聲文字の音符の音と雖も、必ずしも一概に一樣の音で以つて、どこ迄も推し通すとは無論出來ないのである。

四　音韻の變化

支那文字の音が、言語上の音現象に伴つて行くことは、上に述べた通りである。然るに、言語の音は爰に繰返す迄もなく、時代に依り、國に依り、地方により、社會により、又個人によつて各相違を有するものである。其の相違は音韻の上に變化の現象となつて現れて來る。從つて又文字の音の上にも其の影響が及んで來るのである。此の節では字音殊に、諧聲文字の音に就いて、其の音韻變化が、如何に現れて居るかに就いて、少しく觀察して見ようと思ふ。

單の音符。　單の字の音は勿論タンであるが、併し音符としての單の音は、タンの外にダン、セン、ゼンなどの音を見なければならぬ。即ち簞、憚などでは、タンの音であるが、驒、彈ではダン。戰闘ではセンで禪ではゼン、の音である。以上四種の音のうち假りに濁音を清音の部に入れて考へると、結局タンとセンとの音になる。

尙の音符。　尙が音符としての音は、トー、ドー、ショー、ジョーである。當、黨、堂、棠、賞、甞、常に於いて、それぞれ其の音は察せられる。假りに其の濁音を清音に入れて考へると、トーとショーとの二音となる。支那音で云へば tang と shang の二音となるのである。

眞の音符。　音符としての眞の音は、テン及びシンである。即ち顚、癲、塡に於いてはテンの音で、瞋、愼に於いてはシンの音で現れて居る。鎭の字に於ける、チンの音はテンの音の轉じて、シンとなる過渡時代の中間の位置に立つ音である。其れ故大體に於ける眞の音符は、矢張りテンとシンとの二樣の音と考へられる。

盾の音符。　盾はトン及びジュンの音の音符として用ひられる。即ち遁の字にトンで、循、楯、などにジュンの音である。

石の音符。　石の字の音符として音は、タク、セキ、シャクである。即ち拓、跖、磔、槖などにタクの音で、柘にジャクの音、碩にセキの音で現れて居る。假りに之を今タクとシャクの兩者として置く。

以上二三の例では未だ十分ではあるまいが、併しかくの如き例證に依つて考へると、タチツテトの

所謂タ行音なるものが、移つてサシスセソの所謂サ行音に轉じて居ることがわかる。此れは音韻學上の理屈から云つても、少しも疑ひなき順序である。然るに此のサ行音に屬する字音にして更に轉じて、ヤイユエヨのヤ行音にかはれるものが少くない。例へば

兌の音符。　兌はダツ、ゼツの音符として脫、說などに現はれて居る外に、又エツの音符として、閱、悅などに現はれる。卽ちこれはセツから、更にエツに移つて居るものの一例である。尙ほ

失の音符。　失がテツ、チツの音符としては迭、秩にそれが現れて居るが、失の字の單獨の場合にはシツの音となり、更に轉じて軼、佚などの場合にはイツの音として知られて居る。

此の類のものは尙澤山見出されるが、兎もかくも、諧聲文字の音韻狀態に就いては一見まちまちであるやうであるが、併し其の間には、全然無秩序でなく、何となく一定した順序の存して居ることが、察せられるのである。上に述べたものは、其のうちの一つとしてタ行音から移つて、サ行音に變じ、更に轉じてヤ行音に行く一系統のものの大體である。此の順序は殆んど動かすことの出來ない順序であつて、素と此れは支那語そのものの音韻變化の順序に、支配せられて居るのである。今日の北京官話に於いても其音に、

例へば單の音 tan が shan となり、擔の音 tan が yen となり、又佻の音が tiao とも yao ともなつて居るやうな例があり。又葉の音に she と yeh の兩音があるなども、皆此の間の音韻變化の消息を告げて居るのである。漢字音に現れた音韻がもし支那古代の音韻狀態を示して居るものとすれば、今日の支那の音韻狀態は上述の點に於いて古代のものと大差ないものであると云ふことが出來るのである。

以上に述べた音韻變化の現象から、假りに、其の規則とも見らるべきものを、抽出して見ると結局、支那文字の音韻は語頭のTがS又はshに移り、更に轉じてYの音に變ずるものであると云ひ得られると思はれる。

此の考へにして誤つて居ないとするならば、單の音タンが、戰爭の戰の字の時に、センの音になつて居たり、堆の字の場合の隹の音タイが、催の時にサイ、誰の時にスイの音となつて居ることは怪しむに足りない。又葉の字を人名で葉君など云ふ時の音、セフが普通のエフ、又はヨーの音となれることや、又射の音シャが、一つに又ヤの音を取れる如きことも、無理でないことがわかる。要は其の多く見出される類似のものから推して考へると、異樣に見えて居る音も、道理にかなへる音たることを知るのである。

然るに玆に注意を要すべき點は、音符其れ自身の有する現今の音が、必ずしも常に音韻變化の順序としての、第一次的の音を有して居ないと云ふことである。上例で云へば、幸にも單の字はタン、センと轉じ行く最初の音タンを今に存して居るけれども、石の字、尙の字の如きに至つては、全く其の

原音からはなれて居る。其れ故石の音符は拓、跖、橐などの如き複合文字を形成した時に、セキ又はジャクの音から轉じて、タクの音を取るに至つたものであるかのやうに、誤解せられるかも知れない。尙の音符に就いても、亦同樣で、卽ち當、黨の時には、ショーの音からドーにと變じて行つたやうに見られるであらう。素より、かゝる現象も、全然ないと斷言することはむづかしい。玄かし一般の音韻學の認めて居るところ、及び一般支那語の音變化の傾向から推して考へるとS又はshからTの方にうつるが如きことは寧ろ逆の場合であつて、普通ならば、Tの方からSshにとうつり行くのである。それ故、石に對しては、セキ、ジャクの音よりも、タクの音の方が、素との古い音と見なければならぬ。尙の字に於いても先づ、トーの音が最初に存して居て、それがショーとなつたものと見なければならぬ、卽ち tak から shek に、tang から shang になつたものであると思はれる。果して然るならば、拓、磔などの如くタクの音を有する複合文字は嘗つて、石の音符に尙タクの音が保存されて居た當時に製作せられた文字であつて、此れ等の諧聲文字には偶都合よくも其の石の古音タクが殘つたのである。が併し其の本家本元たる石の字に於いては、タクの音は遠く去つて、今はジャク又はセキの音として現はれて居るのであると云ふやうに考へられる。さらばと云つて、今日石と同音を有する碩の字などは石が二次的以後の音をとるに至つて出來た文字であると、速斷することは少々むづかしいのである。何となれば碩の字に於いても、嘗つて一度は拓、磔などと同樣に、タクの音を有して居たかも知れぬと云ふ疑問は種々の點から起り得るのであるから。

かくの如く觀察して來ると、單に一箇の石の字に就いても、其の音の沿革が、順序を追ふてわかつて來る。而して其の古音と見られるものは單純の場合ではなくて、寧ろ複合された文字のうちに、見出されるのである。以上、石、尙などの論法から推すと、主の字の音シュは更にチュの古音に泝ることが出來、炎の音エンは更にタンの古音に泝ることも出來るのである。注、桂、註の如き、談、痰の如きは其の複合の諧聲文字たるに過ぎぬものであつて、卽ち其の古音を宿して居るものと見ることが出來るのである。

諧聲文字は上來述べたやうに、其の文字のうちに音符を有して居て、其の音符が、或は古音を保存して居ることもあれば、二次的以後の音を有して居ることもある。何れにもせよ、其の文字の音を表示して居る點に於いては、爭ふことは出來ない。既に音符は文字の符牒である。其れ故、同一の音をさへ表示し得る符牒であれば、他のものを代用しても差支へないと云ふ理屈になるのである。其の爲めであるか、又は字畫の繁を避ける爲めでもあるか、近來横濱の濱の字が往々浜の形に改められて居ることがある。素と支那で賓は pin で兵も以た音 ping である。共にビンの音であるところから遂に新規に浜の字が出來たと見える。此れの類推から鬢の字なども、賓を兵に代へて髩の字として書かれて居ることも珍らしくない。此の種の現象は尙他に少なからずある。

去かしながら諧聲文字の音符は決して無制限に孰れになりとも、變換し得られるやうなものではない。假令ひ同じ音符を有する同種のものでも、例へば亡に對して忘と忙とは、其の意味が違ひ、忘と、怡とも其の意味が全く別であると云ふやうに、同音符にして而かも其の在る位置の如何で、全く別義となることさへある位である。況して、忘の字に於ける亡、酣の字に於ける甘、杉の字に於ける彡の如くそれぞれ其の文字の音符であると同時に、又會意の要素ともなつて居るやうな場合のものもあるのであるから、一概に此れが單に音の符號たるに過ぎぬとの理由で、妄りに同音の他の符號を置き換へることは戒むべきことである。唯併しそれが社會一般のものから普通に用ひられて、怪まぬ程度に至れば、其の時始めて認められるものであるが、それ迄は妄りに諧聲文字を作爲し變換することなどは禁物である。

五　結　論

以上支那文字に就いて述べたところのものは從來の文字研究が單に、所謂文字丈けの研究に留つて居て言語と云ふ根本からの研鑽でなかつたことの一大誤謬であつたと云ふこと、及び假令其の文字研究と云はれて居るものすらもが、更に一層深く金石文の研究を基礎として居ないから、常に其の研究が單に表面的であると云ふこと。此の二點を此の際猛省して行かないと基礎の鞏固な文字研究と云ふものは今後確立しにくいと云ふことを、前提に置いて、進んで本論に這入つて、文字と、音韻との關係に就いて、觀察した。其の要とするところは、次ぎのやうに綜括することが出來る。卽ち

支那の文字は形と、意義と、音の三要素から出來て居るが、其の音と、形との關係の研究は支那文字の場合には極めて困難である。單に變遷沿革を重ねて來て居る點から云ふと、形も意義も孰れも共に變遷して居ることは、音と變りない。併し音の變化の狀態は、其の形の上に少しも、表彰せられて居ない。その爲往々所謂百姓讀みとか云ふ讀みかたすらも起る位である。併し支那文字中には、諧聲文字と云つて一種の支那流の表音文字が發達して居る。而かもその數は、全體のうちの八九部までを占めて居る。其れ故、吾人は此の觀察を精密に仕遂ぐるならば、以つて支那文字全體と音韻との關係が、那邊にあるかと云ふことを察知することが出來るのである。此の點から觀ると、一般の所謂象形文字も、唯の音符號として考へることが出來るのである。既に音の方面を立脚地として、總べての支那文字を見ると、從來のやうに一も二もなく、總べて支那文字を象形とばかり觀て居た概評は、少々無理ではないかと云ふやうに見られて來る。無論象形義字として、爭はれぬ點もあるであらうが、又音字としても、立派に研究するに値のあるものであることがわかつて來る。

從來漢字音の研究と云へば、漢音吳音などと云つて、日本では德川時代以來、非常な議論があり、支那では反切、詩韻、通音などに依つて、古くから種々の研究が出て居る。併し、今日の新しい言語

學、音聲學の立ち場からすると、更に一層根本的の解決が出來はしないかと思はれる。舊來は一東、二冬、三江の韻とか云つて語尾の韻のこと丈で、持ち切りであつて、かの韻鏡などに上ること位が關の山であつた音韻研究は、今日の學問からすると、更に音韻全體を通じて、其の裏面に流れて居る音韻の原則のやうな一定不變の通則のあることまでもが、發見せられるやうに思はれるのである。

支那文字と音韻との關係は、かくの如くに觀察せられる。併し、自分は、此れを以つて時事問題としての漢字問題を、奚に解決しようと、勉めるのでは無論ない。又、實際そんな重大な問題は一個人の主張、理屈から、影響せられるべきものでもない。唯自分は、爰に全く研究上の立ち場からして、以上のやうな見解を述べたまでである。

素とより、支那文字に現れた音韻現象は研究を進むれば進むる程、複雜を極めて居ることを發見する。單に one point を拉し來つても容易に論じ去ることは出來ない。既に擧げた、一二の諧聲文字の如きものでも既にT字の系統に屬して居るものであつて、其の偶然の現象でないことがわかると云ふやうな有樣で、實際支那文字と音韻との關係は、ゆるく、散漫に現れて居るものではない。今日の言語學と云ふ科學的學問の眼からすると、其の間に沒す可からざる、一定の秩序の伏在して居ることを見るのである。吾人は、漢字問題のやかましい今日の社會に於いて此の側の研究を盛にすると云ふことは、單に學問上のみの利益ではあるまいと思はれる。

第二章　音韻研究の參考資料に就いて

總べて學問には嚴密に云ふ境界なるものは認めにくく、從つて通常何々學と云つては居るものの、其の研究は、實際其の人の趣味造詣の如何によりて色合ひが違つて來る。まして輓近科學的研究の進歩につれて歸納の方法が最も重んぜられて舊來の如く、一學問のみからの斷定はそれ程の價値を有しないこととなつた。さればその參考資料の如きも如何なる範圍迄が一學問の參考となすべきものなるか、わからなくなる。從つて其の觀る人の觀方によつては其の同じ材料でも其價値に上下輕重の生ず可きは固よりである。

音韻研究の如き學問に於いても舊來の所謂音韻學であるならばいざ不知。今日の科學的見地よりすれば、あらゆる總べての文獻と事物とは之に密接の關係があり、從つてすべての學術に聯絡して來るわけである。言語の學が其の該博なる內容を有して居るのと同じやうに此の音韻の學も亦頗る多方面の材料を要するのである。舊來の音韻學で悉曇の學、デヴァナガリに通ずれば、あとは支那古典に見えたる文字の韻字排列、竝びに韻鏡の研究ぐらゐにて能事了れりとせられて居た。併し泰西言語學、音聲學などの隆盛になつて來た今日の音韻學は到底昔流のことのみで滿足して居てはいけない。研究

の材料其のものの中には素とより舊來の資料をも參照しなければならぬが、之と同時に、書物の上の文字のみをあてにせずして別に生きたる言語上の音聲、音調のことをも考へに入れ又各地方の音上の性質とか變化のことをも調査することに勉むべきは素とよりのこと、尙、總べて此れ等の研究をなす方法上の點に就いても深く注意しなければならぬやうになつて來た。

清朝の音韻學は朱駿聲が起つて以來支那歷代の音韻觀察法上に一新面目を施すに至つた。けれども尙、語の韻（語尾音）のみの觀察に執する舊套は之を十分に脫することが出來なかつた。明治昭代の音韻學は之に鑑みて更に一層大いに一新開拓を試みなければならぬ。

學術の研究に材料のことをやかましく云ひ、吟味することは素とより然る可きことである。けれども學術の研究には尙他に之と同じ位の價値を有するものが存して居る。研究法を十分科學的に嚴密になすべきことが卽ちそれである。從つて我が音韻研究の參考書に於いても材料としての參考書の外に之を如何に取扱ふ可きかの方法を敎示せる輓近の科學書を加へて吟味することがこれ又頗る重要な點であると思ふ。

要するに今日の音韻研究の資料は單なる所謂韻書のみに限らずして歷史上の參考書、經學方面の註疏類、文學上の歌詞小說其の他金石碑文、土俗方言音に至るまで、又之と相對す可き西洋の科學的研究法上の參考書は悉く網羅せられなければならぬ。

新しい意味の支那の音韻學は今日未だ起つて居ない。今漸く起らんとしつゝある氣運に向つて居ると云ふ丈けである。太田全齋、黑川春村、岡本保孝木村正辭博士のあとは、日本で韻鏡研究の大島正健博士ぐらゐになつて居る。風前の燈火か草葉の露か誠に今は絕えなんとして居る。聞く、支那にも唯三人の音韻家あり一人は廣東省にあり。あと二人は消息頓と聞えずとのことである。

幸にして音韻研究の舊來の材料としては日本に韻鏡が傳つて殘り、支那に說文の音韻の側の研究が少なからずある。其の他漢魏以來經學詩文の方面に數多の註釋ものが出て居る。且つ音韻學其のものの基礎を鞏固ならしめる材料としては西洋殊に獨逸、佛蘭西、英國に音聲の專門學が非常なる進步をなして現に研究せられて居る。之は他山の石として十分に利用しなければならぬ。

音聲學の原則をかりて來て之によりて支那四千年の音韻を切りひらかんには、頗る痛快なる結果を得ることがあるにきまつて居ると思ふ。他山の石を以つて東洋の音韻學を研鑽し得ることは今日の學術進步の賜物である。之を以つて必ずしも今を上げて古を下ぐるの必要はない。今日の研究は今日の最近の方法を以つてすれば事足りるわけである。唯西洋人の研究は所謂西洋を對象としたるかれ等の研究なること云ふまでもなければ其の研究結果の全部を擧げて其のまゝ支那に適用し得るや否やは考ふ可きことである。併しともかく適用して見る丈けは何の妨か是れあらん。唯西洋にてかくある故に支那にもかくあらざる可からずとなすの弊に陷らざる樣注意すれば足りるのみ。

廣義に於ける音韻參考資料の性質に就いては大略既にも述べた通り、出來得る限り各方面のものを要する。それを一々玆に列擧することは省いておいて、唯狹義の意味に於けるものについて玆に述べておかう。

音韻學に直接關係ある參考書は其の書の存否如何に關せず擧げて廣西の謝啓昆編『小學攷』第二十九卷より第四十四卷に至る十五卷の中に列べられて居る。卽ち隋書經籍志に見えたる魏の李登の聲類に筆を起こして、清朝の江永の音學辨微、潘遂先の聲音發原圖解、戴震の轉語に至るまでを解題風に叙してある。近くは桂湖村氏の漢籍解題中にも多少は見え、之には西儒耳目資などの如き珍本も紹介してある。

『小學攷』に『存』として、見えて居るものでも吾人の見ることの出來ないものが頗る多くある。世の韻書のうちにはまゝ表題のみは音韻の書らしくして內容はそれ程のものでないものもある。ともかくも今左に一參考となすの値あるものの書目を擧げておく。

古今中外音韻通例　紫庭
音學五書　顧炎武
韻岐　江昱
韻鏡　張畊
古韻發明　清允祿等
音韻闡微　清虞德升等
諧聲品字箋附　安古
古韻溯源　梁顧野王
玉篇（零本）　隋陸法言
廣韻　（朝鮮本）
奎章全韻（御定）　寶田敬
四書反切一覽　大島正健
支那古韻考（前編）　宋、丁度等
集韻　伊澤修二
日清字音鑑　小川尙義
日台大辭典　清江永
古音標準　（朝鮮本）
譯語類解　（朝鮮本）
正音通釋

華東正音通釋韻考　韓、朴性源
音韻逢源　清、裕恩
明治三十五年十一月十五日官報――外國語音譯報告
明治三十六年十二月二十六日官報――（右增補）
漢魏音　江亮吉
古韻通說　龍啓瑞
述均　夏燮
說文解字注　段玉裁
說文諧聲譜　張成孫
說文聲讀表　苗夔
說文聲訂　苗夔
說文音均表　江沅
說文聲類　嚴可均
說文通訓定聲　朱駿聲
說文管見　胡秉虔
說文韻譜攷　王筠
說文釋例　王筠
說文聲系　姚文田

これ等は一二のものを除けば、他はそれ程に研究を示したものに非ず。從つて音韻研究上にそれ程に直接の良參考書となるものでもないやうに思ふ。尙此の外小學研究參考書は卷末の書目に就いて見るべし。

此れ等の資料の外に一般のもので尙間接に音韻の研究資料となす可き主なるものは次ぎの如きものである。

詩三百篇、毛傳
書
易
左傳
國語
楚辭
爾雅

小爾雅
方言
釋名
漢魏音
史記外國傳
漢書
後漢書　地理志
魏書
文選
隋書
唐書
枳橘易士集
金史語解
遼史拾遺
元史

嶺外代答
星槎勝覽
瀛外勝覽
王氏五種
經籍纂詁
五車韻瑞
華夷譯語

Julien, st. Méthode pour dechiffrer et transcrire les noms sanskrits qui se rencontrent dans les livres Chinois par. 1861.

Schlegel Dr. G.: Nederlandsch-Chineesch Woordenboek (1886).
（荷華文語類參）

Hirth, Fr. Research in China-Syllabary of Chinese Sounds 1907.

Bonnet:—Dictionaire annamite francaise.（大南國音字彙解大法國音）

Tung Pao.

China Review.

Baldwin, Rev. C.: A manual of the Foochow dialect 1871.

Cadièr L. Phonetique annamite. par. 1902.

Chalmers, John. An account of the structure of Chinese Characters 1882.

Grube, Wilhelm. Die Sprache und Schrift der Zuëen 1896.

Henderson, Vinc. Tibetan manual 1903.

Plath, Uber die Tonsprache der alten Chinesen.

La Couperie, Terrien de,: Beginings of Writing 1894.

Klaproth, J. Asia polyglotta mit Sprach-atlas. 1823.

Jaesckey, Tibetan-English dictionary.

Hunter, W. Languages of India and High Asia 1868.

Bonet, Jean: Dictionnaire Annamite-Français (langue officielle et langue vulgaire) 1898 大南國音字彙合璧大法國音

Chalmers John: English and Cantonese Dictionary 1907. 英粵字典

Eitel, E. J. Chinese dictionary in the Cantonese dialect.

Williams, W. Syllabic dictionary of the Chinese language 1874.

Giles, H. Chinese English dictionary 1892. (目下再版增補印刷中)

(尙此の種の材料については卷末に擧げたるものを參照すべし)

Vitor, W. Elemente der Phonetik und orthoepie des deutschen, englischen und französischen 1887.

Sievers, E. Grundzüge der phonetik zur einführung in des studium der lautlehre der indogermanischen sprachen 1885.

Sweet, H. Handbook of phonetics 1877.

Müller, Max: Science of language II. (第二卷目)

Gabelentz, G. V. der: Chinesische Grammatik. (漢文經緯) 1881.

Paul, Hermann. Grundriss der Germanische Philologie 1900.

要するに材料は殆んど際限なくある。音韻學を單なる韻鏡の上の學問でなく、廣義に解して、言語學、歷史學、博物學、法政史の學問其の他土俗學、宗教學などと俱に手を携へて研究をすゝむることとすると其の材料は十萬に近いことと思ふ。唯此の材料を如何に活用し如何に整理して支那の音韻學の建設に資するか。これは大問題である。獨り音韻學ばかりでない、支那の研究は今日其の研究の方法を大いに改めなければならぬのである。

研究の方法を重く視なかつたのは舊來漢字研究の弊である。近頃鹽谷先生なども此の點について親

しく自分に語られたことがあつた。自分も竊かに同說であるが、其の新研究法を取る前に豫め少なくとも四五十年の準備時代を要することと思ふ。生ける字引、生ける索引となることが是れ中々の大事業である。眞の新研究は然して後に始めて起る可きもの。それまでは到底斷片的の穿鑿に過ぎないのである。

第三章　漢字音の研究法

一　緒論

從來我が國の字音觀察に、所謂漢音、吳音、唐音なる三種の範疇(Categories)が立てられて居たことは、更めて云ふ迄もない。而して、其の音の區別に就いては、これ迄漢音は、長安、洛陽地方、卽ち黃河方面の音であつて、吳音は江左地方、卽ち揚子江下流域の方面の音であると考へられ、而して唐音とは西曆八九世紀以後、つまり唐以後の音で明末、淸初のものまでをも尙此のうちに容れて呼んで居た。それ故漢音吳音の二者は共に地理上の考が主になつて居たやうであるが、唐音に於いては時代の方の考を主にして居たものと思はれる。

漢字三音の區別は、これ迄かくの如く、地理上と歷史上の兩觀察面を混同して居た傾きがあつた。のみならず、此れ等三音に就いての研究は、固より全く健全な科學的の基礎を有しては居らなかつた。其の果して元來、三音の間に認め得べき程の區別の存立し得るものなるや、否やの先決問題すらもが未だ、攷究せられては居らなかつたのである。而かも漢吳唐なる三音の區別は他く迄强ひて保守せられなければならぬものとせられて居た。その所謂吳音の特色と見られる點が、漢音のうちに亦少なからず發見せられると云ふ類の不合理は、從來あまり注意せられては居なかつた。況して所謂日本の三音そのものと、支那本土の原音との比較研究とか、或は又、三韓の媒介に依れる百濟音化した音と前者との相互の比較研究などに至つても無論全く注意せられて居なかつたのである。

今日の觀察とても無論後日の研究によつて、いつ破壞せられるかも知れないが、若し舊來の漢字觀察にして、爰に根本的開拓が許されるならば、先づ第一漢音吳音唐音などと云ふ非科學的の呼び別けは全く除去してしまはなければなるまいと思ふ。卽ち漢吳唐とはつまり『支那』なる語の別名としてひと纏めに攷へても差支なきことと思はれる。元來此の三音の呼びわけは、研究法上の便宜に立てられた名稱であらうけれども、實際の研究が、反つて、此の爲めに拘束せられる弊を見るに至つては、寧ろその名稱存在の價値を疑はざるを得ない。それ故吾人は漢音吳音唐音の研究は、之を先づ支那文字の音韻研究と廣義に解し置くの必要を感ずるのである。

此の支那文字の音韻研究には、言語學(Science of language)上の觀察を以て根本の基礎としなけ

ればならぬ。如何に文字上の現象の攷究であるとは云つても、其の音韻が言語の影響を受けないで居ることは、殆んどなく、又言語上の意義の方面からも、少なからぬ影響を蒙るのである。字音の研究には其のうちでも音韻上のしらべが無論第一の眼目であるから、此の側に向つて特に音聲學(Phonetics)の補助を俟たなければならぬ。然れども、又文字そのものの形の方の知識殊に其の表音的要素たる音符(Phonetical symbol)に就いての研究を缺く時は、單なる言葉の音韻研究にはなり得ても文字の音韻研究とはなりにくい。依つて支那文字の音の研究には、音聲學上の補助智識の外に更に、文字學上の補助知識を必要とするのである。

然らば言語學上の立脚地から觀たる支那の字音研究は之を如何に觀察すべきものなるか。其の方法は如何。今日までの自分の考では次ぎのやうな項目の示す所に從つて出發して行つたならば如何かと思はれる。卽ち

一、北京官話に於ける現代の字音研究
二、各時代の記錄に現れた字音研究
　イ、歷史に關するものの比較研究
　ロ、佛典に關するものの比較研究
三、支那各方言に於ける字音の比較研究
　イ、安南音
　ロ、朝鮮音
　ハ、日本音
五、支那文字に現れた音韻現象の比較研究
六、結論

である。

歐洲に起つて、歐洲で發達を遂げた印歐言語學は、無論、東洋に在るやうな文字に就いての研究と共に、相竝んで發達し來たつたものでないことは固よりである。それ故印歐言語學の全部を以て、其のまゝ支那に適用するは考ふべきことである。支那には支那特有に言語そのものに重きを置いた時代もあれば、又文字上に重きが置かれた時代も考へられる。つまり支那で言語と、文字は車の兩輪の如き關係で發達し來たつて居るのである。西洋と支那は此の點に相違を有することを豫め前提として含み置きて字音の觀察に這入ることが必要である。

從來に於ける字音の專門的觀察は云ふ迄もなく卽ち韻鏡の學問であつた。韻鏡の學問は、今日未だ之を十分科學的に理解し去ることは、自分には困難に感ずる。寧ろ自分は韻鏡を以つて字音研究の一參考資料となし眞の字音研究の本體は飽く迄國の內外、時の古今よりして縱橫自在に、ひろく觀察す

るに在ると思はれる。この故に上擧のやうな五方面からの研究がこゝに特に必要である所以である。今左にその各項に就いて順次觀察を試みて見よう。

二　北京官話に於ける現代の字音の研究

記錄の上に現れた字音の現象などは、如何に精密であつても、現在耳にすることの出來る實際の音に比ぶれは無論粗である。眞の字音研究なるものは、紙の上に書かれた字形よりも、實際の音そのものに依らなければ、十分の研究は進めがたい。固より實際の音そのものと云つても、現代の支那音と古代のものとは、全然同一としては考へられぬ。けれども現代のものにして、十分明かにせられた場合には、之によつて古代の不分明の點を推すことは可能である。又それが最も手近い便利な方法である。假令その必ずしも古代を推すの必要はなく共、現代に於ける字音の現象が、如何なる特色を有し、如何なる傾向を有して進んで居るかを窮めることが、既に字音研究に取つて缺く可からざる出發點である。

今、現代の北京音に就いて考ふるに、日本の字音などでは到底今日知ることの出來ない現象でも、之には普通の現象として現れて居ることがある。例へば日本で語尾音としてウで現れて居るものが、支那では明かに ン——ng の音で殘つて居る。公(コウ)がクン k'ung であり當(タウ)がタン t'ang であるなどはその一例である。尙英がイン ying 聲(シヤウ)がシヨン sheng として殘つて居る如く、日本の語尾音イも亦彼の地で ン——ng で讀まれて居る。尙日本には、全然缺けて居る有氣音 (aspirate) などの如きも支那でならば、精密に窺ふことが出來る。卽ち改の字の無氣音カイ Kai に對して、開、楷などは明かにカイ K'ai ときつく有氣音で讀まれて居り、又黨、宕の無氣音タン tang に對して、湯、唐などの音は激しくタン、t'ang として卽ち有氣音で呼ばれて居る。其の他然、人、又、饒、讓などの語頭 (initial) に立つ音の如きこれも到底、日本の字音には窺ふことの出來ない音である。又かの有名な四聲の別なども支那に保存されて居る。其の外母音に就いても歸、龜、軏、貴、鬼、揆のやうに日本では唯のキ Ki として單なるイで發音せられて居るものもその實原音のクエイ kuei 卽ちウエイの三重母音を有することが知られる。

上に述べ來つたものは、唯僅かの例にしか過ぎないが、單に之に依つて見ても、如何に日本に於ける字音が、無造作に混同し來つて居るかがわかる、と同時に又、字音研究の標準たる Norm は其の本家本元たる支那の方に在るといふことが察せられるのである。

三　各時代の記錄に現れた字音の研究

現代の北平音は、上述の如く字音研究のノルムを與へるものであるとは云ひ得ても、之に依つて過

去の音現象を十分、明かならしめることはむづかしい。縱ひ現代を以つて、古代に泝り推察することは出來ようとも、之を一層確かむるには更に他の資料を要するのである。玆に論ぜんとする古記錄に現れたる字音の研究の如きは卽ちその一つである。我が國に於いても後世の字音が記紀萬葉とか倭名鈔とかに現れた音と、少なからぬ相違を有せることの一事に依つて見ても、此の間の研究の必要が察せられる。支那では、從來、韻書に見えた反切法によつて、其の本音を知り、或は又、音通文字の關係から其の字音を推定するなどの方法が行はれて居た。勿論これ等も音韻推定の一方法でないのではない。併し玆には更に新研究法として、別に歷史に關するもの、又は佛典に關するもののうちから、頗る有力なる研究上の手懸りを得ることの出來るものであると云ふことを述べたいのである。

昔し齊の田氏が姓を改めて陳氏とした。當時田と陳とはその齊の地方では、同音の文字であつたのかどうかと云ふ說は、未だ十分に可否しがたいが、少しく眼を他に轉じて、外國の地名、人名、種族名などの支那音譯によつて見ると、よく古代に於ける字音の有樣が窺はれるのである。左にその實例を少しく擧げて見よう。

前漢書に西域の地名 Kōtan を于塡でうつし、尙、中央亞細亞の Sirdaria 河の異名 Yaksartes 河のことを、藥殺水と音譯して居る。これによると當時于の字音がコー Kō の音で藥の字音がヤク yak（今の北平音では于は yü 藥は yüe なれど）であつたことが察せられる。又唐書に Sungari を宋瓦卽ち Sung-gua でうつして居る。今の支那音で瓦は wa であるが當時の音の一斑はこの音譯にても察せられる。又拓跋、慕容など云ふ外民族の名で例へばその慕容とは女眞語の『榮ゆる』又は『富』の義であつて（Grube 氏の研究による）其の音はバーヤン Bāyang である。依つて考ふるにその慕の字は Bā の音をうつし、容の字は yang を音譯して居るものであることがわかる。因みに云ふ、元露西亞の軍艦のバーヤン Bāyang なる名は卽ち此の語を取つたものである。尙音譯文字として用ひられたものに白達（Bagdat）の音譯があり。又喜馬拉剌耶（Himaraya）の如きものもある。喜の字の音は素とキ Ki でなく寧ろヒ Hi をその本音として居たことの一傍證にこれがなるわけである。

更に佛典に關するもののうちより、其の音譯について觀るに、其の音譯は云ふまでもなく、印度のサンスクリット Sanskrit を寫したものであるが、例へば Kumbhira を寫すに金毘羅を以つてし、Buddha を寫すに佛陀をあて、尙 Bhikkhūnam の音譯を比丘那として居るが如き、孰れも、よくその字音を正しく現はして居るものと云ふべきである。總じて、佛典に關する音譯は、歷史に關するものに比して、一層精密に出來て居るが普通であるが、わけて玄奘三藏の音譯ものの如きは、頗る微細な點まで注意をして、うつして居る。音譯もので、原語と對譯文字のよく一致符合せるは、此れが右に出づるもの、殆んどなしと云つても過言であるまい。

以上は、過去に於ける記錄から字音研究の手掛りが得られるとこを指摘したのである。卽ち之に依

つて、其の記錄當時の字音は略推定することが出來る。併しながら古記錄の音譯を以つて、徹頭徹尾、信賴するに足るものとなし、其の音譯の總べてを、その當時の音なりとするは、危險の極みである。往々誤まれる音譯のあるは固より、尙又何れの時代にも舊來の音譯の方法にそのまゝ則とる習慣などもあり、或は又文字上の好き嫌ひがある等のことよりして、必ずしも其の當時の音を精確に現して居らないことのあるは、云ふを俟たない。それ故、古音の研究に於いて、餘りに音譯を重く視るは考ふべきことで、要はそれがたゞ古音を考ふる上の一參考資料たるに過ぎぬと云ふまでである。

四　支那各方言に於ける字音の比較研究

北平官話の音韻現象は、よく字音研究に機微なる手懸りを與へて居るものであるとは云ふものの、古音の觀察とか、日本に於ける字音の研究などに資する爲めには、更に支那の方言音、殊に南支地方で漢字が如何に發音せられて居るかを觀察することが頗る必要である。單にこれは我が國の字音研究に資するばかりでなく、北支地方の今日の字音が、由つて生じ來たつた徑路を確める上にも、頗る緊要なる一資料となるのであり、又上述の古記錄に散見した音譯文字の音韻を闡明する上にも、少なからぬ關鍵を與へるものとなるのである。

遼史拾遺に見えて居る音譯『提烈』(蒙古語の Tarikhu 耕作の義)は、北平音では Ti-lieh であるが、之を南支音、例へば廣東音で讀めば Tai-lyt の音として讀まれるのである。尙北平で『三十』の字音は San-shih で、之には毫も古音の姿は認められないけれども、南支厦門あたりでは之をサム、ツァップ Sam-tsap と現に讀んで居る。我が臺灣でも、亦之と同じ讀方をして居る。其の外、鵶(くつ)の字なども北平では、Yü の音であるが、廣東省の或る地方に行けば、キツ Kit 又はケツ Ket の音で讀んで居るのである。これは橘の字と思ひ合せて、頗る面白い現象と考へられる。

又北平地方には、今日入聲音が全く消滅してしまつて、何等の影も今は留めて居なくなつて居るのに反して、南支地方には、殆んど漏れなく總べて之を保存して居る。尙且つ語頭に立つ Consonant も北支地方に於けるものの如くに變遷することなく、比較的素との古形にて現存せられて居ることを見る。同じく南支方言と云つても、殊に其の古い字音を有する地方は卽ち厦門、仙頭(せんとう)、廣州あたりで、卽ち海岸に比較的近い方面の地方に限られ居るのである。湖南、貴州、廣西などの內地の方面にはあまり古い字音の俤は留められて居ないやうであつて、寧ろ、古音は浙江あたりの中淸地方の方に、反つて多く殘つて居るのである。

要するに、方言分布の上より、支那本部を見渡すと、北支地方では、最も新しい字音を發達させて居るが、その漸次南下するに從つて、古音と認められるものを益多く有して居るやうに觀察せられる。畢竟、北平を起點として、南下すれば、さながら現代の北支音から、過去の歷史時代に泝つて古い字

音を辿ると、同じ道理になると云ふことが出來るのである。

五　隣國に於ける字音の研究

支那文字の音韻現象は、同じ支那語の話されて居る範圍内では、假令その音に標準音と方言音との差はあるにせよ、早晩同一の方向に向つて、變遷發達をなして行くものと推定せられる。少なくとも、その傾向を有することは可能である。唯その發達に遲速の差がある位のことである。然るに若しこれが外國の場合であると、多くはその影響を蒙らないで、殆んど獨立した姿で存在して居るのである。殊にそれが、支那語と言語上の系統を別にして居る國語に在つては、特に著しくその現象を見るのである。安南は支那に對して、現今外國として目せられては居るものの言語上の關係は左迄とび離れたものでなく同系統内に屬して居る。之に反して、朝鮮及び日本は古來支那と文化上の交通關係はあれ程に密であつたが言語上の關係は今更云ふ迄もなく根本に於いて全く別である。從つて兩者の語法が、全然融合するやうなことは決してない。本居宣長翁も云つて居られる通り、支那の字音は、日本に這入つてからは、最早や殆んど變遷することなく、宛かも化石のやうになつて特別に保存せられて居るのである。と、全然變化しないのではないが、大體に於いて、よく其の原音に近い姿を留めて居るのである。日本には上代三韓を經て間接に輸入せられた字音を有することは少くないであらうが、韓半島の方はその直輸入のものが多い筈であれば、從つて勢ひ、日本よりも、支那原音に一層近い形で殘つて居るものも亦多かるべき譯である。左に安南、朝鮮、及び日本の各の字音に就き更に少しく觀察して見よう。

イ、安南音

安南は支那の古音を現存して居る隣國の一つである。今、その一二の例に依つて之を觀るに、支那で shou の音で知られて居る『手』の字が安南音では tu で現れて居る。又『陽』の字は支那の方では yang の音を有して居るのに反して、安南では doung 又は danh の字音である。これは tang の古音の安南訛りであるかと思はれる。その他、天と同類語と考へられる『神』が安南では卽ち tten の音で殘つて居り、又『勺』とか『芍』とかの音も、古音の tŏk で現存して居る。此の勺は、『的』の字に於ける勺と同音を有して居たものであつて、之を shak とか shau, shou とかに讀んで居るのは眞の原音から、餘程離れて居る訛音と思はれる。その他、北支で san-shih 南支で sam-tsap の音であると云つた『三十』の音は安南では、更に進つた音で、卽ち tam-tap と讀んで居る。

玆に擧げた安南音は、T音を語頭 (initial) に有する字音の例である、が總じて、安南には支那の南支地方に於いてさへ見あたらない程の、古い音を漢字音の上に保留して居る。それ故安南の字音は、支那の字音を研究するに當つて、其の外部からの觀察資料として、頗る重要の位置を占めるべき筈のも

のである。安南が外國の故を以つて、其字音までを別扱ひにするは、第一漢字音の科學的研究の本意にもとるのみならず之が研究上頗る不利益なわけであらうと思はれる。

ロ、朝鮮音

奎章全韻と云ふ朝鮮の韻書によると、支那でマオ mao の音で現れて居る『冒』の字が号卽ちmuk の音で現れて居る。素と冒は『目』の字の音に依つたものであれば、muk の音であるのが、卽ち原音に近い音であると云ふことが出來る。又朝鮮で『心配なる』と云ふことを、

적뿌 (kök chyong han)

と云つて居るが、此の kök chyong とは、支那の字音『曲情』から來たものである。『曲』は今の北平音で chü の音で、入聲は全く消えてなくなつてゐる。素と、此の字は『玉』の字古體を含んで居た文字で、其の音も亦『玉』の音に依つてゐた者である。朝鮮音に kök とあるは其の原音に近い形として考へることが出來る。尙前節にも擧げて置いた『三十』の音は韓音で如何と云ふに、

삼십 (san sip)

である。北平の san-shih の音に比較してこれが如何にその固有の原形に近い音なるかが察せられる。其の外、惡魔のことを朝鮮語で、

잡귀 (chap-kui)

と云ふ。これは明かに『雜鬼』の字音である。『雜』の支那北平音の tsa よりもこの方が遙かに、古い音である。

以上『冒』、『曲』、『三』、『十』、『雜』などの字音に依つて見ても、朝鮮の字音が如何に漢字音の比較研究の上に、興味のある手懸りを與へて居るかがわかる。これは卽ち南のかた安南の字音と、南北相應じて中間の支那音を挾み、外部研究を進める上に缺く可からざる重要の位置を占めて居るものである。

●　ハ、日本音

我が國に於ける支那文字の音譯は、固より日本固有の音韻の特質其の他種々の力に支配せられて、多くの訛音を生じて居る。又上代以來幾度か文化上の波に打たれ打たれて、その度毎に打ち寄せられた漢字の音は、決して同一と云ふわけではない。けれども支那の古音は、比較的よく損ぜられずに殘つて居る。唯その音韻形式の古さが朝鮮のそれに及ばないと云ふことと餘りに訛言に富んでゐると云ふまでである。上來、各節で擧げた字音の比較に依つて見ても、其の日本音と安南又は朝鮮音との徑庭は、左まで甚しくはないが、北平音とは著しい違ひのあることが見られるのである。

北平に見られる、宕、相の字音は、それぞれ tang, hsiang の音である。日本の今の音で云ふまでもなく、宕はトオ、相はソオとして知られて居る。併しながら、奈良朝時代の記錄とか、又は後の地名などを參照する時は宕は tagi 又は tago として現れて居り、又相は saga として讀まれて居る位

であるから、之に依つて宕の tang, 相の sang たりしことを推定するは難くない。其の他例の『三十』の音の如きも、三は三位（サンミ sammi）の場合に、その sam なることを知り、十はシフの歴史的假名遣ひによりて卽ちpの入聲音なることを推定することが出來るのである。

かやうに觀察して來る時は、日本に於ける、漢字音は、安南及び朝鮮のそれに相次いで支那の字音研究には沒すべからざる位置を占めて居るものである。殊にその古音の研究に至つては、吾人日本人は最もその都合よき位置に居るのであると云ひ得られる。

以上第一節から第四節迄に述べたところは、主として言語學上の立脚地から漢字音の觀察をなした者である。卽ち或は歴史的方面から、或は地理上の方面から縱横に研究する方法に就いて、その例證を擧げつゝ概說を試みたのである。玄かし、字音の研究には、單に以上の言語學上からの觀方を以つて滿足することなく、更に文字そのものの立ち場からして、字音の現象を觀察する方法がある。左に此の方面について、少しく述べて見よう。

六　支那文字に現れた音韻現象の比較研究

支那文字は、いつも常套語として、象形文字とか、義字とかの名を冠らされて居た。素とよりその象形義字たる呼び方が、誤つてゐるのではない、けれども併し、それ以外に、尙漢字は音字たるの性質をも備へてゐるものであると云ふことに注意しなければならぬ。これは支那文字の音韻研究の上に頗る重要なる根本觀念であるから、特に意を留めて置く必要があると思ふ。而かも此の側の研究は、上來述べた言語學上からの研究と、其の研究價値に於いて、少しも讓るところなきのみか、反つて簡にして要を得た方法であると信ずるのである。

今玆に『編輯』なる二字を採つて、何故に此れがペンシフの音を取れるかを考ふるに、其の『編』及び『輯』の文字は次ぎの如くたくさんの同音文字に比較せられるのである。

編に對して偏、徧、蝙、騙、遍、篇……『扁』

輯に對して、揖、楫、緝、戢、諿、葺……『耳』

卽ち編に對する一群のものは、その共通の部分として、扁の字を有し、輯に對する一群は扁の字を共通に含んで居る。扁と云ひ、耳と云ふ形こそ普通の字であれ、その實は、單なる音符號（Phonetical symbol）であるに過ぎぬ。それ故前の一群は、扁の音の系統に屬し、後の一群は耳の音の系統に屬するものとして考へることが出來る。それ故編の音のその音ペンを有する所以は、その音符のペンの音を指せるに由るものであつて、輯の字も亦之と同理に基くのである。糸偏及び車偏は唯その文字の意義の範疇を、暗示せる意義要素（Bedeutungs element）たるに過ぎないのである。

扁及び耳と同じく常に殆んど同一の音を現はす符號として、役立つて居るものは、尙他に少なから

すある。例へば、

『辰』の音符に依れるもの　宸、震、晨、屖、脣、蜃、振、賑

『章』の音符に依れるもの　漳、樟、璋、障、獐、彰

『堇』の音符に依れるもの　僅、槿、瑾、謹、饉、覲、勤、懃、瘟

の如きものである。

然れども、その普通最も多く見るものは、同一の音符が他の音に轉訛して、別の音を示して居る方のものである。卽ちその例をあぐれば、

是　『是』は醍、題、提（菩提）などに於いては、ダイの音であるが、隄、堤、提（提出）の時はテイとなり、匙の字の場合には、更に轉じてシの音となつて居る。其の複合文字を形成しない單獨の場合には、又ゼ（是非）の音となることもある。去かし支那では、シの音である。卽ち不是を pu shi　と讀む。

隹　『隹』は堆、碓の場合には、タイの音符として現れ、崔、催、摧にはサイ、誰、推にはスイ。唯にはウイとして現れて居る。支那音で云へば堆、碓は tui 崔、催、摧は ts'ui 誰、推は hsui 唯は Wei の音である。同じ『隹』の音符でもかやうに色々と變じて居る。

區　『區』は驅、嘔、驅の時は『區』の音と同樣の音を現はして居るが、樞の場合には、スの音となり、嘔、嫗、謳、歐、毆、甌、鷗などの場合にはオオ支那音で云へば、ou 又は yü の音を現はす音符となつて居る。

卯　『卯』は茆、貿の時は、ボオ支那音でマオ mao の音の符號となつてゐるが柳、留、榴、溜、劉聊などの場合にはリウの音符として現れて居る。

かやうに、同一の音符が、一種以上の音を現はす音符となつて居ることもあるのであるが、兎も角も漢字には、其の構成要素のうちに、表音的の符號が含まれて居る。時としては、此れの含まれてゐないものもないではないが、それは極めて少數である。普通複合の文字である以上は、殆んど其の九部通りまで此れを含んだ文字である。從來此の種の文字は諧聲文字と一般に稱せられて居た。此の諧聲文字の音韻研究は、これ迄支那人中に朱駿聲などのやうな多少之に手を着けようとした人もあつたが、未だ研究と云ふ程には至つて居らぬ。支那文字の此の側の研究は、極めて重要な點であつて、單に字音の研究に裨益するばかりではなく、支那の文字學並びに言語學そのものの上に莫大の裨益を與へるのである。

尙此の音符の上で研究せらるべきこととして注意すべきは、入聲音の變幻出沒の狀態である。支那の古代に存して、今は一存せず、支那の南方に存して、北方には消滅に歸せる此の入聲音の現象が單に文字の上で而かも言語以上によくも觀察せられるとは、頗る興味のあることである。今左にその二

三の例を擧げて見れば、

兌　『兌』は脫、說(演說)、悅の時は入聲音で現れて居るにも拘らず、兌、說(遊說)、稅、銳の場合には全く入聲でなくなつて居る。

末　『末』は沫、抹、秣の場合には入聲音で現れ、昧の時はマイの音を示す符號となつて居る。

由　『由』はその單獨の場合及び柚、抽、油、岫、袖、宙などの時は入聲音の姿は全く見えて居ないが、笛、廸(もとは迪なり)などに於いては、確かにその嘗つて一度入聲音たりしことを告げて居るのである。

亞　『亞』の如きも、その單獨の場合及び好惡に於ける惡の音符としては、入聲でないが、惡(善惡)と讀む場合の音は、明かに入聲音である。

以上の如き現象を前提として考ふる時は、從來全く入聲音に關係なきものとして認められて居たものに存外入聲音たりしものがありはしなかつたか、との疑問が起らざるを得ない。果せるかな先秦の文獻を註せるものを見るに、まゝ次ぎの如き珍らしい音を見るのである。卽ち、

背　pai が……pak;　　界　kai が……kok

來　lai が……lok　　掣　sei が……set (瘵)

逝　sei が……set

と云ふ現象が推定せられる。これは强ちに、奇なる音として、度外視すべきものではない。

上述の例は、固より、研究上の僅か一端にしか過ぎない。こゝで十分の立證をすることは許されないが、此れによりて文字學上の觀方が、如何に字音の深い研究に向つて、趣味のある手懸りを與へて居るかの一斑が察せられるであらうと思はれる。

七　結　論

以上五節は所謂漢字音の研究を、支那文字の音韻研究と云ふ科學的の概念に改めて、其の研究法の大體を論述したのである。つまり從來の所謂漢字三音考流の觀方を根本から打ちこはして、此れが研究法に科學の基礎を與へることが必要である。一體此の字音の研究はこれ迄殆んど全く研究らしい研究も出來て居なかつたのであるが又實際その研究は頗る困難であるのである。わけて古音の研究は極めてむづかしい。其の音譯文字を取扱ふに當つてもこれには何れの時代にも舊來の音譯を襲用する癖のあることを注意しなければならぬ。近くは我が國に於いても Egypt を『埃』(アイ)『及』(キフ)でうつし Australia を『濠』(ゴウ)州(シユウ)でうつし Sanfransisco の san を『桑』としてうつす。日本で『及』はキュウの音で gyp の音からは餘程遠い。又『濠』の日本音はゴーで Au の音とは近くない。尙『桑』の音も San の音とはちがふ。玄かし、これらは素と支那人の音譯であつて支那では『及』は gip, kip,『濠』は

au,『桑』は sang であつて卽ち孰れも原地名の音譯文字としてよく該當せるものである。日本にはこれ等の音は決して現存して居ない。にも拘らずかゝる音譯がある。此の音譯の書かるゝに依つて、直ちに若し日本で現在『及』は kip『濠』は Au『桑』は sang と發音せられて居るが如く、結論を下すものありとせんか。固より當らざるの甚だしきものと云はれる譯である。こは、餘りに明かな誤りであるが、併し、これと似た結論を過去の音譯に就いて、なし易い傾向のあると云ふことだけは、十分の注意を玆に要する點である。尙此の外音譯物の上には又種々の心理學上の作用が、はたらいて居る形迹が少なからず見受けられる。之が爲め一層その取扱ひかたの困難が增すわけである。左にその一例をあげる。

魏書に西域の Tukhara の國を音譯して、都貨羅とある。それを唐書には吐火羅と改めて居る。同音であるとは云へ、その間の心理作用は、歷々として現れて居る。これは北狄を、獸偏の文字で書き、南蠻を蟲けら同樣に、呼びなすのと類似の觀念に基づいて居る流儀であつて、日本人が Deutsch を毛物偏（獨逸）と綽名して居るのも、或は之と聯絡したところはないか。兎も角、かやうに總べて音譯にはよかれ惡しかれ、感情上の要素が音以外に、加はる傾向のあると云ふことは、是れ亦音韻の觀察の上、大いに留意すべき點であると思はれる。

かやうに音譯のものには常に、前時代からの襲用があり、心理學上からの作用が加はり、又文字上の忌み嫌ひをなす等のことよりして、實際の音は爲めに、反つて其の實を現はすの機を失ふことが多い。さる事のある上に、音譯はその原語のアクセント(accent)のありか次第で、幾分支那語流に單簡に切り縮められることがある。例へば近くは English の如きは Eng にアクセントのある爲め『英吉利』Ingkili として Engli 迄をうつすも、最後の sh は殆んどうつされないことが多いと云ふ一事によつても、如何に原語のアクセントが音譯の仕方の上に影響するかがわかる。尙音譯を取拔ふには、其の音譯をなせし人が支那のどの地方の生れであるか。又其の音譯した地方はどこか、等の點までをも調査しなければ十分でない。もし南京方面の音譯を北方の者と取り違へるが如きことがあれば、其れは宛かも明代の者を淸朝のものの如くに誤認したことになるのである。それ故地理上のしらべは又沒す可からざる重要事項である。

古代の字音を音譯の上から研究する丈にでも、大略かくの如き類の困難に出遇はざるを得ない。之を音譯以外の方面に就いて考へて見ても、唯その困難の有樣が異なるまでであつて初めに擧げて置いた五方面の觀察には、共に孰れも周到緻密なる研究を積み重ねて、以つて之が研究方法の適否をためすの外に道はない。方言及び隣國の字の音の研究の如きは其の訛音の上の注意がよほど大切なる要素となる。之を冷淡に看過すると、研究が崩れて來るのである。要するに支那文字の音韻研究法は言語學上の科學的基礎からして歷史的に且つ地理上から觀察をめぐらし、その得たる結果を更に、文字上

に現れた音韻現象と比較對照し、これによつて其の間に存在する一種の法則を發見することに勉めなければならぬのである。

音韻研究殊に古音の新研究法としては以上五方面の觀察を以つて互に相補ふ可きものとする。そのうち孰れの一方面を缺きても研究法上はよろしくない。自分は此の五方面の言語學的に竝びに音聲學的研究法を以つて先づ今日のところで支那音研究の科學的方法と考へる。由來支那清朝學者の古音研究は之と大に趣きを異にし、單に詩三百篇の押韻より綜繹的に推定するの法があるに過ぎず。思ふに詩の押韻は清朝學者の認めたる如き韻を以つて仕組まれた者では必ずしもない。否研究の方法次第では四支の韻がその實十三職の韻であると云ふことも歸納せられる位で顧氏、段氏、江氏などの見解は必ずしも正鵠を得て居る者とは云へない點がある。音韻研究の舊弊は實に此の詩の押韻を唯一の標準として過重することの上に存する外に又反切の方法を過重したり、又漢吳音の區別に拘泥し過ぎたりなどする弊がある。古音の科學的研究で以つて今後これ等の押韻、反切、吳音の區別等を確立すべき時が到來しようとも、之を今日古音考覈の津筏なるが如くに早合點するは甚だ危險な方法と云はなければならぬ。つまり押韻、反切の兩法は古音確定の研究後に始めて裨益を得るものたるに過ぎぬものと自分は考へる。玆に附記して世の專門家に教を乞ふ次第である。

第四章　支那文字に現れた音韻の現象

歴史の研究上に補助となる可き學問の種類は頗る多樣で其の補助的知識の該博なることを要する點は社會學、言語學、法律學などと少しも變るところはあるまい。殊に東洋方面の歴史研究には一般史學研究法上の補助學の外に又特に文字上の知識を必要として居ることは無論である。

支那の文字は改めて云ふまでもなく上下三千年の言語上の符牒として使用せられて居たのみならず尙又其の歴史時代以前に於ける上古思想の表識として用ひられて居たものである。從つて東亞の研究上支那文字そのもののしらべがひいては有力な關鍵を之に與へることになる。玆かしこの支那文字を研究するにはその目的とするところが自ら二つある。

第一、古今の文獻一般の研究上の方便のためにしらべるもの。

第二、全く文字そのものを唯一の研究對象に取つてしらべるもの。

今玆に述べようとする文字の音韻に關する研究は無論この第一の場合にも應用はされるけれども元來が第二の方に屬して居るものであるから、順序として先づ此の側の研究範圍に就いて一言し以つて音韻研究が文字學（若しかやうに術語がつかはれるならば）上に於ける位置を明かにして置きたいと

思ふ。

純粹な文字學に於いては其の觀察の仕かたに種々の方面がある。例へば

一、世界文字の發達史上から觀た支那文字の位置

二、支那文字の起源構成竝びに發達に關する一般的研究

三、支那文字の外形に關する歷史的研究

四、支那文字の音韻に關する歷史的竝びに地理上の研究

五、支那文字の意義に關する研究

六、支那文字の書法に關する研究

七、支那文字が隣國の文字に及ぼした影響

從來支那文字の研究としては外形に關する方面の幾部分がしらべられた丈けで其れさへ金石文字の基礎的調査が至難であつた爲め十分の功を奏して居ない。然るに最近に於いて阮元、孫詒讓、劉心源、羅振玉、劉鐵雲、日本に高田氏、河井氏、などの根本研究の起つて以來漸く玆に、文字學の萌芽を見るに至つた。以下には研究などと云ふ程の者ではないが其の音韻に關する方面を支那の言葉の上から少しく觀察してみたいと思ふ。先づ玆に便宜上これを次のやうな項目の順序に別けて置く。

一、支那文字の音韻一般

イ、表音的文字

ロ、字音の轉換

ハ、k音とL音との關係

ニ、文字相互間に現れた言語上の關係

二、字音の歷史的沿革

三、字音の地理上に於ける分布

四、結論

一　支那文字の音韻一般

支那文字の音韻の側のしらべには常に其の文字をとほして實際の言語上の音を看破することが必要である。然るに實際の言語上の音は時と所とを異にするに從つて常に變化して行くから容易に眞を得がたく、又文字に於いても其の特質として形の上に音を現すことが出來ない爲め遂に確實な音を觀察することが出來ないで了る。舊來の反切法が音韻研究法上から見ると左ほどの價値を有して居ないことになるのも全く此の間の消息を告げて居るのであつて、つまり反切の基本ともなるその文字の音がいつも時と所をかへるに從つて轉々移り動いて行くからである。否文字上から云へばこれは全く支那

の文字が表音的でない爲めであると云ふことに煎じ詰められる。

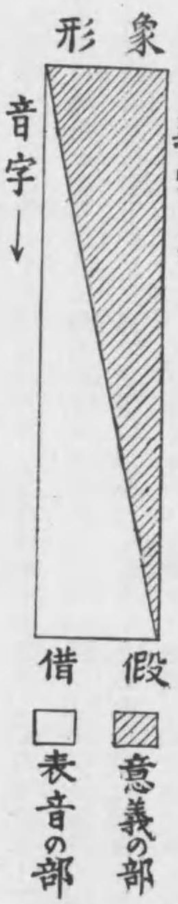
されば扨て今更支那文字に向つて印度歐羅巴や西藏蒙古滿洲朝鮮などの文字のやうな表音組織を求めることは無論出來ない。けれども併し自分の觀るところでは例へば叱切竊砌などの文字が素と七の字の音に依つて出されて居ると云ふやうに支那の文字には自ら大抵支那式の音符(Chinese phonetical symbol)が伏在して居つて、字形と字音の間には自然と或る一定のきまりが附いて居るもののやうに思はれる。假令それが互にちがつた音として知られて居るもの、卽ち邯と甚斟の如き、合と拾の如き又鯀と孫の如きその他湯と煬の如き鑑と鹽藍の如きものに於いて見られるやうな場合にでも其の間決して偶然ではない音韻關係が存して居る。此の種の觀方は主として音符をたよりにしてしらべるのであるからその字體はなる可く古いものを取らなければならぬ。かやうにして音符で取扱ふことの出來るものは支那文字全體の約八割以上を占めて居るかと思はれる。(別著『漢字音の系統』の統計を參照せられたし)。

其れ故支那の文字は大體から云へば兎にかく支那式の表音的文字であることは爭はれぬ。無論玄かしこれが爲めに其の有名な特徵たる象形義字の性質を輕く視てもよろしいと云ふわけではない。けれども支那の文字が純粹に象形のみの原則で發達して居た時期は比較的ながくは續かなかつたらしく思はれる。後世に殘つて居る結果から推斷してみても一語一語に新繪文字の作られたものは全體から觀て極めて僅少である。如何に形式に凝る國民とは云つても實際の使用上又しかある可きことで既に意義上又音韻上大抵の範疇の文字が出來た頃は最早やその創作を止めて從前に作つた要素を種々樣々に組み合す方面に工夫をこらすやうになつたのである。此の時期に出來た支那文字の內には一面に意義の要素(Bedeutungselement)を有し他の一面に又音韻の要素(Phoneticalelement)を有して居るものがよほど多いので時としては志の字に於ける士とか酣の字に於ける甘とかのやうに音義兩方の役目を同時に兼ねさせて居ることさへもある。最初の象形の時代を繪文字の時期(hierographic stage)と云へばこの時期は先づ大體から云つて表音の時期(Phonetical stage)とでも稱することが出來るのであつて今日見るところの支那式の表音文字卽ち諧聲文字は全く此の時期の產物と見られる。

然るに支那の文字が音をうつすには尙他に文字全體が綴音文字の役目をなして現れることがある。これは文字の構造上でなく全く役目の上丈けであるが單にその音のみを借りる所謂る假借文字がこれで日本古代の萬葉假名とか又支那で音譯に用ひたものとか其の他一般に音通で置き換へられる時の文字は凡て皆之に屬するのである。此の場合に於ける文字は如何なる文字であらうとも全然義字たる性質は沒却して攷へなければならないので、支那文字本來の性質も玆に至つて最も遠ざかつたものと見られる。

以上三段の發達の順序を通覽するに支那文字の最初の出發點たる第一期では意義の要素ばかりから

成り立つて未だ全く音を出す要素は出來て居ない。然るに第二期に入るに至つて次第に表音の性質を得て來て意義の要素は一部丈けに殘るやうになり更に第三期に至つては一箇の文字全體が表音の役目をすると云ふ順序で此れ等の大體の關係は次の圖に依つて容易に了解せられる。



このうち音韻のしらべに最も重要で且つ最も興味を引くものは音義兩要素を併有して居る中間の時期にあるもので卽ち表音的文字が卽ちこれである。

イ　表音的文字

支那の文字が其の元始的狀態(primitive stage)たる繪文字の域を脫して早くも其の構成中に音的要素を容れるやうになつたのは文字史上から云つてよほどの進步として認められなければならぬ。若し最初の狀態のやうに總べて象形のみで後世進んで來て居たとすると今日觀る繁雜さよりも更に幾千倍の煩しさを生じて居たかも知れない。然るに音義兩要素の各單位を以つて新字を形成發達させるやうになつてからは意義の側でそれぞれ範疇の出來たのみならず音韻上でも亦それぞれ類別せらる可きまとまりが出來たのである。中にも音韻上でまとめられて居るものは意義の場合よりも更に一層單純化せられて居るのであつてその範疇をきめる中心點となつて居るものは音符である。然るに此の音符は今日の楷書に明かなものもあれば不明のものもある。時としては全く省略せられて居るものもある。今左にその例證を擧げる。

a. 音符の明かな表音文字。

吉の字の音字

點……吉　kat ……1
結……吉　ket ……2
桔詰髻頡……吉　kit ……3

七の字の音字

切窃……七　čet,šet……1
叱……七　čit,sit ……2

丂の字の音字

號……丂　hao, gao……1
巧攷……丂　kao ……2

朽……丂　kiu ……3

勿の字の音字

忽……勿　kwot……1

勿物……勿　vot, mot……2

弋の字の音字

式蚘……弋　šok ……1

式……弋　šok ……2

代貸……弋　tai ……3

工の字の音字

空鴻功攻虹……工　kung ……1

江……工　čiang, kang…2

厂の字の音字

雁岸巖……厂　gan ……1

嚴原……厂　gen ……2

壬（壬は別）の字の音字

聰呈廷……壬　ting, teng.（tei は日本の訛音）

監の字の音字

檻艦鑒……監　kam……1

籃濫覽……監　lam ……2

鹽（鹹と同類）……監　yam,yem……3

賣（賣は別）の字の音字

牘……賣　tok ……1

覿……賣　tek ……2

續……賣　šok ……3

竇……賣　to……4

它の字の音字

佗柁跎陀舵鴕……它　ta. da ……1

蛇……它　ša, ja ……2

かやうに音の上に多少の差異はあるにしても皆その音符が明瞭に知られて居る。音韻上のちがひのことは後に述べるから玆には云はないが、尙音符の音の殆んど一致して現れて居るものも亦決して少

くない。例へば

凶の字の音字に兇匈洶胸恟……hiung, kiong (kiou, kyou)

古の字の音字に估姑詁鈷胡湖瑚糊醐固涸錮個箇辜……ku (ko)

の如きもので日本では多少の日本訛りを受けて居るが大體同音で類推して行くことが出來る。支那文字の音を觀る上に最も容易く得られる手掛かりは此の觀方であつて、どの部分から字音の依つて出て居るかと云ふ箇所を示して居るのである。殊に茲に注意す可きは切吐が七の音符により、鹽の字が監から音が出で（今は甚しく音が變化して居る）聽が壬の音から、勘が甘の音からそれぞれ皆その音の出る音符を有して居ると云ふことである。

b.音符の明瞭でない表音的文字

亏の字の音字

華……

楷書の華の字が篆書には上のやうに見えて居る。(說文)。これは誇袴跨などと共に亏の聲に依る。併し又一面には意義とも關係があるらしい。

今の字の音字

禽……

楷書の禽の字は篆書では上のやうに書き又金の字は下のやうにかく。

屯の字の音字

春……

楷書の春の字が篆書にはかやうにある。春は屯の聲によるのであるから暾東旦丹などと言語上緣の遠くない語詞かと思はれる。併しこは自分一個の考。

之の字の音字

寺……

又楷書の寺の字が篆書にはかやうにある。寸の字の上は素とは之の字の古形で其の古形は土の字でなく下の圖の通り。

說文に寺は廷也とあるけれども寺の古韻の一つとしては tai（待）の音がある。尙又之の字に sai の音のあるのは此の tai の古音の訛りかと思はれる。(第二篇第十章一參照)

用の字の音字

楷書の勇の字の篆書。次の(一)(二)(三)はその古文。勇は素と涌蛹などと共に用の音に從つたもので男の字と關係があるやうに見えるが素ともと關係はない字である。

勇……

(一)

(二)

(三)

辛の字の音字

新……

楷書の新の字の篆書。新の字は素と斧で樹を採る義で最初薪の意味が出て居たものらしい。說文にも新は取木也とある。斤と木とは意義を示して居て、新の字の音は辛の字から出て居る。然るを辛と木とが合體して今日では立の字と木との結合文字であるかのやうな偏が生じた。後世新の字が new の義を取るに至つて其の原義は忘れられた。そこで素との意味を復活させる爲めには何か形の上に工面を要する。これが今日艸冠りのついた薪の字のある所以である。さかし薪の字は許愼が既に說文にも載せて居る位であるから後漢以前には最早や出來て居たものと見られる。

丰の字の音字

奉……

楷書の奉の字の篆書。豐蚌蓬邦などと同音符を有するもので奉の字は此の音符に兩手を拱いた略畫の加つたもの。

臼の字の音字

革……

楷書の革の字の古文。學の字などと同樣に臼によりて音が出て居る。殘る部分が廿と十とで三十年の義と云ふ說文の說非なり。素とは獸皮の象形なり。

丁の字の音字

成……

楷書の成の字の篆書。今日では丁の音字たることが明かでなくなりかけたが說文に成は就也从戊丁聲（氏征切）とある。盛誠城などは此れの音字。

左の字の音字

差……

楷書の差の字の篆書。上部は艸木の華や葉が參差した略畫の積りらしい（說文）。

才の字の音字

在……

楷書の在の字の篆書。材と同樣に才から音が出て居る。說文にも杜は存也从土才聲、（昨代切）とある。

c. 音符の省略せられた表音的文字

彡の字の音字

尋……

楷書の尋の字の篆書。これは素と診珍參杉などと同類の表音的文字であつたのであるが、今は其の音符が全く省かれた。さかも今日尚表音的文字として取扱はれて居る。金文には未だ彡の附いた尋は見ない。今日の哭の字の音は果して獄の音に依つたものか。

獄の字の音字

哭……

尚多くの金石文からの比定が出なければ速斷しられないけれども他に田と幾とから畿の字が出來、夭と賁とから奔の字が出來、邑と窮から窶の字が出來て居るやうに音符の一部分を省略して主點を採ることは珍しくないのであるから哭の字の場合にも獄の一部分と吅（說文に驚聲也从二口とある文字）とで之が出來たと見られないこともない。或はその出來た當時には獄の字全體

があつて音符としての役目をなして居たかも知れない。併し說文學者の王筠は云ふ、獄字會意、自可省然从犬、何以知爲獄省、凡類此者皆字形失傳而許君序でに云ふ、說文に皿は讙の字の古字とある。

玉の字の音字

曲……

楷書の曲の字の篆書。曲の字は許愼に依ると象器曲受物之形或說曲蠶薄也とある。曲は表音的文字で素とは玉の部分から音が出て居た者と見られる。然るに音符の略された器物の象形丈けがやはり、玉の音で呼ばれて居る。因に云ふ、玉の字は古代には點なしで全く今の王の字に似た形をして居たのである。今の王の字の古體は董仲舒以來後世の俗間說ではかう云つて居る。卽ち中の横棒は素と今のよりも少しく上方に寄つてゐて天子の事を指して居たのであると云ふ。

玉の古字

王の古字

ともかく王と玉とは形の上の類似から混同の弊がある爲め玉の字の方に一點をうつてこの王と區別を立てた。此れが卽ち今の玉の字の起りである。尙古文の王の字は自分の考へでは工(Kung)の聲に從へる文字であると思ふがこのことは枝葉にわたるから略する。

かやうな事實に依つて見ると單に今日見る楷書で以て必しも直ちに音符の如何を論斷することは出來ないのみならず吾人の豫想以外に音符を持つて居た文字の餘程多いことを察することが出來る。(尙說文の價値については後章に論ずる。)(第二篇第十章七、結論の部參照)

㋺ 字音の轉換

文字上に現れて居る音韻は素と文字そのもの丈けが固有して居たものではなくて全く言語上の音韻が之に宿つて居たものに外ならぬ。然るに言語上の音は云ふまでもなく時代の上でちがひ、又地方に依つてうつり行く。それ故支那文字の場合に於いても字音が常に轉じて行つて居るのは怪しむに足りない。唯それが日本朝鮮などのやうな言語上の特質のちがつた國語のうちに這入ると多少の訛りは受けても大體古韻の化石を保存して居るから著しい後世の變化は認めにくい。去かしそれにしても日本に傳へられるまでの音韻の狀態はほぼ日本の字音で察することが出來る。(朝鮮を經て來た百濟音の影響に就いてのことは暫く玆に云はないで置く)。

言語上の音韻變化は不規則のうちに一定のきまつた範圍があり、又その內にきまつた法則が存して居る。從つて字音の場合にも其の法則の範圍以外に出ることは先づないと見て置いてよろしい。今一例をkの音に就いて觀るにその言語上の變化は支那で次のやうな結果になつて居ると自分は考へるのである。卽ち、

K ⟶ S, Š or Č ⟶ Y or W, (vowel).

（kの帶氣音 (aspirated k) 及び濁音gのことは玆に暫く云はない）

然るに今此の音韻現象を文字上で窺つて觀るに例へば『公』kung の字音を音符に取つて居るものに就いて之を觀察すると、說文などにただ公の聲とあつても後世變つたものが多い。

蚣……公　kung であることは道理であるが外に之と別なのがある。卽ち

頌……公　sung, (jung, yung) 說文に頌貌也从頁公聲（余封切又似用切）

訟……公　sung 北平音も亦同樣

松……公　sung 說文に木也从木公聲（祥容切）

翁……公　ung (yung) 說文に頸毛也从羽公聲（烏紅切）

これ等kの音から變じた音はよく實際の言葉の上の音韻現象と一致して居る。尙他の例で『區』ku の音に就いて之を見るにその音符を取つて居る文字に次の如きものがある。

驅傴嶇軀……區　ku

樞……區　su（日本俗音は sū）說文に樞戶樞也从木區聲（昌朱切）

歐……區　ō, yo, yu 說文に區吐也从欠區聲（烏后切）

などがある。殊に歐の類は鷗毆甌謳嘔甌などのやうにかなりに多くある。

以上は僅かの場合を擧げたのであるが字音の現象がその言語上のしらべの結果に一致してゐることは爭はれない。さかしかやうな音韻變化の順序は一般言語に見ることでkの音がSとなる例には卽ち

キケロ (cicero) ⟶ シセロ (cicero)（近世英語）

サク（咲ク saku）⟶ サス（咲ス Sasu）（熊本縣下の方言）

次、Sの音のyにうつることは卑近な例で云へば大體次の現象に依つて察せられる。

行キマショー（……šo）⟶ 行キマヨー（……yō）（大阪市方言）

次ぎに然らばかやうな音韻の變化はどれ位の範圍まで支那文字のうちに廣まつて居るかと云ふに中々たくさんのものを網羅してゐるやうに思はれる。今此れに依つて推されるものを左に擧げる。

谷の字の音字
- 谷……kok……1
- 俗……šok……2
- 欲浴……yok……3

舁の字の音字
- 擧……kyo……1　新研究にては擧は牙の音に據る
- 嶼……šo……2
- 與與……yo……3

（樂……kak, gak……1　（lak の音のことは後に云ふ）

樂の字の音字　鑠……樂　šak……2
　　藥……樂　yak……3

羊の字の音字　羌……羊　kang……1
　　詳……羊　šang……2
　　洋……羊　yang……3

牙の字の音字　芽……牙　ka, ga……1
　　邪……牙　ša, a……2
　　鴉……牙　ya……3

この轉換の順序は音聲學上の說明に一致するのである。尙此の三段に跨つて居ないが次の如きものなども現に此の變化の渦中にあるものとして攷へることが出來る。今普通に知られた文字の中からその例をあげるならば

川の字の音字　訓……川　kun……1
　　順……川　šun……2

只の字の音字　枳……只　ki……1
　　只……只　ši……2

磨の字の音字　磨……磨　keng……1　說文には磨石也从石殳聲
　　聲……磨　šeng……2　說文に聲音也从耳殳聲殳籀文磨

支の字の音字　岐……支　ki……1
　　枝……支　ši……2

臣の字の音字　臤賢緊……臣　ken, kin……1　說文に臥堅也从又臣聲（苦閑切）
　　腎……臣　šin……2

此等の音韻變化の順序の上からみると順只聲枝腎等には嘗てkの音を有して居たことを假定することは出來ないでもない。少くとも臆測ではあるがその音符の

川の古韻……kun,
只の古韻……ki,
支の古韻……ki, (kuei)

と云ふやうなこと丈けでも攷へられはしないか。併しこの臆測を確かめるには文字上の考證ばかりでなく該博な歷史上竝びに地理上の研究の結果を俟たなければ無論斷言せられないのである。

以上は單に k——→s, š までの場合であるが支那の文字には時として却つて此の二段目の s, š の狀態の見えないで、すぐ k——→y, に進んだやうな形迹の見えて居るものもある。卽ち

目の字の音字 {絹鵑……目 ken ……1
　　{捐……目 yen ……2

奇の字の音字 {崎羈……奇 ki……1
　　{椅倚……奇 yi, i……2

異の字の音字 {冀驥……異 ki……1
　　{異……異 yi, i……2

喬の字の音字 {橋……喬 kit, ……1
　　{鵁……喬 yit ……2

勻の字の音字 {均……勻 kin ……1
　　{韵……勻 yin ……2　説文に勻は少也从勹二（羊倫切）

などがある。玄かし元來喉音（velar）の音 k, g が軟化して口蓋音（軟又は硬の半母音（y）となることは支那の今日の音韻現象にでも珍らしくはないので現に北平官話の音にもあるが如く、卽ち、

肴 kao ——→yao　肴は素と有の字に關係なく从肉爻聲の文字である。

元 guan ——→yüan

岳 gak ——→yüeh

の例から觀ても中間の ǰ, s の狀態（stage）は必ずしも通らなければならぬと云ふことはなかりさうに思はれる。日本語の助辭にカ ka とヤ ya の兩音が存して居るなども玆に考へ併すべきものではあるまいかいかが。

尙喉音の軟化して半母音となるものには唇音 w と變ずるものがある。現に北平音で例へば

危の字の音字 {跪……危 kwei ……1
　　{危……危 wei ……2

窩の字の音字 {……窩 ko ……1
　　{……窩 wo ……2

があり、同樣に日本などに傳つて居る音のうちにも次の例が見出される。

會 kuai (hoi) ——→wai, we

穢 kuai……→wai, we

和 kua (hai) ——→wa

慧 kuei……→wei, we

軍 kun (čün) ——→wun（運）

上述のやうに字音に現れたる k の音は言語上の結果と同樣に ǰ, s, y, w の音にうつり轉ずるのであ

る。尙kからčにうつる場合のこともあるがこれは直接日本の字音に關係しないから玆に略しておく。

これでk音の系統に屬するものの總てが網羅せられたと云ふわけではないが他は略して玆にはその主要なものだけを擧げたのである。

次に尙一層多くの文字を總括して居る別の音韻系統があるから其れに就いて少しく觀察して行かう。それには先づ言語上の方の音韻轉換についてその大體をあげて置く必要がある。それは卽ち

T——→Č, Š, or S——→Y or vowel.

でまとめがつくやうに思はれる。

（T音の帶氣音卽ち aspirated T のこと竝びに濁音のdの場合のことは暫く玆に云はない。）

今、上述の音韻轉換を字音の上に應用して攷へると如何なることになるか。先づ一二の例に就いて音韻のありさまを見るに

睪 tak の音符からして擇澤鐸 tak の音の出て居ることは普通であるが、

釋……睪 šak

譯……睪 yak

驛……睪 yek

の如きものがあり、時としては更に尙こまかい發達の順序の見えて居るものもあるやうである。例へば、

俞の字の音字

偷……俞 to……1

鍮……俞 ču……2

輸……俞 šu……3

瘉……俞 yu……4

此れ等は果して偶然の現象であらうか。否これは一般の音韻學（phonetics）の上十分に認められるところのものであるのみならず、支那の言語上と又爭ふ可からざる一致を有して居るのである。然らば文字の上に尙多くの之が類例を見出しうるやと云ふに恐らく既に述べたk音の場合よりも遙かに多き數を發見する位であるので自分の今日までの研究では殆んど假定說以上の價値がありはしないかと思はれるのである。今此の系統に屬するものの中で先づ四段の順序を取つて居るものを次ぎに擧げよう。

易の字の音字

湯蕩……易 tang……1

腸……易 čang……2

傷觴……易 šang……3

楊煬……易 yang……4

迭跌……失 tet……1

失の字の音字
- 帙秩……失　čit……2
- 失……失　šit……3
- 佚軼……失　yit……4

尤の字の音字
- 耽……尤　tan……1
- 沈……尤　tin, cim……2
- 沈（人名）……尤　šin……3
- 尤……尤　yin……4

也の字の音字
- 他……也　ta……1
- 池……也　ti, či……2
- 施……也　šę……3
- 也……也　ya……4

台の字の音字
- 胎……台　tai……1
- 治……台　ti, či……2
- 始……台　ši……3
- 怡……台　yi……4

濁獨……獨　tak, dok……1

蜀の字の音字
- 躅……獨　čok……2
- 屬……獨　šok……3
- 獨……獨　yok……4

次ぎに三段の發達の順序を取つてゐるものには左の如きものがある。卽ち

勺の字の音字
- 的……勺　tek……1　勺は素と勺
- 芍……勺　šak……2
- 葯……勺　yak……3

易の字の音字
- 惕……易　tek……1
- 場……易　šek……2
- 易……易　yik……3　易の音 yi, i は yek の訛音。

兌の字の音字
- 脫……兌　tat, dat……1
- 說……兌　šet, jet……2
- 閱悅……兌　yet……3
- 兌……兌　tai, da……1　說文に兌說也从八儿口聲（大外切）

兌の字の音字
- 稅……兌　šei, jei ……2
- 鋭……兌　yei ……3

由の字の音字
- 胄抽……由　tak, ču ……1
- 岫紬……由　šu……2
- 油……由　yu ……3

葉の字の音字
- 蝶……葉　tep ……1
- 葉(人名)……葉　šep ……2
- 葉……葉　yep, yap……3

多の字の音字
- 多……多　ta……1
- 侈……多　ši ……2
- 移……多　yi……3

又此の發達の徑路のうちに現に屬して居て末だyの域に迄進んで居ないものもある。卽ち、

出の字の音字
- 咄……出　tot ……1
- 出……出　šut ……2

是の字の音字
- 題提……是　tai ……1
- 匙……是　ši ……2

之の字の音字
- 待……之　tai ……1　(鐘鼎文參照)
- 市……之　ši ……2　之に sai の音あり

者の字の音字
- 睹……者　to, tu ……1
- 闍……者　ša……2

斥の字の音字
- 柝……斥　tak ……1
- 斥……斥　šek ……2

この外中間狀態のš, čは見えないでtからyに進んだところだけしか知られて居ないものもある。

卽ち、

炎の字の音字
- 淡談……炎　tan ……1
- 炎……炎　yen ……2

翟の字の音字
- 濯……翟　tak ……1
- 躍……翟　yak ……2

用の字の音字
- 踊……用　tung……1　踊の北平音 yung
- 勇……用　yung ……2

かやうにこのT音の系統に這入るものを擧げると殆んど際限なく出て來る。

以上k及びTの二大系統は字音轉換中に於ける法則の一例であるが、かやうな方法で音韻を調べて觀ると無秩序のやうに見えて居る字音相互の間に動かすことの出來ない一定のきまりの存して居ることが發見される。單に子音の場合だけでなく母音の間に於いても亦同樣の觀察が出來る。上述のアラビヤ數字の順序は半面に於いて此の母韻發達の順序を假定して排べて置いたのである。かやうに支那言語學の立脚地からその文字を觀察して見ると音韻學上種々の興味ある手懸りを得る。なほ以下にはこれについて述べる。若し漢字整理上又は古代の歷史地名人名を解釋する上にこれが多少の參考ともならば望外の幸である。

支那の歷史を涉獵して居ると屢々普通ならぬ字音に遭遇することがある。地名とか人名などに殊にそれが多い。けれども音韻そのものを考へて見ると全然特例と云ふ程のものは至つて尠いので大抵は多くの類例を有するのである。

孫堅の堅の字が諱み憚かられて甄とせられたことがある。其の甄の字音は、垔の音符によるものであるが後世に於ける甄の音は sin である。韻會(インキ)正韻などにも震と同音として出て居る。去かし後世垔の音符を有する文字に就いて廣く見ると、次ぎのやうなものが見られる。

甄……šin……1　北平音　čen

垔の字の音字 {煙……yen……2　北平音　yen
　　堙湮……yin……3　北平音　yin}

此の垔の音符が šin, yen, yin として現れて居ることは一般に認められて居る。然るに後漢に出來た說文(宋版參照)によると垔の音符は古體で現れて居るが兎も角次ぎのやうな說明が見えて居る。

……古音　ken　說文、甄は匋也从瓦垔聲（居延切）とある。

又甄の字が『明か』の義に用ひられたことのあるなども顯の古音 Ken（今の音は hsien であるが）と音通であつたのではないかといふ傍證になる。果して然りとするならば垔の音の沿革は明かに前項に述べたK音の系統のうちに這入るものである。卽ちKからšにSからyにとうつり行くものの一例となる。それ故

垔の字の音字 {甄……垔　ken, khen …1
　　甄……垔　šin, čen, ……2
　　堙煙……垔　yin, yen ……3}

かやうに甄の音は ken よりうつりて sin, čen などとなつて居る。然るに莊季俗雜助篇には人爲

で甄の古音 ken を sin, čen に改めたやうに書いて居る。卽ち、三國以前未有之人切者孫權卽位尊堅爲帝、江左諸儒爲吳諱故改音眞とある。支那の慣例として或はさうかも知れないが支那音韻史上から觀ても此の音韻現象は亦拒む可からざる傾向を示して居るのである。

又古くは傳說に帝舜の時代に敎育の任に當つたとか傳へられて居るものに司徒の役の契と云ふものがある。此の名稱も素とから set の音であつたかどうかは頗る疑はしい。契はもと丰の字の音によつて其の音が出て居るもので、(暫く說文に據る) その同類のものを求むるならば

丰の字の音字
- 割……丰　kat ……1
- 契潔……丰　ket ……2　入聲の et は i に轉じ kei となることもある
- 契……丰　kit ……3
- 契……丰　šet ……4

などたくさんある。飯島氏が倉頡を以つて創契に比定せられしも頡と契とが同音たる故である。契の音が言語學上もし kit, ket, kat などの古音で呼ばれて居たことが誤つて居ないとするならば上古竹簡などを刻して繪文字を印すると云ふ刀筆の習俗を人間らしく擬した personification ではあるまいか。神農氏が農業時代の擬人であり、燧人氏が火食時代の擬人であり、又鯀が大水？(洪、江、川の古音 kung, kun) の擬人であるなどから推して考へると契の原義も略察せられる。又契の字の篆體を觀ると刀を以つて木を刻む義から出て居るやうに見えて居る。卽ち、

……古音　kat　說文に、契は刻也从刧从木とある。然るに更に刧の字を解剖すると次ぎの如くになる。

……古音　kat　說文に、刧は巧刧也从刀丰聲恪八切とある。

枝葉の問題は後日に讓り玆には唯司徒の契の名稱が素とから set であつたのではなく甄と同樣に語頭音に素とKの音を有し ket, kat などの音を有して居たのではなかつたかと云ふことを觀察したのである。

帝舜の時代に又皐陶と云ふ人間があつて刑辟を理めたと傳說に見えて居る。その人間の存否如何は玆に問ふところでないが、唯普通に陶の音とさへ云へば tao である可きものの如くになつてゐるものが yao の音として皐陶の呼びかたの上に現れて居る。併し支那では音韻沿革史の上で t の音はうつりうつりて y迄行くものが珍らしくないのである。此の音の系統に就いては既にも云つた通り、

易の字の音字
- 湯……易　tang ……1
- 煬……易　yang ……2

翟の字の音字　濯……翟　tak ……1
　　躍……翟　yak ……2

甬の字の音字　踊桶……甬　tung ……1
　　踊蛹……甬　yung ……2　踊の北平音 yung

の如きものを參照して見ても、卽ち、

匋の字の音字　陶淘……匋　tao ……1
　　陶……匋　yao ……2

となり得ることは了解せられないことはあるまい。さかしその上古傳說の時代に果して必ず陶の音が yao であつたかどうかはわからぬ。唯後世のきまりである。

以上は唯支那語の音韻轉訛の現象が如何によく歷史上の固有名詞の上に現れたるかを實例によつて示した迄である。

これまで述べたものは支那語の破障音 (Explosive sound) の k とか t とかが其の發音の弛むによつて生ずる音韻轉訛の現象であつたのである。さかし支那語の音韻變化は同じ破障音の種類の間で k と t とが互に相轉換し合ふことも亦少からず見出されるのである。例へば、

合の字の音字　給龕……合　kip……
　　答……合　kep ……1
　　　　kap ……

出の字の音字　屈……出　kut, ……1
　　咄……出　tut ……2

今の字の音字　禽……今　kim ……
　　含……今　gam ……1
　　貪……今　tam ……2

莫の字の音字　漢……莫　han, kan……1
　　嘆……莫　tan, dan ……2

などのやうに比較的規則正しく行はれて居るのである。尙此の外托と毫、又釣と豹との間の PT の關係又は、校と票との間の KP の關係(說文參照)などの事もある。此のうち KT の音韻現象はインド・ゲルマーネン (Indo-germanen) の言語に於いても往々見ることで卽ち伊太利語と獨逸語との間に於いて

t ……tartufulo……1

k……kartoffel……2

となるが如き現象のあるのはその一例である。このＫＴ轉換のことは音韻學上可能のことで珍とするに足りない。

以上字音の轉換として觀察したものは結局次ぎのやうなことを明かにしようとしたのである。卽ち說文に於いて例へば

驅は从馬區聲　豈俱切
樞は从木區聲　昌朱切
歐は从欠區聲　烏后切

などは同一の區の聲 ku に依つて孰れも其の字の音が出されて居た筈である。

然るに事實は之に反して區の音 ku が或は ču となり或は su, 又は yu などとなつて居ると云ふやうに音が違つて來て居る。けれどもこれは支那の言語學上その音韻の歷史が然らしめて居るものであつて此の種の類例は尙乏しくない。否其の音の互に相違つて居るうちに動かすことの出來ない規則と秩序とが一大系統をなして潛んで居るのであると云ふことをこれまで說いたのである。

實に支那文字に現れた音韻の現象は觀れば觀るほど其の間に一定のきまりのあることを示して居るやうに思はれる。而して音韻の側のしらべの進めば進むほど支那文字のうちに所謂諧聲の文字の非常に多く發見せられることを見るのである。隨分從來は會意文字としてのみ考へられて居たやうなものでも今日では其の諧聲文字たることの疑ひのないものが可成りあり、又名稱こそ諧聲文字であれ其の實反つて諧聲文字でないやうなものもたくさん出て來る。所詮說文などに見えて居る音字は新しい研究を根本から適用して行かないと十分であるまい。

ハ　Ｋ音とＬ音との關係

支那文字に現れた音韻現象のうちに音の轉換とばかりは見られない一種の音的變化の現象がある。Ｋ音とＬ音との如きはそのうちの主なるものである。尙Ｔ音とＬ音との關係、Ｐ音とＬ音との關係なども時としてはある。今具體的にその實例を擧げて申し上げるならば次ぎのやうな代表的 (typical) のものがある。卽ち

一、Ｋ音とＬ音との關係

夆の字の音字
降……Kung……1
隆……Lung……2

監の字の音字
檻艦鑒……監　Kam……1
籃覽……監　Lam……2

呂の字の音字
筥莒……Kio……1
閭絽……Lio……2

二、T音とL音との關係

龍の字の音字 { 龍……tung……1 / 龔……lung……2

豐の字の音字 { 體……豐　tai ……1　說文に體は从骨豐聲 / 禮醴……豐　lai ……2

三、P音とL音との關係

聿の字の音字 { 筆……聿　put ……1 / 律（建は別）……聿　lut ……2

彔の字の音字 { 剝……彔　pak ……1 / 祿……彔　lok ……2

品の字の音字 { 品……品　pim ……1 / 臨（臥と品）……品　lim ……2

此れ等三種の音韻關係は如何なる理由に依つてかやうに現れて居るのであるか。假令このうちでも第二に擧げたT音とL音とは音聲學の見地（phonetical point of view）から別の解釋がつかないでもないが大體に於いてK音とL音。T音とL音。P音とL音と云ふ三種の音韻關係は西洋人の云ふインド、ゲルマーネン（Indo-germanen）語の音韻現象には見出されない現象である。固より西人の建てた音聲の學問の總べてが東洋の言語に悉く適用の出來ると云ふわけのものではないのであるから上述の音韻現象は東洋の方で支那特有のものとして觀察しなければならぬものであるか。或は自分は未だ西洋の音聲學に精通して居ない爲め此の種の現象の西洋にあるのを氣附かないで居るのであるか。さかし發音上生理的の側から觀察して見るにまさかKの音がL音と轉換したり、P音がL音とうつり合つたりなどすることは許されないやうに思はれる。又L音がKTPと云ふ破障音（Explosive Sounds）と轉換し合ふ音聲學上の理由もなかりさうに思はれる。果してないことが眞なりとするならば他に說明の方法を取らなければならぬ。卽ちこゝに於いて此の現象は心理的（psychological）の側と何か關係するところはないかと云ふことに煎じつめられる。換言するならば上述のL音のものとKTPのものとは音こそ異なれ意義の方で何處かにそれぞれ類似した點はないかどうかを見るのである。今一例を取つて之を見ると、

檻……Kam
監……Kam, Lam ……物を容れる意義。
籃……Lam,
體……Tai
豐……Tai, Lai ……身につける意義。
禮……Lai

筆……Put
律……Lut　}聿……Put, Lut……記錄に關係ある意義。

支那語の元始時代に若しやかやうな意義上の關係でもありはしなかつたか。此れは唯の臆說に過ぎないのであるが、支那文字の音符 (phonetical Symbol) をたよりに支那語の古代の狀態に遡つて考へるとかやうに觀ることが出來るのである。尤も此の臆說を立てるに一二の類例ぐらゐでは未だ論據が薄弱であることは云ふまでもないが今のところでは未だ積極的にかゝる比定の可能を總べての場合に適用することは出來ない。唯自分の日頃觀察して居るところではTの場合とPの場合とは暫く措きKの音の場合になると最も多く此の音韻現象が現れて居るやうに思はれる。(尙之に關しては第三編第十八章支那運羅兩語比較參照)。それ故以下には此のK音とL音との關係に就いて主として先づ觀察して見よう。

支那の諧聲文字卽ち音符を有して居る支那文字に就いてK音とL音との音韻現象を觀ることは頗る音韻の研究上興味の多いことで而かも是れまで餘りに學者から注意せられて居なかつた。普通誰でも認めて居る漢字のうちにでも、

各……古音 kak 說文に各は異辭也从口夂夂者有行而止之不相聽也（古洛切）とあるが如く各の字の音の kak たることは動かされない事實である。それ故、

各の字の音字としては

格……古音 kak 說文に格は木長貌从木各聲（古百切）
骼……古音 kak 說文に骼は禽獸之骨曰骼从骨各聲（古覈切）
客……古音 kak 說文に客は寄也从宀各聲（苦格切）
閣……古音 kak 說文に閣は所以止扉也从門各聲（古洛切）

などとある所以で孰れも皆各の聲に依つて其の音が出て居るのである。然るに、

各の字の音字には又、音韻上別種のものとして、

洛……古音 Lak 說文に洛は水出左馮翊（中略）東南入渭从水各聲（廬各切）
烙……古音 Lak 說文に烙は灼也从火各聲（盧各切）(反切は凡て後唐徐鍇の記入也)
絡……古音 Lak 說文に从糸各聲
駱……古音 Lak 說文に从馬各聲
略……古音 Lak 說文に从田各聲

の如きものがある。洛陽の洛が說文に見えて居る通り从水各聲であり且其の各の音が Kak である以上は洛の音に盧各切とあるは疑はざるを得ない。古人は Lak は Kak の音通であるなどと云つて居るけれども今日の科學上の觀方からしては音通などとは許されないのである。それ故各の音符に就い

ては其の音の標準を kak の音のみとして考へることは出來なくなる。卽ち各には kak ともなり又 Lak ともなり得る性質の音を有して居たと見なければならぬ。これは前例の監に於けると全く同樣である。

K音とL音との兩種の形を取つて現れて居る類例は支那文字中珍らしくない。今左にその普通よく見あたるものに就いて之を列擧して見よう。

一、監の字の音字
- Kam
  - 檻 K'an（北平音）…1
  - 艦 Čien, Šien ……2
  - 鑒 Čien, Šien ……3
- Lam
  - 籃 Lan ……4
  - 覽 Lan ……5

二、京の字の音字
- Kiang
  - 鯨 Čing……1
  - 黥 Čing……2
  - 影 Ying ……3
- Liang
  - 凉 Liang ……4
  - 諒 Liang ……5

三、兼の字の音字
- Kam
  - 縑 Čien……1　説文に縑は幷絲繒也从糸兼聲（古甜切）
  - 謙 Čien……2
  - 嫌 Šien ……3
- Lam
  - 簾 Lien……4
  - 鎌 Lien……5　説文に鎌は鍥也从金兼聲（力鹽切）

四、僉の字の音字
- Kam
  - 僉 Čien……1　僉はKam合はKap今はKom総てくはKam
  - 簽 Čien……2
  - 險 Šien ……3　説文に險は阻難也从𨸏僉聲虛檢切
- Lam
  - 斂 Lien……4　説文に斂は收也从支僉聲（良冉切）
  - 臉 Lien……5　客家音 Kiam

五、各の字の音字
- kak
  - 格 Kê ……1
  - 骼 Kê ……2
  - 閣 Kê ……3
- Lak
  - 洛 Lao ……4
  - 烙 Lê ……5

- 略 Lüeh ……6
- 六、虎の字の音字
  - Ku
    - 虎 Hu ……1　説文に虎は山獸之君从虍从儿虎足象人也
    - 虔 Ǩu ……2
    - 虛 Šü ……3　説文に虛は大丘崐崙丘謂之崐崙虛
  - Lu
    - 虛 Lü ……4
    - 虜 Lo ……5
- 七、樂の字の音字
  - kak (ngak)
    - 樂 Yao, yueh ……1　説文に樂は五聲入音總名（玉角切）
    - 鑠 Šuo, ……2
    - 藥 Yao, yueh ……3　説文に藥は治病艸从艸藥聲（以勺切）
  - Lak
    - 樂 Le ……4
    - 礫 Li ……5　説文に礫は小石也从石樂聲（郎擊切）
    - 轢 Li ……6
- 八、果の字の音字
  - kuo
    - 菓 Kuo ……1
    - 夥 Huo ……2
    - 課 Kê ……3
  - luo
    - 裸 Lo ……4　客家音 k'o 朝鮮音 na
    - 躶 Lo ……5
- 九、東の字の音字
  - kan
    - 諫 Ǩien ……1
    - 揀 Ǩian ……2
  - Lan
    - 闌 Lan ……3　説文に闌は門遮也从門東聲（洛干切）
    - 煉 Lien ……4
- 十、京の字の音字
  - Kang
    - 鯨 Ǩing ……1　北平音 Ǩは古音 Kに還元せらる
    - 黥 Ǩ'ing ……2
    - 景 Ǩing ……3
  - Lang
    - 凉 liang ……4
- 十一、婁の字の音字
  - kou
    - 褒 Ǩü ……1
    - 屨 Ǩü ……2　説文に屨は从履省婁聲（九遇切）
  - Lou
    - 剽 Lou ……3
    - 鏤 Lou ……4
    - 髏 Lou ……5

十三、老の字の音字
- Lao（老）Lao……1
- Kao
  - 孝　Kao……2
  - 酵　Kao……3

以上に列擧したものは同一の音符を有する文字にK音とL音との二樣の形を取つて居るものの例である。同一の音符を有して居ながら別種の音を取つて居ると云ふことは支那の文字學上又言語學上に頗る注目す可き點であらうと思はれる。上述の諸例が果して說文に指摘せられてあるやうに各その字の一部分から同じ音が出て居るとするならば、その文字の音は、必ず同じ系統の音の種類に屬す可きものである。

監の音 Kam を音符に取つて居る文字に

1　K'an（檻）……監聲
2　Čien（艦）（鑑）……監聲
3　šien（艦）北平官話俗音……監聲
4　ien, yen（鹽）說文に鹽は鹹也从鹵監聲（余廉切）とある。併し古音は kam（監）也。

などのあるのは音韻上相互間に連絡があつて皆同じ系統のうちに考へ容れられる。然るに同じ監聲に屬するものには說文によると又、

5　Lan（籃）說文に籃は大籠也从竹監聲（魯甘切）
6　Lan（覽）說文に覽は觀也从見監監亦聲（盧敢切）

などがある。卽ち監と云ふ音符に對して、

監の聲に依るもの
- Kan　檻
- Lan　籃

となり、又果とか婁とかに對して、それぞれ

果の聲に依るもの
- K'uo　裸　廣東省客家音 ko
- Luo　裸

婁の聲に依るもの
- Köü　婁　說文に婁は無禮居也从女婁聲（其榘切）
- Lou　婁　福州音 lou 安南音 liu

などがある。これは他の類推で kan を lan となし kuo を luo とするやうなこと或はその反對なことから生じた現象と見られる。或は又或る地方の訛り音とも見られないではない。併し他の類推でもなく又方言の訛音でもないとするならば本來それに kan, lan（監）の兩音 kuo, luo（果）の兩音と云ふやうに二重の音があつたものと見られる。現に玉（古音 kuk）のことを Tai 種族で luk と云へるも玆に併せ考ふべきものである。然らば說文に同じ監聲とあるものに何故檻の Kan 籃の lan と云ふや

うに監の字に二樣の音が存して居るものであるか。又果聲に何故に kuo（菓）luo（裸）の二樣の形があるのであるか。自分は此の現象に對して目下のところ次ぎの如き說明を取つたならば如何であらうかと思ふ。卽ち

同じ音符に對して K, L 兩音の併在して居るわけは地理上並びに音韻學上の觀察からして今の支那語の原始的狀態に於いて嘗つて Kl なる複合の語頭音があつたわけではあるまいか。その複合音のうち時として一方の K の消えることがあり、又時として L の方が消えることもあると云ふが抑も此の兩種の音の同じ音符から別れ出て居るのではあるまいか（第三編第十八章參照）。

例へば嘗つて極めて古い時代に Klam と云ふ如き語があつてそれが後世監の字の出來るに至つて之に結び付けられ更に世を降り文字の表音的時期 (phonetical stage) に至ると或は kam と云ふ方の音で呼ばれた文字もあれば Lam の方で呼ばれたものもあつたのである。又その類推から各互に混同し合つたものもあつたであらう。兎も角複合の語頭音から單純化して生じたものとして考へられる鹽の yam などは矢張り Kam の脫化した音である。鹽の古音が Kam でなければならぬことは同意義の文字に別に鹹 Kam の音のある一事に依つても察せられる。

此の外屢の字が支那に於いても日本に於いても或は Ku の音を取り或は lu の音を取り、又裸が luo とも kuo ともなるのも皆これに關聯して致ふ可きものである。かかる觀察は支那古韻研究の方法の上に立てた假定說 (hypothesis) と云ふよりは寧ろ事實上の根據によつて立てた自分の考へである。併しその事實と云ふが爾雅や說文などの出來た當時の古い事實でなくずつと後世になつてからの材料に依つて推論して居るのである。否有體に云へば今日窺ふことの出來る亞細亞のモノシラビック諸言語中の現象を辿り辿つて其の間に音韻學上の關係を認めてポッシブルの說明を試みたのである。ローマンス語族に於いても複子音で始まる語詞が單子音で始まる二つの語詞に分岐する例は乏しくないのであるから此の種の現象は獨り支那ばかりにある音韻現象ではない。而して爰には唯支那語の K 音と L 音との間には偶然ならぬ音韻關係 (phonetical relation) が伏在して居て、それが日常の字音の上に拉することが出來ると云ふことの手引きを述べたまでである。これは支那の古代語を攷究する上に看過す可からざる點で又世界の言語發達史上から觀ても頗る興味のある現象であると思はれる。

二　文字相互間に現れた言語上の關係

支那は形を主にする文字を澤山有して居ると云ふ點では恐らく世界一であらう。吾人は動もすると其の文字を以つて言語と混同してしまつて文字の相違は悉く其の言語上の相違であるが如くに攷へられることがある。固より支那人は文字上の區別で以つて言語上の區別の出來ないところを補ふことがある。これは支那語研究の上に注目す可きことで全然言語を以て文字以上に萬能ならしめることの出來ない所以である（言語本來の特質の上から）。けれども併し如何に文字の形の上に甚しい懸隔があつ

ても今暫く字形の觀念を離れて其の音と義との二つ丈けに就いて考へるときは其の間に爭ふことの出來ない言語上の關係が相纏綿して居ることを發見するのである。例へば、

鹽と鹹　前節でも述べたやうに後世では yem の音を取つて居る鹽字が古音に Kam（說文參照）の音であつたことが確かに事實であるならばこの鹽の字の作られた當時の其の音が如何に鹹の字と音と相酷似して居たかが察せられる。今音符（phonetical symbol）の役目の上から云ふならば鹽の字であれ、咸の字であれ、kam の音を有する點では共に何等の差異はないやうである。唯其の意義の要素たる鹵の字に對して（說文に鹵は西方鹹也从鹵省象鹽形安定有鹵縣東方謂之㡿西方謂之鹵とあり。高田忠周氏の直話によるとこれは鹽田に象りたるものであるとの事。こは鹽と咸との二樣の書きわけをしたまでで假令意義上に小區別こそあれ、大體は同一語源から出て居る言葉をうつして居るものと思はれる。其の古音と朝鮮音とを比較すると次の如くになる。

鹽 ｛說文に　鹽は从鹵監聲とある。監の音 kam 又は kom
　　朝鮮音　염　검　kom（奎章全韻）

鹹 ｛說文に　鹹は鹽の字の解に用ひらる。鹹の音符たる咸は ham, kam
　　朝鮮音　함　ham（奎章全韻）

支那民族以外のもので尙單綴語を使用して居るものの言語をしらべると、『辛い』と云ふ意義の言葉に、（W. W. Hunter 氏の調査に依る）

シアム語 (Siamese) ……Khóm, Khon
Ahom ……Khum
Khàmti ……Khóm
Laos ……Khóm

又鹽の意義を有するものに音韻の性質上相近いものがある。卽ち

Kulungya (East Nepal) ……gum
Limbu ……yum　鹽の厦門土音 yam に似て居る。
Bengal Naga 語……hum　咸の朝鮮音 ham を攷へ合すべし。
Bengal Namsang ……Sum

以上の Kam, ham, Khom, Khum, gum, Sum, hum, yum 及び yem などは言語上素と鹽鹹に聯關するところはなかつたか。少くとも鹽の字に素とKの音又はLなどで始まる音はなかつたか。支那周圍の部族の言語を比較し支那內部の古音を說文によつて考へると鹽の原音が kam 又は khom などであつたことは察するに難くない。

熱と日

漢民族の古い言葉で太陽のことは nit, とか jit とかと呼んで居たのではないらしい。自分のしらべて見たところでは寧ろ tan. ton. tang. tong 或は dong などのやうな音で呼んで居たものらしく思はれる。爾雅に春爲青陽とあるその陽の字の古音が tang であることは既に『字音の轉換』のところで述べた規則によつて推察することが出來る。太陽の古名が、察するに tan, tang などであつたにも係らず、jit, nit などと云ふ名稱で（主に熟語を成す時に）呼ばれて居るのはその太陽の有する多くの屬性 (qualität) のうち熱いと云ふ性質を特に取り出し、之を熱いと云ふ語で以つて太陽そのものを呼ぶに至つたのではあるまいか。果して然るならば nit, jit の音を有する日の字は net 熱と、異字同語であると思はれる。

語頭音に立つ n 又は j の音は言語の地理上の分布によつて差が生ずることもある。卽ち北支の jên（人）の音が中支で nin となるが如き其の一例である。併し必しも地理上の差別によらなくとも音韻學上發音機關の生理的理由に基づいてそれが j となる轉換は決して珍とするに足らぬ。時として、j の音が更に轉じて y となることもあるのである。日の音 jit が廣東の土音で yat になつて居るのは此の例である。要するに日を呼ぶに yat, jit, net などの語のあるのは熱の音 net 今の北平音 jè に關係あるものと思はれる。尙漢の劉熙の釋名に日は實也とあるのは jit の一音にて解釋がつく。

附記　支那西南の山地に住む部族 Kiranti group の語に於いて太陽を nam と普通に呼んで居るのは陰陽の陽の義にあたるもので、漢民族の言葉では南 nam, が之に關聯して居るのではあるまいか。又男の音の nam, dam なども之に緣故はないか。

以上鹽と鹹、熱と日との二つの場合で見られる通り支那の言葉を文字上から離し抽象的に考へて見ると頗る面白い關係を文字相互の間に發見することが出來る。言語の方から支那文字を觀察するには特に文字の音韻の側と意義の側とを引き抽いて考へなければならぬ。此の觀方は從來殆んど全く顧みられなかつたやうに思はれるが、苟も支那の言語そのものを洞察せんとするには是非その字形の束に拘泥することなく、其の言葉の本體を拉し來つて觀察しなければならぬのである。

今支那語の音韻と意義との關係上から互に緣故の近いやうに思はれる言葉を集めて見ると假令其の文字の形には違ひがあつても、其の間に動かす可からざる言語上の聯絡が伏在して居るやうに思はれる。以下には種々の實例を取つて之を述べて見よう。

（一）酷烈の義と kok, kak 等の音

殘酷とか峻險とか又はそれに以た意義を表彰する支那の言語には k 又は g の語頭音を有するものが頗る多い。それに從ふ母音の種類は色々あつてきまらないが、大抵皆入聲音で終つて居ると云ふ點で

一致して居る。

kok　酷、刻、國、域（古音 kwok）、（谷極）獄、(gok)

kak　劃、革、角、覈、獲、赫、烙 (lak)、嶽、岳 (gak)、逆、虐、噩、骼

kek　激、戟、擊 (gek)

kik　臼、畜、肉（古音 kik）

これ等の多くが爭鬪に關する言葉であることは注目す可き點である。

（二）切斷の義と kat, ket の音

支那語の古音では kak も kat もおしたる意義上の差はなく、孰れも殘虐なる義を有して居る。併しtの入聲で終つて居る方のものは截ち切るとか衝き立つとか云ふ義が含まれて居る。例へば ket と云ふ音は切（古音 ket）又は決と云ふはたらきを意味して居り、又血の字は切つた爲めに出る血 (ket) を指すのであるが、兎も角 ket なる音と刀刃と云ふ義との間には或る關係があるものの如く、契 (ket) の字が刀に从つて出來て居るなども桀紂の人柄と桀の音 ket との間に何か或る言語上の關係があるらしく思はれる。

ket　切（古音 ket）、決、血、桀、契、穴、缺、月、厥、劌、闕、譎

kat　割（刂は刀なり）、殺（古音 kat?）、黠（わるがしこき義）

kot　骨、兀、窟、掘 (kut)

kit　屹、拮

（三）集合の義と lui, lei の音

古代の支那語に集り、重なり、連り合ふ、竝ぶなど云ふ義を示すものに時としては lui, lei その他 lai など云ふ音を取つて居るものがある。つまり物が二箇以上集つた場合に起ることがらに關した言葉に多く此れ等の音を見出すのである。後世の支那語ではその複母音が器母音になり、殊に ai の音がiとして現れて居るから lai, lei などは li の音になつて居る。これは今日の北平官話を南支音に較べて見てもよくわかる。禮の南音 lai, lei が北平音で li（日曜日を li pai 禮拜と云ふ。此の時の禮の音の如し）となつて居るのも其の一例である。今集まると云へる原義の言葉と文字で lui, lai, lei の音を取つて居るものを左に掲げる。

lui　壘、類(頴)、戾、累、(纍)

lai　磊、來、(素とはライ麥?を指す)、賴、雷、(說文には雷は靁の省)

lai　例、儷、(伉儷)

今の北平音 li のうちに含まれるもの、黎、禮、麗、儷、勵、戾、例

今の北平音 lei のうちに含まれるもの、雷、累、纍、磊、類

此れ等の語は概して衆多の義を示して居る。依つて考ふるに民衆のことを黎民など云ふ此の時の黎 lei（廣東音 lei 福州音 lae）は卽ち衆く集まるの義を示す言葉の音をうつして居るものではあるまいか。

尙支那語でLの音を以つて集合の義を示して居るものに lim, lam などの音がある。樹木の集合を lim（廣東音 lem 福州音 lang）と云ひ降雨のながきを lim と云ひ貪ることの多きを lam と云ふなどは言語上互に關係があるやうに思はれる。卽ち lim も lam も同語源の語ではあるまいか。其の實例は次ぎの如きものである。

lim　林、霖、森（支那音韻史上Lの音はSに轉じ得。他に例證少なからず）

lam　婪（貪婪）

（四）兼併の義と tsang の音

古代支那語に於いて兼併の義を示す言葉に種々の系統がある。kap 又は kam の系統があり。tap 又は tam の系統があり。又 tsang の音の系統もある。玆に述べるところのものは此の最後のものであるが、これに屬するものは併せ藏むるとか互に相竝合するとか云ふ義が裏面に相纏ふて居る。文字の上には意義が特殊化せられて現れて居るけれども、その原義は餘り關係の遠いものではあるまいと思ふ。

tsang, tsong　倉、藏、雙、相、想、葬、總、層

tsan　贊

（五）蟲類と man mong の音

支那語の蟲に關する言葉は man, mong, min, ming, 時としては mao の音を以つて呼ばれ其の音符（phonetical symbol）に使用せられて居るものは縵（man, van）蒙（mong）門（min）冥（ming）莽（mang）文（mun）孜（mao）などである。その字は如何にちがつても凡べて蟲なる語の音をうつして居るに過ぎない。卽ち

man, mang　蠻、萬（說文參照）蟒

mong　蠓、蝱（蚊の音 mun は今の北平音で mên となる）

min, ming　閩、螟

mao　蝥

以上に擧げたものは文字の相互に現れた言葉を觀る一例である。支那人は文字の形式に凝り種々雜多な文字を拵へるけれども之をその裏面に存する言葉の方から觀るときは比較的僅かのものに煎じ詰められるのである。從來支那の訓詁の學とか日本の漢學などでは主としてその字形が貴ばれて其の裏面に伏在して居る言語と云ふものを看破することが少なかつたのではあるまいか。支那の言語に外な

ちぬ漢文を見るに於いても之を文字として見ず、飽くまで言語として觀察しなければならぬ。文字に餘り重きを置いて觀る時は字面の意義の爲めに往々欺かれてその言語の眞髓をつかまへることが出來ずして終ることがある。これ支那文字を觀察する上に特に注意を要する點である。

要するに文字の上では如何に違つてゐても言葉の音の方から觀る時には同義のものたることを示して居るものが餘程多いのである。それが同音である爲めに同語であることの一見して判るものもあれば、同音でなくとも音聲學上素と同音の語であつたことを察知することの出來るものも亦餘程多くあるのである。これは支那言語學上最も趣味のある研究方面の一つである。

字音相互の比較の上から古代支那語の語彙關係に就いて尙觀察して見ると種々の興味ある例が見出される。此の研究は支那語の語源を攷へるときに有力な手懸りを與へるものとなるのである。が尙言語學が歷史學に補助的材料を與へると云ふ局面から見ても此の研究によりて上代否歷史時代以前に於ける支那民族が抱いて居たと思はれる思想の一斑も推測せられるのである。有史以前に於ける漢民族の思想は必ずしも言語にのみ依らなくとも他に幾らも之をさぐる方法があるであらう。例へば文字製作上より上代の歷史事實を窺ふのも其の一法である。けれども文字は言語の既に存するものがあつて然る後に出來たものであることは無論のことであるから文字を方便として居てはさぐり得ない範圍でも言語の方便によれば推測し得られることのあるのは見易き理で、確かに史學研究上一つの傍證となり得るものである。

古代の支那語を窺ふにはその言葉を古の形に引き戻して攷へなければならぬ。然るにその音の方面のみを取つて攷へて見ても時代の推移と共に頗る著しい變化を受けて今日に至つて居るのである。今日の北平的官話 (Pei Phing ti kuan hua) に存する音韻が古韻に遠ざかつて居ることは云はずもがなであるが、さらばと云つて古韻に近いと稱せられて居る朝鮮音南支（福州厦門廣東）音又は日本の所謂漢吳音（こは科學的の呼びかたでないが）などでも五十步百步で必ずしも古音が此れ等の中に屹度見出し得られるとは云はれない。今日では殆んど全くいづくにも殘つて居ない豫想外の古音が自ら可成りたくさんあつたことを發見するのである。單簡な形のもので云へば

肆……ssu（北平音）……sa（朝鮮音）……古音 Tai（先秦音）
之……čih（北平音）……či（朝鮮音）……古音 Tai（更に古くは Tok）
始……sih（北平音）……si（朝鮮音）……古音 Tai（更に古くは Tak?）

などの如きはその一例である。玆には自分のしらべた結果として今音に對照して古音を列擧したまで詳細なる比較考證は後章に讓る。

後世では全く忘れられてしまつて居る古音であつても苟も古代支那語の比較の上にはその古音の形を材料として攷究しなければならぬ。韻鏡などから機械的にわり出した音が從來古韻のやうに考へら

れて居た傾きがあつたが、それは唯舊來の信仰たるに過ぎないので、科學的の觀察から得た結果とは思はれない。こゝには總べて日本音と云はず朝鮮音と云はず又支那音と云はず、その後世の發達に屬すと攷へられる音は成る可く避けて古音相互の間に現れて居る古代支那語の二三を窺つて見よう。

（六）高大の義と Tai の音

支那語で高く、貴く、大きいなどの觀念を表彰した言葉に tai の音を取つて居るものが少くない。簡單にその實例を擧げて見れば、

始皇帝 Sih Huang Ti の帝の音は北平音で ti 朝鮮音で ćé 日本で普通に tei と讀み來たつて居るけれども古音は云ふまでもなく帝 tai の音であつた。（尙其の根本古音に就いて本篇第十一章參照）然るに北部支那（黃河の流域）地方の音韻史を案ずるに二重母音の ai なる古音は次ぎの如き變遷をなして今日に至つて居る。卽ち

ai ⟶ aei ⟶ ei ⟶ e ⟶ i

(tai)　(taei)　(tei)　(te)　(ti)

此の音韻變化の順序はインド、ゲルマーネン (Indo germanen) の言語に於いても一般に認められて居るもので英語の i (ai) が獨逸語で i (i) となつて居るのも此の例に漏れない現象である。さて支那で高貴のものを tai と云つて居たことは自分の考へでは北部も中部も南部の方も略差はなかつたのではあるまいか。北方長安洛陽方面で tai の音になりかゝつた時でも中部江左地方建業の都などでは尙 tai の ai が殘つて居たものと思はれる。北方で帝を tei と云ふに反して江左方面で之を tai, dai（隋の煬帝 Yang-dai）と云ふのは此の爲めである。併し今日の江左音は北方からの影響でもあるか、總べて變遷して ti となつて居るが更に南の方、

福州音……帝　tae

廣州音……帝　tai

などのあるのを見ると、方言分布の上又音韻學上で帝の古音に tai 又は da の音の存して居たことだけは攷へられる。

始皇帝以後武帝文帝煬帝などと云ふ如く後世の支那語では帝なる語が兎に角其の本名のあとに附けて呼ばれ、決して帝武とか帝文とかは云はない。これは帝なる語が天子と云ふ一般的名稱となつたから支那語の特質たる語序 (word-order) の關係よりして 武＋帝 とか 文＋帝 とか云ふ順序の語を成すに至つたのであることは云ふまでもない。然るに支那の傳說時代とも云はれて居る五帝時代の名稱にはその逆の語序が往々見られる。卽ち 帝＋堯 とか 帝＋舜 とか云ふがその好適例であつて普通には堯帝、舜帝などとは云はれて居ない。これは如何なる理由によるのであるか。支那語發達史上から觀て此の現象は如何に解釋せらる可きものであるか自分には判らない。けれども玆に臆測とし

て次ぎのやうなことが攷へられはしないか。

帝堯、帝舜の帝の音は tai, dai が古音で始め大 tai, dai などの言葉と關係はなかつたか。これには古人の說もあるやうであるが此の場合の帝 tai なる語は寧ろ堯なり舜なりの德を讚美する爲めその固有の名前の頭に置かれた言葉ではあるまいか。若し文法上から解剖することが出來るならばこの tai とは玆で高貴又は大の義を示す形容詞の如きものではあるまいか。果して然りとするならばかやうな德の大いなるものをその當時又その後一般に tai（帝の音）なる音で呼ぶに至つたものかと思はれる。但し五帝のうちには黃帝と云ふ如くあとに帝の附けられて居るもののあるのは當時その語序が尙動搖 (flacutnate) して居た爲めでもあるか。又は老莊等の後人が後世の呼びかたから類推して附けたものが傳はつて居るのであるか。つまり五帝の名稱が事實傳說の如くであつたのか否かは、頗るきめにくい問題であるが若し傳說の通りのものとすれば帝 tai の意義は以上の如きものであつたと見ては如何であらうか。尙之が傍證として tai 帝なる音に關係のある他の言葉に就いて觀察して見る必要がある。

帝 tai の御世 (generation) が代 tai, dai の音を取り、うてなの樓臺が臺 tai, dai の音で呼ばれ、又支那上代の貴重品たる貝の字を意義の要素として居る貨の字音の tai の如き其他泰山の泰 tai と云ふ音、又は堆き義である小盲（說文參照）卽ち後世の盲の音の tai（說文及び經傳釋詞參考）であるなどは總べて皆、帝 tai, dai と同樣に高く、貴く、大きいと云ふ觀念を表はして居るものと思はれる。

爾雅の本文に哉胎（中略）始也とある。說文に依ると哉は諧聲文字で素と才の聲に依つて其の音が出て居る。然るに才の古音は自分の觀るところでは tai の音である。若し此の觀方が誤つて居ないとするならば哉は胎、始などと古音を同うするものかと思はれる。卽ち

哉の古音……Tai
胎の古音……Tai
始の古音……Tai

音韻上から古代の支那語を推測すると高大の觀念と物の始めの觀念とは互に連絡のあるものと考へられて居たものらしい。尙 tai の音を有する言葉としては自由放任と云ふ義で現れて居るものがある。卽ち

肆……古音　Tai
（經傳釋詞に肆は遂也とある遂の古音は同じく tai）

同意義の語に tai でなく別に lai の音で現れて居るものがある。卽ち

磊……古音　Lai　北平音　lei　朝鮮音　neui

此の Lai の音は音韻學上 Tai の音と頗る相近い性質を有して居るもので共に Lingo-dental の音

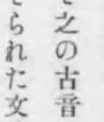
に屬して居る。のみならず支那語ではまゝ此の兩音が互に相轉換して居ることを見るのである。それ故 tai, lai の音は二樣に分れて居ても素とは大差のなかつたものかと思はれる。

以上は古代の支那語に於いて高大又は自由の義を示すものに tai 時としては又 lai の音の存して居たことを述べたのである。然るに tai の音が自由の義を取つて居るのは高又は大の義から起つて居るのではあるが、尙之よりも一層緣故の近い語詞があつてそれと直接の關係を有して居るやうに思はれる。其れは卽ち次ぎの如き文字に於いて窺ふことが出來る。

之……ćih（北平音）……ći（朝鮮音）……古音 Tai

兌……tai（北平音）……t'e（朝鮮音）……古音 Tai

此れ等の文字が表彰する言葉の原義は『發し出づる』とか『伸び出づる』とか云ふことで兌は發兌など云ふ熟語に依りても明かに其の原意は判かる。之の字は上代では底と音通として現れ後世では地と音通文字となり、今日の北平官話では專ら的 ti と云ふ同音異字で現れて居る。併し之の字が始め出來た當時は『伸び出づる』又は『生ひ出づる』義を有して居たものである。鐘鼎文に次ぎの如き繪



文字の見えて居るのは此の義を示したものであつて後漢の許愼もこれを以つて艸木が地面から生ひ出る象形と見て居る。許愼の此の見解は當つて居る。又日本で之の字をユキ（行きの義）と訓讀して居るのも此の點で當つて居る。方向定めず行くことを之と云ふのも玆に聯絡する所があるのである。之の字の原義はかやうであるが、次ぎに然らばなぜ此の古音が Tai であるかに就いて一言して置かう。

先づ地理上から現今の方言相互の間に如何に觀察せられるかと云ふに、

之の字の音
- ćih ……北平音
- tsz ……溫州音
- ći ……廣東及朝鮮音
- si ……日本音

ジャイルス (Herbert A. Giles) 氏が之の日本音を ći として居るのは無論誤りである。地理上からは到底之の古音は窺れないが文字上に現れた音韻現象から此れを觀ると諧聲文字の待の字に於いて始めて之の古音の Tai なることが發見せられるのである。許愼の言を俟つ迄もなく待は从彳寺聲で組み立てられた文字でその寺の字は更に分解して土と寸の兩部に分かたれる。許愼は土の部分がこれの音符 (phonetical symbol) であることに氣が附いて居ないが、自分の攷へでは寺は从寸土聲とある可き諧聲文字であると思ふ。但しその土は土地の土に非ずして之の字の變形したものである。土の字に類

推せられた俗字たるに過ぎない。その證據に金石文などには之の字の古形が見えて居る。尙玆に擧げた篆書に依つても見られる通りである。それ故つまるところ之の古音

は tai で今日ではその諧聲なる寺の字にこそ tai の音は殘つて居ないが待の字にそれが窺はれる。安南で寺の字の音は ti となつて居るがこれは此の字音沿革史上中間の一狀態に在るのである。尙妻及び棲の古音が tai であるのも之の字の音符に依つて居るものと思はれる。(古文參考)。

かやうな事實を總括して攷へて見ると『出で行く』、『伸び出る』の義の之の字に tai の音の存して居たことは十分推測が出來るのである。

以上は音韻の方面及び意義の方面から『出づる』と云ふ語の tai 卽ち『自由』の義の『之』及び『肆』は互に關係のある語で尙高貴又は大の義の tai 卽ち帝、代、大、臺、泰、巨なども之と何か關係のある語と見られまいか、と云ふ臆測を立てたのである。

現今暹羅國あたりに Shan とか Tai とか云つて此れも同じく單綴語 (monosyllabic language) を話して居る種族がある。その Tai 族に又 Great Tai と Little Tai との二種がある。土人に就いて其の Tai と云ふ語の意味を聞いて見ると『自由』Free の義で自分共は素と北方から來た自由の人間であるからから此の名稱を附けて居るのであると答へて居る (Hutchinson: Living races of mankind) 此の Tai 種族の名稱が果して眞にかくの如き意義を素とから有して居たものであるならば支那語の Tai と語系上何等かの關係があるやうに想像される。

大、臺、泰の tai 肆、之、兌の tai 及び Tai 種族の tai などを通じて存する一種の或る觀念は『帝 tai』の有する其の觀念と互に相聯絡するところがある。先秦の爾雅には帝は君也とあり。後漢の說文には帝は諦也王天下之號也と見えて審かに明かにする義に取つてある。さかし自分は帝は古音 tai で大、自由、高、貴などの義から出て居る言葉であるまいかと思ふ。而して五帝とか皇帝とか天下の義に用ひられるに至つたのは寧ろ第二次的の意義で『大いなるもの』『高いもの』と云ふがそれ以前の第一義ではなかつたかと思ふ。夏及び夏以前の三皇五帝の時代などが果して歷史事實として確かに存在して居たものかどうか。もし存して居たとしても傳說の如くに古いものかどうかは歷史學上疑はれて居るとのことである。或は後世のものの作りごとかも知れない。從つて帝なる名稱の用ひかたも後世のものに倣つてつけたものかも知れない。孰れにせよ帝と云ふ言葉の古音と古義とは上述のやうな由來を有するものと考へる。帝なる文字の成り立ちに就いては別問題であるから玆には之に論及しないで置く。

(七)　不又は沒の義と put, mut の音

今日の支那語に打消しの言葉は色々あるが不是 pu si 不要 pu yao などの不 pu, 及び沒有 mei yu などの沒 mei が普通に行はれて居るものである。今日 wu (無) fei (非) mo (莫) wu (勿) の音で知られて居る無、非、莫、勿などは官話では用ひない。後世の支那語で打消しの言葉は幾種にも別れて來て居るが古くは次ぎの二つの音がその主なるものでなかつたかと思はれる。卽ち

打消語 { put ……不
　　 { mut ……勿

である。十二三世紀以後支那では言語上非常な變動を來たしてそれと共に入聲音は漸次消滅に歸するに至つた。これが今の北平官話に全然入聲音のない由來をなして居るので不 pu, 沒 mei, mo, 勿 wu の音も此の爲めに生じたものである。尤も此の種の現象は十二三世紀當時に限つたわけでなく漢民族と北方民族との接觸せる限り餘程古い時代から既に現れて居たのである。唯古代にはそれ程迄に激烈でなかつたと云ふに過ぎない。不 pu の古代音に就いては

說文は { 鳥飛上翔不下來也
　　 { 从二猶天也（方久切）

說文に { 不也从口从不
　　 { 不亦聲（方久切）

とある位で後漢の時既に入聲は消滅して pu の音であつたらしく見えて居る。併し pu が果して不の本音であるか、どうか。疑ひの餘地がある。今左に其のわけを述べて見ると、

地理上の觀察。　支那南方地方の方言音及び安南音で不は明かに入聲で現れて居る。朝鮮では支那の入聲と同一ではないが尙入聲に準ずる L の語尾音で現れて居ることを見るのである。卽ち、

不の音 { pêt ……廣州音
　　 { put ……客家音
　　 { pêt ……安南音
　　 { pul ……朝鮮音

南方の音韻及び朝鮮の字音が普通には支那の古音を保存して居るとは云ふものの又各の場合に就いて吟味を要することは前の之、肆、始などの例に徵して見ても察せられる。然らば今玆に不の古音に就いては如何かと云ふに之には歷史上の觀かたを要するのである。

歷史的の觀察。　支那の記錄に音通文字を以つて或る文字を書き表はすことは古も今も變りはないので言語そのものから觀れば同一の言葉として取扱ふことが出來るのである。

左傳に、　楚有亡而已蔑從晉矣

晉語に、　吾有死而已吾蔑從之矣

とあるそのうちの蔑從 put tsung は卽ち不從 put tsung であるやうに考證せられ、王引之も蔑は無也として居る。これは正しく不 put と字こそ異なれ言葉としては同一であるものと思はれる。更に之を他の文字との比較上より見ても同じ結論になる。卽ち

文字上の觀察。　文字相互の間に於いて不と同音同義のもの又は之に似たる同音同義のものを取りて考ふるに、例へば

fêt ……廣州音

弗の字の音 { fwêt……客家音
　　fêt ……安南音
　　pul ……朝鮮音 }

の如く總べて入聲 fêt 又は put の音を有するものが不と同義に用ひられて居ることは玆に改めて云ふまでもない。

以上三方面からの觀察によつて見ると打消しの言葉として不が弗、蔑の如く fêt, put, bet など兎に角入聲音であつたかと云ふ推察が出來る。然るに同じ打消しの支那古代語には別に mut の音で現れて居るものがある。

亞細亞東南部の言語に打消しの語が m の語頭音で現れて居ることは今更らしく云ひ立てる迄でもないが支那に於いても次ぎの如きものがある。

mut……勿沒
mak……莫
mu ……無
met ……滅
mat ……抹
mai ……未

此のうちで上述の不 Put に關係のあるものは勿沒 mut の音である。音韻學 (phonetics) 上 p の音も M の音も共に兩唇音 (bilabiale) で韻鏡の學で云へば共に重唇音に屬するものである。今日北平に行れて居る言葉に於いても

辰の字の音字 { 派……pai
　　脈……mai, mo }

の如く p と m との轉換がある。之と同樣に古代の支那語に於いても、

打消しの言葉に { 不、弗……put
　　勿沒……mut, mot }

の二樣の形が分れて發達したのではあるまいか。然らば此の二種の形のうち孰れが古いかと云ふに此れは容易に決定しにくい。或は別に第三の形があつてそれから分岐したものと攷へられないでもない。例へば p, m の兩音は轉じ易い B 音から

But ⟶ put
　　⟶ mut

と假定し得られるかも知れない。日本に傳つて來た音は支那から百濟音化して這入つたものもあり江

左方面から這入つたものもあり北方からのものもあり、又日本で訛つたもの、類推したものなど色々あつて判然したことはわかりにくい。さらばと云つて支那本土の音を見てもpがあり、bがあり、mがあり、又時としてwの音などの種々の語頭音を取つて現れて居る。

支那人が素と外國語をうつした音譯に勿吉と云ふ文字があり史家の攷證ではこれが靺鞨と異字同語であると云はれて居る。併しその本地の原語が Bagatur で、それの音を寫したものであるならば勿mutは寧ろ bag の音に近かくあつたと云へないでもない。況して勿の結局の古音は自分の攷へるところでは kwot 又は hwot（忽の音）で其の語頭音が消えてあとの wot から vot, bot が發達したものとも見られ得るのである。これは But と云ふ古音を假定し得るものとしての見解であつて確かな事實として玆に斷定するのではない。

然るに玆に打消し語に就いて古代 mut の音の存在をいくらか確かめ得る傍證的事實がある。それは既にも一寸述べて置いた亞細亞東南部諸地方に現今行はれて居る否定語の分布である。卽ち、

無（non）なる語に對しては、

Nepal, Newar 語……makhu
Thochu 語……mongwa, mang
Kiranti 語……mang
Denwar 語……makhi
緬甸 Burma 語……mahut
暹羅 Siam 語……michi

不（ne）なる語に對しては、

Brahui語……mat
Nepal, Serpa 語……ma
Kiranti 語……man
Dumi 語……mu
Bengal, Kocch 語……mat
緬甸 Burma 語……ma-nang
Shan語……ma-het-a
暹羅 Siam 語……ma-htan, mi, ya
Ahom ……ma, ba
Laos……mai, bo

支那語以外の單綴語に於いて既にかくの如しである。支那語內部に於いても現今 mo, mu, mei が

あり。方言に mut, mot, muk などがある。今日を以つて古代を推すは必しも的確なりと云はれないが斯くも廣い單綴語族の間に於いて語頭音 (initial) に m が立つて居るのは有力な傍證を此の問題に與へるわけであらうと信ずる。但し此の問題には單に音韻學の方面だけでなく、心理的の側とか生理的の側のことも攷へに入れて考へなければならぬのであるが、論が枝葉にわたるから省いて置く。

要するに支那上代の言語で否定を表すには put, (不、弗) but, mut (勿沒) などの形があつたやうに思はれる。其のうちでも殊に mut の音が多くはなかつたか。put にせよ mut にせよその入聲音たる t (歐洲語の語尾音 t とは全く別である) は時代と共に次第に消滅して第十二三世紀以後の言語上の大變遷と共に今日見る音に近い形と變じ今では全く不は pu 沒は mo, mei と北平官話などで發音せられて居るけれども其の古音は不 put, 沒 mut であつて其のうちでも mut の方が一般の否定語であつたやうに推測せられるのである。

(八)　君王の意義と kun, kung, kuang の音

爾雅に皇、王、公などは君也とある。其の君なる語の意義に就いては古來支那人が群る義から出て居るとして居る。このことは卽ち、

從之成群曰君（周書）

君者善群也（荀子）

君群也（班固の白虎通義）

に於いても察せられる。而して君の音は kun である。支那語の音韻史上又發音の性質上 kun の音が kung と相轉じあふことは珍らしくない現象である。今日支那の諸方言に就いて見ても

君の音
- kwên ……廣東音
- kung ……福州音
- cüing ……寧波音
- cün ……北平音

の如きものがある。之に依て見ると kun, kung の二者何れにもなり得ることが察せられる。卽ち君 kun は kung の音を取つて呼ばれ得たことが推測せられる。これ爾雅に公 kung は君 kun なりとある所以である。かやうに古代の支那語で kun, とか kung とか云ふ音は君王の稱呼となつては居るが素と本來は之に『大いなる』と云ふ義がありはしなかつたか。それは卽ち、

孔の字……古音 kung 說文段註に孔は康董切

に於いて現れて居て、『大』とか『甚だ』とかの意味が之に含まれて居るのである。而して現今の方言音では、

- k'ung ……北平及福州音

孔の音
- k'öng ……寧波音
- koung ……安南音
- kong ……朝鮮字音

の如くに現れて居る。自分の臆測では kung の音を有する孔は大の義であるから語源上から孔子を解釋するならば大人卽ち德の大なる人の義となるわけであると思はれる。尤も孔子の家は代々の名家であるから獨り孔子に限つてかゝる解釋を試みることは出來ないのである。

『大』の意義を有して居る kung の古音は孔 kung の外に尙廣 kong, kuang 宏 kung 洪（洪範の洪）kung 江 kung 空 k'ung などがある。皆最初の語源を同じうして居た言葉の音と見られる。

之を要するに古代の支那語で『大』なる意義が kung の音に結び付けられて居る。而して君の字の音が kun 又方言音には時として kung となつて現れて居る。次ぎに然らば君の字以外に於いて君王又は之に關係のある語と思はれるものに同音で呼ばれて居るものはないかと云ふに、少からずある。卽ち、

公……kung　爾雅に公は君也、
とあるを始めとして尙、
貢……kung
弓……kung
功……kung　勳の音 kun はこの功 kung に關係なきか。
宮……kung　說文に宮は室也从ウ躬省聲（居戎切）
供……kung
恭……kung

の如きものがある。此れ等の言葉が孰れも直接に宏 kung 洪 kuang 廣 kang などと同類語であるとは云へないにしても君王に關聯するところのある語であると云ふことは攷へられる。然るに既にも述べたやうに君 kun, kung と云ふ言葉は宏大の義から出て居るものと思はれる、其れ故其の決論は推して想像される。

言語は各時代の思想が複雜になり行くに從つて漸次色々と似て違つた言葉を發達させて行くことは何處もかはらない。古代支那語の kun, kung（宏大なる觀念）からして君王其他多くの言葉が發達して生じて來たのも其一例である。然らば支那の君 kun, kung, は外國語に比較して見れば如何支那塞外北狄蒙古の言葉では宛も

kh'an, k'an, han, (kakhan)……汗（可汗）の義
kun ……人の義

など云ふ語がある。されば偶然の似寄りかも知れぬが言語上面白い現象である。

次ぎに君王に關係のある語で少しく別の音を取て居るものに就いて述べて見よう。

爾雅に皇、王は君也とある。これは自分の考では『王』の字は工(kuang)を音符とせる諧聲の文字であるから君(kun)と音がかよへるものと思ふ。尙今日の支那音では皇は huang, 王は uang, 卽ち wang である。皇をコウ（皇室）と發音し又はノウ（天皇）と連讀するのは日本だけの音である。此の日本音の現象は次ぎの理由から起つて居るのである。

皇 huang → kuang → kōng → kou → kō（皇）
　　↘ k'uang → uang → ou → (ten)—n+ou（天皇）

皇の本音は huang であるのに此れがなぜ君也と解せられて居るか。此の問題には文字の方面意義の方面、音の方面と色々の觀方があるが玆には言語上の立脚地から其の音と義との方面を觀察して見よう。

支那語の音韻沿革史上hの音はk又はk'卽ち kh と密接の關係を有して居る。時としてhは此れ等の音から導き出されて居るものもある位であるから huang の音から kuang, k'uang の音に泝り得られる。少くとも其れと假定することは出來る。然るに廣の古音 kung が kuang となつて居るやうに一つの母音から二重母音を發達させることがある。而かも廣と皇とは自分の觀るところでは孔、洪、宏などと共に意義上相似た言葉であると思はれる。此の攷が誤つて居ないとすると皇 huang 卽ち kuang と云ふ音は素と kung なる一層根本的の言葉の音から出て居るものと見ることが出來る。

先秦に於ける皇の本音は科學的に確められないけれども爾雅に皇と君を同一語と認めて居る點から推測し且つ上述の音韻轉化の現象と廣、皇の言語上の關係などから綜合して攷へると次ぎの如き類似があつたのではあるまいか。卽ち、

皇の古音……kung, kun

君の古音……kun, kung

更に皇の意義に就いて見るに其の文字が既に王の字を含んで居るし從つて君王に關係した義がありまた之に宏大の義が伴うて居る。

說文にも皇は大也とあり、尙从自（鼻のこと）自始也始皇者三皇大君也（中略）（胡光切）とある。

次ぎに皇の二次的以後の音と思はれる kuang なる音に就いて同じく君王とか宏大とか云ふ義の含まれて居るものがあるかと云ふにこれ亦ある。但し kuang でなく kuan の音を取つて居る。卽ち、

冠……kuan
官……kuan　} 君王に關する言葉

寛……k'uan〉廣大の義を有する言葉。說文に寛は屋寛大也。

爾雅に元 kuan, guan 權 kuan, guan は始也と見えて居るけれども此れは寧ろ君王に關する言葉か又は大の原義を有して居たものかと思はれる。これを始也と見るなどは二次的以後の義を指して居るに過ぎないのである。

かやうに kung から kuang, kuan の音に向つて發達した言葉に於いても本來 kung, kun の意であつたものと同樣の意義の範圍に現れて居る。これ皇の音の kuang が素と kung から出て居ると云ふ意義の側の證據である。

以上は總べて k 音を語頭音として君王の觀念が表彰せられて居るもののみに就いて述べたのである。

然るに君王を呼ぶ言葉に唯一つ例外として W の音で始まつて居るものがある。それは卽ち王 wang なる言葉である。これは支那語の語源の上から且つは支那音韻史上から觀て如何なるものであらうか。自分の研究の結果によると今日迄のところでは決して例外どころでなく矢張り上來述べた皇 kuang の部類に這入るものと思はれる。左に其の理由の一斑を單言して見よう。

君 kung, kun と云ふ言葉が宏大の義に起源して居てそれが君王の義となり之に關係ある語として皇 kuang△kung の音が出たことは以上の通りである。而してその kuang から huang（後の皇の音）が出たことも亦容易に攷へられる。然るに支那音の h なる語頭音は蒙古などの h 音と遠ひ比較的柔かで音韻史上屢其の消滅して居る現象を見るのである。外國語の音譯に於いて例へば

Uigur ……回紇　Hui kut

とある。回は hui の音で ui をうつすやうなことがあり。又行の唐音 hang が日本で行燈、行脚に於けるが如く ang の音で傳へられて居るやうなこともある。又完の音 huan が一般に uan となつて居る。かゝる例は支那語に乏しくない現象である。

かゝる事實から推して攷へるに王の字は皇の字が出來た當時は未だ wang の音までに進んで居なかつたのではあるまいか。換言するならば皇の後の音 huang から更に進んで uang となつたが併し之に尙君王と云ふ素との意義を傳へて居るのではあるまいか。唯それがよほど古い時代に起つたので今では王が huang の音であつたなどは知られて居ないけれども言語上又文字上爭はれぬことと思はれる。從つて王そのものは素と kuang の音で呼ばれて居たかと推測せられる。それ故に、

王の古音……kuang
皇の古音……kuang　（但し二次的の古音）

と云ふことが云はれる。然るに其の意義の根本に推し詰めると、

王の古音……kung

ではなかつたか。kung の音は kun と性質相近いから結局

王の古音……kung, kun

と見られる、かやうに見て來ると語源上公の kung, 君の kun も之に關聯するところがありはしないか、爾雅に公王は君也とあるものを音韻上から見ると斯くの如くに觀られるのである。

之を要するに支那語の音韻沿革上から君王なるものの呼び方は次ぎの如くに變遷して居るのである。

君王 knug, 又 kun ⟶ kun（君）⟶ ǩün（君）
　　⟶ kung（公）⟶ kuang（皇）⟶ huang（皇）⟶ wang（王）

而して此の音の系統の最も根本のところは音クンであつて、君と王とが同一又は最も類似して居た音を有せしことに存するのである。此の點は既にも述べたる如く王の字が素と工の字即ち古音 kung であつた『工』を音符とせる文字なることに依つても明かに證明が出來るのである。附記す、自分は初めより王の字を諧聲の文字であると思ふのである。

音韻の學が言語學と兩輛相俟つて歴史の研究の上に少なからぬ貢獻をすることは爭はれぬ。王の字の古音が從來は陽漾の韻で唯 wang とばかり攷へられて居た。けれども上に述べて置いた研究が若し誤つて居ないとすると王の古音は huang（皇）から kuang（廣光）などの音に派ることが出來更に尙根本の處に推し詰めると kung の音で公の原音 kung 君の原音 kun などと語源を等しうして居る言葉であることがわかる。古代支那語の kung（君、王）が印度ゲルマーネンの king, cynng（アングロサキソンの語）König に强ちに關係があるなどと速斷することは素とより許されないが兎に角言語學的音韻の研鑽が史學研究と密接の關係を有することは疑はれない。

支那文字に現れた音韻に就いて是れ迄述べ來たつた大體の筋路は（イ）從來支那文字は總括的に象形文字とばかり呼ばれて居たが其實少なからぬ支那式に表音的組織の發達を遂げて居るもののあること。（ロ）同じ音符を有して居る支那文字に音の相違のあることが多いがそれは一定の音韻變化の規則に依つて居ること。（ハ）同じ音符に K 音と音と L の共存する場合があるがそれは支那語の元始的狀態を觀る上に最も注目す可き手懸りとなること。（ニ）一般の字音相互間に現れた言語上の關係は文字に欺かれないで言葉の方から觀察して研究す可きこと。かやうなものでつまり以上は字音に關する一般的現象を述べたまでである。次ぎには之を歴史的の方面から觀て字音が時代に依つて如何なる變遷を經て來て居るかと云ふ觀察に這入らう。

二　字音の歴史的沿革

今日の北平官話の音韻を觀察して先づ氣附く點の一つは北平音に全くガギグゲゴの音の缺けて存し

ないと云ふことである。畢竟官話にはG音が存して居ないと云ふことである。其れ故例へば學堂と書いても之れを gak tang とは云はないで hsüe tang と發音して居る。然るに又支那史に屢現れて來る兀の字音に就いて觀察して見るに今日は之を次ぎの如くに發音して居る。

イ　兀 wu ……北平音

尙之を第十八世紀に泝りて攷ふるに、例へば琉球に關する中山傳信錄（康熙五十七年刊）に依ると、

兀 wu ……兀煞吉（日本語ウサギ）今の琉球語では usaji

の音譯があり。尙此の外吾の字の音に就いて見るも次ぎの如き音譯がある。

吾 o ……吾卜煞（日本語オモサ）今の琉球語では nbusa

吾 u ……吾失（日本語ウシ）

之に依つて見ると當時兀をGの音で got などとは讀んで居なかつたものらしく思はれる。併し今日は兀も吾も北平では W の語頭音を有して居るのであるからつまり當時の音は今日の北平音に餘程近づいて來て居たものと攷へられる。但し同書には又

吾 go ……吾賣每（日本語ゴモンメ）

吾 go ……吾括子（日本語ゴグァツ）

と云ふ音譯も見えて居る所から考へると必しも今の北平音の通りG音が全く缺けて居たとも云へないと。然るに兀の音に就ては清朝以前の文獻に徵すると例へば

元朝祕史（第十四世紀半葉）に

兀 gu ……委兀兒（Uigur）

元史（第十四世紀）に

兀 gu ……兀剌赤（guro）

舊唐書（第十世紀）室韋傳に

兀 gol ……蒙兀（Mongol）

などがある。尙蒙兀（Mongol）の別譯としては、瓦の字を用ひて

新唐書（第十一世紀）に

瓦 go ……蒙瓦（Mongol）

とある。玆に音譯に就いて注意す可きことは支那人が外國語を音譯するに當つて屢々歷史的のうつしかたをそのまま襲用すると云ふことである。假令其の當時の音とは著しく音が違つて居ても構ひなく、舊來の式に倣ふことがある。其れ故或る時代の記錄に見えて居る音譯から直ちにその時代の字音をそれと斷定する時は往々誤謬に陷ることがある。玆に列擧した兀の字音にしても之が正しく總べて其の當時の音を表はして居るものとすれば元時代の前後及びそれ以前古く兀はGの音で呼ばれて居た

ことが察せられる。而して明清の交丁度十六七世紀の頃から此の音が北方支那で消えかゝつてWの音と變遷したのではあるまいか。上述の中山傳言錄に見えて居る音譯の如きはそれ故音GとW音の交替過渡の時代の俤を示して居るものかと思はれる。

Mongol は古くは蒙兀又は蒙瓦と書かれて後世蒙古と書きかへられて居る。若しこれが單に音韻上のみの理由に依つたものであるならば兀も瓦も共に後にはGを失ひてWの語頭音を取るに至つた故比較的蒙古語の go の原音に近い古 (ko) を以つて之に充てたものでもあるかと推測せられる。契丹圖志に蒙古里 (Mongol) 大金國志に蒙骨 (Mongol) などと見えて居るのも玆に攷へ合す可きものであらう。兎も角清朝以後兀は wu の音となり今にその音で傳はつて居るが、古くは gu 又は gut の音で現れて居た。

小川尙義氏著日臺大辭典に依ると臺灣で兀の泉州漳州音は gut である。尙安南では ngout 客家では ngut 此れ等は孰れも、日本音の got に近い。獨り朝鮮では g音を失ひ且つ入聲 t をLに變じて居る爲め兀の音は ul 卽ち eul となつて居る。さながら Mongol の ol の音の音譯にふさはしい音形式に變じて居る。

古音 g は今日その總べてが w の音のみに變じたのではないが先づ玆にその類のものに就いて尙他に例を採つて見れば、

古音	今音	古音	今音	古音	今音
兀 gut	wu	外 guai	wai	岳 gak	yüe
吳 gu	wu	丸 guan	wan	虐 giak	ui
瓦 gua	wa	頑 guan	wan	業 gep	ye
午 go	wu	僞 guei	wei	逆 giak	uie
梧 go	wu	魏 guei	wei	宜 gi	i

がある。此の外古音 g は y ともなり u ともなり時としては全く母音のみとして語頭音に現れることさへある。その例次ぎの如きものである。

附記　此れ等の古音 g は ng の音であつたかとも疑はれる餘地がある。音韻の生理學上の理由、韻鏡の研究及び現今の方言比較の結果から總合すると此の疑問は當然起らざるを得ない。併しこゝには之に就いて詳述する暇がないから割愛して置く。

要するに兀の古音は gut 又は ngut であつてそれが音譯ものの上に古くは gu, gul の音として現れ、十七八世紀の頃から wu の音として用ひられて居るのみならず今日の北平音では全く wu として殘つて居るばかりで古音の gut は既に一般から忘れられるに至つたのである。

次ぎには上と云ふ字の古音に就いて少しく觀察して見よう。卽ち玆には

ロ　假定說……上の字の古音が tang

であることに就いて音韻學上から又文字の意義の方面から更に又方言比較の上から推論して見たいと思ふ。

上の字の今の支那音は上海 Shang hai の上 Shang に於いても見られる通りsh卽ちsの語頭音を取り朝鮮では全韻玉篇に依ると上の音상卽ち syang である。支那語の一般音韻轉換の通則としてs又はsの音がその今一つ以前の音狀態なるTの音に泝り得ると云ふことは sak（釋）から tak（澤）sen（占）から ten（點）sai（崔）から tai（堆）にとそれぞれ其の古音に泝り得る一事に依つて見ても察せられる。（本章字音轉換の部參照）。のみならず音韻學上發音機關の狀態から攷へて見てもT音がS音に變ずることは極めて有り得可きことで日本語に tane（種子）が sane となつて居るなども此の類例である。依つて先づ音韻上の點から見ても上 šang は古音 tang に泝り得と云はれる。

說文に依ると上（卽ち丄）は高也此古文 丄 とあり玉篇に上は登也君也高也尊也下之對とある。

尙上の字を音符として居る 丄 の字音が同朗切で tang の音で表はれて居るのも蓋し上の字の古音が此の文字に現れて居るものかと思はれる。

又上の字と字こそ違へその意義に於いて尙高、尊、登、君などの觀念を表はして居る文字を見るに多くは何れも tong 又は toung の古音を有して居る。自分のこれ迄の研究によると今日の各地方では隣國なる安南の字音が最も古音に近いから玆には暫く之に依つて古音（固より假定的の）を揭げて置く。而してその上の字に關聯する意義の言葉は次ぎの如きものである。

宗	toung	尙	t'ong
尊	toun	昇	t'ang
乘	t'ang	盛	taing
長	trong	龍	lang
頂	tang	勝	t'ang

尙支那でも客家（Hak-ka）の方言では頂の音 tang で古音に近い。今日普通に殘つて居る他の言葉のうちにも之と類似觀念を表はす語として、

登　tong　　尙　tan

などがある。尙の字の普通の音は šang であるが堂の字にその古音 tang が殘り又棠（掌）の字にも

嘗つて tang の音の存して居たことがあつた。それは撐又は㩦の字に窺はれる。卽ち

前漢書（紀元前一世紀）に

撐 tang……撐犂 täng'uri

後漢書（第五世紀）匈奴傳に

㩦 tang……㩦黎 täng'uri

撞 tang……撞黎 täng'uri

玆に現れて居る撐の音はその安南音の tông に甚だよく似て居る。又蒙古語の支那譯として知られて居る當干又は單干なども矢張り täng'uri の音譯で同じ原意を表はして居るものであるならばその當、單は共に撐と同じく tang の音をうつしたものと見られる。而して此の撐は素と尙の部分に依つて tang の音が出て居るのであるから結局尙の本音が tang であつたと云はれる。然るに尙は又尊とも素と同意語で音の上も尊の音 tsun と甚だ相近い。なほ尊、尙の意義に聯關して盛、昇、乘、頂、長、勝がその同類語であることは勿論その古音も殆んど相似て居る。而して此れ等の凡ては登の音 tong に關係があり。而かもその義に於いても甚だ接近して居る。上の字に登、昇、乘、勝の義があり。又、長、頂、尙、盛の意も含まれて居る。これ等の事實は凡べて上の字の音が登 tong 尙 tang と同樣の音か又は頗る之に酷似して居る音を有して居たかと云ふ反證になるのである。

高上の義又は登ることを tang, tong と云ふのは單に支那語だけではない。西藏に於いても高きことを teng と云ふ。これは支那の天に關係があるやうに思はれるが併し西藏で天のことは nam と云ふ。然るに支那語西藏語などと言語系統を別にする土耳其 (Turk) 語では天を tangara, tangri と云ひ蒙古語では täng'uri と云ふ。支那語でも厦門方言に天を tian と云ふのは高上の義の tang が今の tien, teng（福州音）になる中間の音韻狀態と見られないこともない。要するに支那西藏地方では高上の義を tang と云ふ音で表はすのである。玆かしこれがたしかに土耳其及蒙古の方面のウラル、アルタイック (Ural Altaic) 語族に關係があると斷定するには尙多少の研究を要する。兎も角玆には上と云ふ字の古音が以上、音韻、意義、方言比較の上から tang の音であつたであらうと云ふ假定說を出して置く迄である。その tang の音が然らばいつの時代に sang となつたか其の中間の音韻狀態に čang と云ふ音は實在して居なかつたかどうかそこらは未だ玆に何とも申上げることは出來ない。

次ぎには一卽ち壹の古韻に就いて述べて見よう。卽ち玆には

ㄅ　一（壹）……古音 kit 更に古くは kat

と云ふことを假定して見たいと思ふ。六書分類に壹は伊悉切專壹也今借作數目字とある。

一卽ち壹の北平音は i であるが南方の客家方言では yit である。朝鮮では L の入聲 ㄹ il で現れて居るけれどもこれは yit, it の音と同一視して攷へることが出來る。然るに厦門の俗音臺灣の字音では

別音で chit 卽ち čit の音を取つて居る。支那語の音韻現象中に現はれる ch 卽ち č の音殊に i の母音の前に立つ č は多くの場合に於いて ki と發音する時の k の音から變じて來て居ることが多い。幾 ki が či となり强 kiang が čiang となるが如き皆この例である。それ故厦門に存する čit の音は之を kit の古音に泝り得と假定することが出來る。

然るに支那語の音韻では又 kit の音が yit になり得ることは他の例で

橘（喬）　kit ……→鵸（喬）　yit

崎（奇）　kuei, ki →椅（奇）　yi, i

を見ても攷へられる。それ故數詞壹の假定古音 kit が yit, it の音となることは珍とするに足りない。果して此れ等の音韻關係にして誤りがないとするならば然らば壹の古音として實際 kit の音があつたかどうか此れが根本の問題となるのである。

今文字の上から攷ふるに壹の字は元來諧聲と會意とを兼ねた文字で說文にも爰に揭げたやうなもので現れて居る。凶の字を含める壹の字のことは玆に云はない。

小篆

說文の本文に壹の構造を說いて从壺吉吉亦聲とある其の段玉裁の註に於悉切俗作壹とある。段玉裁が於悉切とあるは it の音の積りであらうがこれは固より眞の古音ではない。說文の本文に見えて居る許愼の說によると壹の音は素と吉 kit と同音でなければならぬ。是れ玆に壹の古音が kit であらうと思はれる所以である。

更に尙吉の字そのものの音が必ず kit の一音ばかりであつたかと云ふに決してそうは云へない。中間の母音 i は事實色々に變轉して居るのである。偶そのうちの i が單獨な吉の字に殘つて kit の音を存して居るに過ぎない。卽ち外には尙、

吉……kat　黠
吉……ket　結　三者共に吉の聲に依る。尙音譯にも Ghazni を吉慈尼。
吉……kit　桔　Gersik を吉力石。

とあるが如く吉を以つてガ、ゲの音をうつすに用ひられて居る。

かゝる事實を綜合して見ると『壹』の場合に於いてもその音が吉の聲に依つて出て居ると許愼は說明して居ても、それを以つて直ちに kit の古音として斷定することは出來ない。許愼の居た後漢時代には吉の音の三音內孰れで以つて呼ばれて居たか十分に判らない。然るに今日廣東地方では數の一つのことを yat 又は yet と云ふ。この母音の a 又は e は或は黠 kat 結 ket などに於ける吉の音 kat, ket と多少の歷史的關係がありはしないか。

以上は壹の古音を支那內部の方面から觀察したのであるが、次ぎには之を支那の周圍に居る部族の言葉から比較して見ると。

ヒマラヤのネパール (Nepal) に居るマガール (Magar) 族は一つのことを kat と云ひ、
同じくスンワール (Sunwar) 族では ká.
同じくヴァーユ (Váyu) 族では ko-lu
西藏方面のギャルング (Gyarung) 族では ka-ti.
レプチャ (Lepcha) 族では kat
ベンガル (Bengal) の境に居るナガ (Naga) 族では ka-tan, 又は kha-to などの如く同語族では多く kat, ka の音で現れて居る。若し此の數詞にして此れ等同語族のそれと言語關係があるものであるならば、支那語の壹つと云ふ語は或は kat の古音であつたかも知れないと推測せられる。然らばその語源は如何か支那語の方では割 kat 又は決 ket などに多少の關係でもあるものらしく臆測せられるが、併し此れに就いては未だ何等の有力な材料を見出さないからこれ以上述べる事は出來ない。

要するに古記錄と方言、又は同族語などからの材料によつて攷ふるに支那の古代では數詞の一なる語を kat 若しくは ket, kit の音で呼び後漢時代卽ち西曆一二世紀頃は尙その音であつたらしく思はれる。それが čet とか čit とかの音韻狀態を過ぎて遂に後世の如き yit, it の音となつた。然るにそれが北平官話では更にくづれて入聲音 t が消滅し唯の i の音となつてしまつた。古音の kat, kit から今日の i と變遷した迄の徑路は如何ばかり支那語の沿革の複雜なるを察せしめる一つの材料となる。

尙安南方面には一を又、mot, nhat, nung などと云へる數詞の系統が別にあるが、そのことは玆に省く。次には川の字の古音に就いて觀察して見よう。卽ち

二　假定說……川の字の古音 kung 又は kun

と云ふ攷に就いて今の音との相違を述べて見よう。

今日の北平音で川は čüan の音を取つて居る。その日本音は sen であるが、朝鮮音は전卽ち čyon である（全韻玉篇參照）此の場合には北平音と朝鮮音とは大差がない。尙南方支那の方言音を見ても是亦北平音と大差はないようである。結局現在に殘つて居る方言音から此古音を窺ふ事は困難である。

歷史的方面から川の古音を察するに支那の上代では川のことを čüan 又は sen などと云つて居たのではない。古記錄や金石文字の示すところと支那の周圍の同語族の言葉との比較に依つて攷へると上述の通り川の古音は素と kung, kun などであつたかと推定せられるのである。以下にその理由を少しく述べよう。

六書分類に見えて居る川の字の古體には小篆、古老于、古文などを揭げてあるが

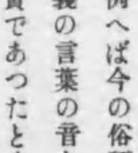
(一)

(二)

(三)

若し此れ等の材料にして信頼す可きものであるならば此のうちの(二)及(三)は諧聲文字で公の字の音符と水の流れの象形とから組み立てられて居るものと思はれる。說文流の說き方を借りればこれ等は从水公聲と說明すべきものである。水は河水の義を示し公はその言葉の音を示して居るものと見られる。然るに公の古音は kung であるから結局この音が川の字の古體の音であつたかと推測せられる。

更に川の字の本字として普通に知られたるものに(四)に擧げたやうなものもある併し實は此の(四)と(一)

(四) 

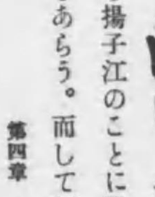
とは同種の形の文字である。韻書の反切に巛は枯昆切古坤字とある（康熙字典撮要參照）。之に依つて見ると川の字の本音が kun, kon の古音を有して居たことがわかる。尙之を一層確かめんが爲め川の字を音符として居る諧聲文字の二三を玆に揭げて見よう（康熙字典撮要參照）。

(一)（普通の訓の字）說文 希郡切　(二) 羊羹 希郡切　(三) 島名 希郡切

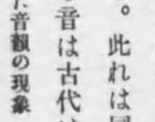
此れ等の三文字にして若し玆に附記せる反切の示す通り孰れも kun の音を採つて居るのであるならば川卽ち巛は素と kun の音であつたと云はれる。

巛を音の方面から觀ると以上の如くであるが更に此の文字の成り立ち及その意味の方面から觀察して見るに、

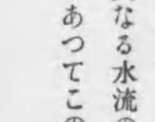
說文の說くところに依れば。

(一) 

水小流也

(二) 

水流澮澮也方百里爲巛

(三) 

貫穿通流水也虞書曰（中略）く巛之水會爲川也

とある。卽ち(三)に見える巛は水流の次第に衆く會し集りたるを象どつたもので玉篇の川の字の註にも通流水潑闊衆流注海とある。此の衆く集ると云ふ觀念が然らば何故に kun, kung の音に結び付いて川と云ふ言葉をなすか。これ此の語の音韻の由つて起る根本問題である。察するに何處の言葉に於いても澤山（衆多）と云ふ義は大抵大いなると云ふ意味の言葉に聯關して居ることが多い。日本語にでも例へば今の俗語に仰山と云ふ言葉があり、古代の支那語で kun, kung の音は多く『大なる』と云ふ義の言葉の音となつて居る。このことは既に屢述べて置いた通りである。若しこの言語上の推測が事實であつたとすれば川が古代に kun, kung の音を取つたことも珍とするに足りない。

然るに川と類を同うする語に江なる言語がある。古人は川之大者皆曰江と云つて居る。假令語の種類の上には差はあらうとも語源の上から云へば川も江も別の起源から出て居るものではあるまいと思はれる。唯南方地方で江とさへ云へば直ちに長江卽ち揚子江のことに限られて居る。此れは同地方一帶で最も大なる水流の義から江と呼ばれて居たのでもあらう。而して江なる言葉の音は古代は kung, kung であつてこのことは說文に江は从水工聲と

江の小篆

ある一事によりても察せられる。

江の字は云ふ迄もなく諧聲文字で言語上の音 knmg を表はす爲めに工の音符を旁として加へられたのである。從來多くの學者は銅が同同と響く故に同の字を加へて銅の字を作つたやうに江は工工と響がする故に工を加へたなどと云つて江の字を說いて居るものがある。がこれは言語學上肯首しがたい。固より時としてはかやうな擬聲語 (onomatopoea) の文字もないではないが此の場合には長江の大なる有樣から命名した言葉の音を表はして居るものと思はれる。

江の音は北平音で čiang 朝鮮音で kang であるが、廣東客家で kong 福州で koung 寧波で kong の音として殘つて居る。卽ち南支の音は江の字の音符工 kung に頗る相近い而して kung は最初大の義であつたので鴻とか洪とかその他孔などに kung の音のあるのも同じわけである。

以上述べ來たつたところのうち川江の原義が果して事實大の義であつたかどうかの根本問題は暫く措き、少くとも古代に於ける川の字の音が kun, kung であつたかと云ふ推測丈けは立てられる。尙此の考を今一層補ふ爲めに同じ單綴語族內に屬する外部の種族の言語から (W. W. Hunter: The Non Aryan Languages of India and High-Asia) その支那語の kung (江川) と關係を有すると思はれるものを取り出せば次の如きものがある。

Nepal の Gurung……khuong

Nepal の Serpa 語……hyung

Kiranti 語……hongku

Waling 語……hong'ma

Balali 語……heng'ma

khaling 語……kawa

これ等の khuong, hyung, hong などの音は何れも支那語の kung と音韻學上頗る近いものとして取扱はれる。

ラクーペリ (T. de Lacouperie) 氏の說では支那の南部では『かは』のことを江と云ひ北部では河と云ふのであると云つて居る (Les langue de la Chine avant les Chinois)。けれども江なる文字の表はす言葉の方から觀るときは必ずしも江 kang が獨り南方のみの語と速斷することは出來ないのである。況して南方諸地方に於いて尙河 ka, ha. に緣の近い語を有して居るものが少なくないのであるから。例へば

Ahom 語……khe

Angami Naga 語……kha

Nepal 語……kyu

Burma 語……kava

Kiranti 語……kawa

要するに亞細亞東南部一帶の單綴語に於いて『かは』のことは ka とも呼ばれ又 kung の音で呼ばれて居るところもあると云ふに歸する。而して古代の支那に於いてそれが江と川の字で表はされその江 kung の方の音は kang となり更に今では ciang となつた。さかし川の方の音は kun から čun 更に čüan となり日本では甚しくも šen となつて居る。まだも順巡などに於ける川の音 šun は比較的古音の kun に近い音と思はれるが、其の巛卽ち川が單獨の文字で kun と發音せられて居た時代は餘程古いことであらう。少くとも訓の古字眷などの作られた當時は尙古音 kun で存して居たかと思はれる。

をはりに越の字の古音に就いて單簡に述べて見よう。

ホ　假定說……越の古音 kuot.

此の文字の北平音は yüe の音であるが古代に泝つて先づ此の文字を解剖し其の音符のある部分を調べて見るに、說文によると、

(一) 越の字の小篆　(二) 越の字の音符　(三) 戉の字の音符

越は度也从走戉聲とあつてその戉は斧也从戈ㄴ聲である。然るに素とㄴとは卽ち の形である。これは を反對に向けかへたもので共に鉤逆に象どつたものである。其の音は衞月切又居月切とあるから、それ故若し越の字の出來た當時尙 が古音を有して居たとすれば kuat の音であつたかと攷へられる。今も尙音樂上の術語として壹越 it-kot 盤涉 ban-jik など云ふ專門語がある。此の越 kot と云ふ音は越の古音を比較的よく保つて居るものと思はれる。尙

禮記禮運に　越席疏布 註 越席翦蒲也

左傳桓二年に　大路越席 註 越席結草也　此の場合の越の音は

韻會に　越は戶栝切音活 kuat

廣韻に　越は或は作趏、趏の音は古滑切音刮 kat, kot で卽ち壹越に於ける越の音が kot とあるのも偶然でないことがわかる。而して越の字の音は戉の部分から出て居るのであるが尙岣狨魈などの音に希月切又は希屈切の現れて居る如きもその戉の音が素と kuat, kuet の音であつたかと云ふ傍證となるのである。越の字がなぜ kuat, kuet の音を取つたのであるか。其の意義の要素たる走の字より察するに許愼は走を屈 kut 也と說いて居るが如何であらう。寧ろそれは蹶 kuet（朝鮮音 kuel）なる語に關係はないか。果して然らば足の活きに關係のある義を有する越の字に kuet の古音の存することは言語上許容せられる。更に越の字音の根本要素たるㄴ卽曲鉤の が支那語と

同語族の言語のうちで如何に呼ばれて居るかを見るに、W. W. Hunter 氏の調査に依ると曲鉤 croo-ked の義を、

Burma 語……kok
Šan 語……kot
Siam 語……kot
Khamti 語……kot
Ahom 語……ngok
Tibet 語……kak-po

と云つて居る。これ等の語は支那の古語越の kuat, kuet（居月切）の音と完全には符合しないけれども之に依つていくらか越の古音の俤を察する手懸りとはなるのである。說文の徐鉉の註に越と戉が王伐の切で出て居ることを參照して考へて見ても越の古音が kuat でなかつたかと推察せられる。

要するに越の古音がその文字の解剖の上とその音符の本來の音及び同語族の言葉の比較上 kuat, kuot などの古音を有して居たらしく思はれる。因みに考ふるに斧鉞の鉞なども素と kuat の如き音ではなかつたか。果して然らば決の音 ket 切の古音 ket 割の音 kat などに對して鉞の字音の如きものも左迄音韻學上遠い言葉ではなかつたであらうと思はれる。

以上字音の歷史的沿革を說く爲めに採つた五六の例の古音及び今音は結局次ぎの如くに列擧せられる。

兀の音 ┌古音……gut, got, ngot
　　└今音……wu
上の音 ┌古音……tang
　　└今音……šang
壹の音 ┌古音……kat, ket, kit
　　└今音……i
川の音 ┌古音……kun, kung
　　└今音……čuan
越の音 ┌古音……kuat, kuot
　　└今音……yüe

若しこの攷へにして誤つて居ないとするならば今日の北平官話に存する wu の音の或るものから古音の gu, ngu, ngo 派ることが出來、同じく yü の音から ku に čü の音から ku に i の音から ki,

ke, ka などに又 ša の音から ta に還元して攷へられるものがあると云ふことが出來る。固より此れは支那語の凡ての場合に適用が出來るとは云へない。のみならず此の逆の場合が又凡べて認められると云ふわけでもない。言語の現象は音韻の原則のみに依て玄かく規律正しく行はれてゆくものではないけれども併し支那語を大體の上から觀て云ふ時は古代の喉音 (velare) 殊に鼻的 (nasalierte) の子音 gu, ngu は近代、唇音の wu にうつり又喉音（韻鏡で云ふ牙音）ku は硬口蓋音（韻鏡の舌上音）ču 又は軟口蓋音の yü にかはり或は時として全くの母音に軟化してしまひ、その他古代の舌端齒音 (lingo-dentale) ta は齒音又は硬口蓋音の šo, ša となる傾向のあると云ふことだけは認められるのである。歴史的に現れて居る此の音韻變遷は近くは只今の北平音の中のみに於いても殆んど同様に窺ふことが出來る。即ち

穢の音	(一) kuai, hui	瓜の音	(一) ku
	(二) wai		(二) wa
螢の音	(一) kung, jung	驗の音	(一) ken, hsien
	(二) yung		(二) yen
賈の音	(一) ku	虹の音	(一) kang
	(二) čia		(二) čiang
單の音	(一) tan	隋の音	(一) tu
	(二) šan		(二) šui

支那語の音韻變化の種類は勿論まだ外に種々の場合があるのであるが、假りに上述のものだけに依つて見ても古今の間に爭ふ可からざる變遷を經て來て居ることがわかる。而してその變遷のありさまは大體に於いて一般音聲學 (Phonetics) の上から認められて居る通則の範圍内で行はれて居るやうに思はれる。

三　字音の地理上に於ける分布

支那文字に現れた古音の研究は各時代に書かれた古記錄殊に外國語の音譯の類とか、又は文字相互の間に窺はれる音韻關係の上から觀察を進めて行くのが普通の方法でこれ迄主として述べ來たつた古音の研究も大體かくの如き方面から觀たのである。若し此れ等二方面からの觀察が十分に信賴するに足るだけの古音を現出せしめる者であるならば、それで澤山であるが事實は反つてそれ丈けでは屢少なからぬ不足を感ぜしめる場合が起つて來る。これは嘗て古代に言語として生命を有して居たその音韻が言語そのものとしては何等の生命のない文字の上にうつされて居るからである。のみならずその字の形だけは後世にそのまゝ傳へられても音は各時代に連れて非常な變遷をなして來て居るのがその

主な原因である。それ故字形を以つて直ちに古音そのものの遺物であるかの如くに攷へることは無論あたらない譯である。

古記錄に見えて居る文字が十分に古代の音を告げて居るものでないとすると、他に之を補ふだけの材料を要する。之は形を備へて居る文字に依ると云ふよりも寧ろ言葉の音そのものの觀察に依ることを必要とするので、これには勢ひ卑近なる現在の音を調査しなければならぬ。古代の音韻現象の微細な點は到底文字上殊に支那の文字の上では之を明かにすることがむづかしい。けれども之を或る一定の標準のもとに推察假定せしめ得る方法がある。それは卽ち今日の支那語のうちに窺はれる音韻現象である。今日の支那語に行はれて居る音韻現象の特色は古代に於いても亦似たもので先づ大體の相違はなくして現れて居たものであらうと假定することが出來るならば、現在の音で以つて古代の不明の點を泝つて推す。此れが古記錄竝びに文字の上で不足な箇所を埋め合はす所以である。

現在の支那語の音と云つても素とより一概には云へない。昔の關中の音が今どこらあたりにその俤を殘して居るか。又どの地方の音が昔の洛陽の音に近いか。今日の北支の音は支那語の音韻史上から觀察して如何なる位置を有して居るか。此れ等の問題は中々複雜を極めて居つて容易には闡明しにくい。けれども此れ等の歷史的の方面との關係は今暫く別問題として置いて玆には單に現在の支那音のみの現象を觀るのである。これ玆に特に地理上の音韻に就いて更に一觀察をめぐらし以つて古音研究の一資料とする所以である。

地理上から觀た支那語の音韻分布は大別して次ぎの二つとなる。卽ち標準語たる北平官話の音韻とその他各方言に現れた地方語の音韻との二つである。そのうちでも古音を推定する上に便利な材料となつて居るのは寧ろ地方の方言に殘つて居る音韻現象である。丁度北方支那の今の音を起點として過去の歷史的の時代に泝ることはさながら北平地方から漸次南方方面殊に海岸に近い地方を南下して行くのとよく似て居る。それ故玆には主として支那の沿岸諸地方の音を窺ふことを以つて第一の眼目として置く。併し時としては更に又外國に現はれて居る音で特に支那音を論ずる上に必要なるものは之を攷への中に入れて比較することのあることは云ふまでもない。

本節で述べるところはかやうに地理上から音韻の分布を觀るのが主眼であつて言葉の音そのものに就いて云ふのである。必ずしも文字上に拘泥する譯ではない。併し支那音を全部羅馬字の如き表音的の文字に引き直して了つては意味がよく表はせないから矢張り在來の支那文字を標準に取りその字音の異同に就いて攷究することとする。

イ　鹽の字の方言音比較

鹽の字音は普通にエン (yen) として知られ北平音でも下平の調に屬する yen の音を取つて居る。けれどもその古音がnの語尾音でなくmの語尾音であつたことは韻鏡第三十九轉四十轉の三等四等の

部に屬し咸の韻(rhime)に配してあることに依つても知られる。支那の方言音、朝鮮、安南などの字音も此の點に於いては孰れも皆同樣の現象を見る。卽ち

鹽の字音
- 廣州音　ym
- 客人語　yam
- 厦門音　iam
- 朝鮮音　yöm　　全韻玉篇に鹽の音　엄
- 安南音　jiem

である。更にmの前に立つ母音に就いて攷ふるに a, ia, ö, ie などの色々があるが、これは語頭に立つ子音 Consonant の影響に主に支配せられて居るのでieの音よりもiaの方が古形に近く更にiaよりもaが古い形を現出して居るのであらうと思はれる。öはi又はieの支那音に對する朝鮮特有の訛音であるが音の性質から云ふと開口音のoの種類の音であるから寧ろaの古音に近いものと思はれる。

鹽の古い音 am がその語頭音として Consonant を有して居たかどうか。此れは日本の音などからは到底推定することは出來ないけれども、其の朝鮮音 yöm 客人音 yam 抔にある語頭音のyは半母音で且つ半子音であるだけに幾分其の手懸りとなるのである。旣に述べて置いた通り支那の字音に窺はれるyの音は子音 Consonant の系統に屬す可き者で、或る子音が漸次うつりうつつて全く母音化してしまふ。その過渡の狀態にyがあるのである。尙安南音で鹽が jiem で現れて居る其のjの音の如きも決して偶然の現象ではない。寧ろ子音としてyよりも一層たしかな狀態にあるものである。然らば其のyと云ひjと云ふ。此れ等は素と如何なる音の轉訛して出來たものであるかと云ふに此の場合には卽ちkの音から出たものであると思はれる。

厦門の普通の方言音では鹽が iam と發音せられて居るにも拘らず、其の對岸臺灣の地名のうちには此れがたまに古音の形で殘つて居る。卽ち

鹽水港を Kiam tsui kang（日臺大辭典參照）

と發音して居るやうな例も在る位で、鹽の音が kiam で殘つて居る。これは確かに安南音の鹽 jiem よりも更に元始的の音に近い姿を留めて居るものと見られるのである。凡て支那語の音韻で若し同一語に對して y, j, s, ś, k などの音韻關係の存して居る場合にはkが一番古くて其の次ぎにs又はjなどを經てyに至ると云ふ順序が支那音韻史上普通一般のきまりである。これは音韻學上發聲の理論から觀ても玄かある可きものである。依つて鹽の方言音で最も古いものは臺灣の kiam の音であると假定することが十分出來るのである。

然るに支那以外で玄かも文字上の音でなく言葉の方で鹽又は鹽辛いと云ふことの音を南方諸族の間で khôm 又は khum と云ふ（本章前節文字相互間に現れた言語上の關係の部參照）。これは鹽の臺灣

音 kiam と言語上關係のあるものであつて自分の攷では若し之を鹽の字音として見るならばこの方が更に元始的の俤を存しては居ないかと思はれる。何となれば鹽の字は素と鹵の義要素と鹽kam, khom と云ふ音要素から出來たので、鹽は卽ち鹽の古音と一致し鹹などとも同類語に屬す可き筈のものであるから。朝鮮の奎章全韻と云ふ韻書に鹽が**켬**、**검** (khiöm, kom) として現されて居るのも故ありと云ふ可しである。今音韻發達の順序によりて鹽の方言音を古形のものから排列して見ると次ぎの如くに攷へられる。卽ち

鹽の字音發達

1. khóm ……シアム (Siam) 又はラオス (Laos) 語
2. kiam ……臺灣の地名
3. jiem ……安南の字音
4. yam, yöm ……客人語、朝鮮音
5. yem ……日本の古音
6. yem ……北平音
7. en ……日本字音(現代音)

此の表は一目して鹽と言ふ言葉又は其字音が暹羅、安南、支那、朝鮮を經て日本に來る迄に如何なる變遷の段階を通過したかを明瞭ならしめて居るものである。

因みに鹽の字の俗字塩の由來に就いて一言して置かう。元來此の俗字は監の字と鹵の字とから構成せられて居るものであるにも拘らず此れが土偏に書かれて居ると云ふは第一鹽の字の音が監と云ふ音符 Phonetical symbol に依つて出て居ることの忘れられたこと。第二、鹽なるものが臣といふ文字を偏として書く謂はれはなく、寧ろ土砂の類であるからと見てしまつて土偏の文字に類推して考へたこと。第三、鹵の字を簡單に略して口としたこと。此の三つの原因から鹽は結局その俗字の形となつたのである。此れは支那文字發達の一現象として面白い例で此の類の發達文字は尙日本にも支那にも少なからずある、强ちに此れ等は誤字として斥けずに寧ろ文字研究の一材料として取扱ふ可きものである。尙かやうな類推文字の發達に就いては第一編第五章に論じてあるから今玆に再びしない。

ロ　吉の字の方言音比較

吉の字の普通に知られて居る音は無論 kit (日本では訛つて kitsu 又は kichi) と云ふ入聲音であつて詩韻の方でも質の韻 (rhime) に容れてある。併し現代の支那北平音ではこれが入聲音でないことは素とより語頭に立つ Anlaut も軟化して k——→č となつて居る。つまり西洋の音聲學で云ふ Palatalizeren をなして卽ち吉の音は下平の či となつて居るのである。

吉の北平音 či に對して支那の方言又は隣國では之が如何に發音せられて居るかと云ふに

廣州音……kêt

吉の字音
- 客人音……kit
- 厦門音……kit, kiat
- 上海音……kih
- 朝鮮音……卽卽ち kil
- 安南音……kiet

卽ち浙江地方以南ではk音が語頭音として殘つて居る。のみならず之に續く母音がiでなくieとなりieとなり更に又iaともなつて居る。同一の入聲音の文字がかやうに地方に依つて相違を有して居るのである。併し音韻發達の歴史の上から觀るとそれぞれその間に聯絡のあることがわかる。卽ち最も著しい發達を遂げた北平音čiに對し南方の音は孰れも古い俤を有するには違ひないがその中でも厦門あたりの音 kiat が最も古形に近いものらしく思はれる。

厦門方言中でも其漳州音では吉の音 kit で敢て客人方言の音などと大差はないが併し臺灣に於ける支那人の姓には普通上入の調で吉を Kiet と發音して居ることがあり、尙同地の稱呼に就いて吉の字音を探ぐつて見ると、次ぎの如き異音がある。卽ち

吉貝……Ka-Poe

東吉……Tang-kiet

これは小川尙義氏著日臺大辭典臺灣地名の部に據つたのであるがこゝに見える吉の音が日本內地の音とは遠ひ ka 又は kiet であることは注目す可きものである。

支那語の音韻史を案ずるに最初存在して居たaの音がeと變じ更に移つてiとなることは珍らしくない現象で、殊にk音のあとにはこれが多い。左にその二三の例を擧げる。

一、合 kap の音
- 1. kap……閤又は給の古音
- 2. kep……給
- 3. kip……給
- 4. či……給(北平音)

二、氣 kai の音
- 1. k'ai……愾又は氣の古音
- 2. k'ei……氣
- 3. k'i……氣
- 4. či……氣(北平音)

三、昔 tsak の音
- 1. tsak……鵲又は昔の古音
- 2. tsek……昔
- 3. tsi……昔

4・hsi ……昔(北平音)

四、擇 tak の音
- 1・tak, yak……澤、譯
- 2・yek ……驛
- 3・yik ……譯
- 4・yi……譯(北平音)

かやうな類例から推して考へると吉の字にも此の四段の音韻發達時期を大體に於いて認めることが出來る。卽ち

吉の字音發達
- 1・吉 kat ……黠
- 2・吉 ket ……結
- 3・吉 kit ……詰
- 4・吉 či……吉(北平音)

此の黠結詰に於ける吉の三段の音は畢竟するに今の北平音 či の古音であつたと云ふことが可能である。若し此の考が誤つて居ないとすると、安南、臺灣などに於ける吉の音 kiet 廣州音の ket その他臺灣の地名に見える ka (kat) の音の如きは卽ち吉の北平音又は日本音よりも迥かに素との古い音の俤であることがわかる。就中臺灣に殘つて居る ka (kat) の音が最も元始的の形に近いやうに考へられる。

附記　吉の音 ka は入聲の kat の音のゆるみて出來た音である。この種の現象は他にも屢々見ることである。

ハ　人の字の方言音比較

人の字の音殊にその古代の元との音は如何なるものであつたか。これは支那古音研究のうちでも頗る難澁なる問題である。今日でも人の北平音は外國人に取りて有名な難音で日本の假名では勿論英獨佛の聯合發音記號を以つてしても到底表はし得ない音である。その語頭に立つ Anlaut の發音の如きは然、熱、日、如などと同類で全く支那獨特の Consonant である。露西亞語の Ш (こは獨逸の Sch の音とも違ふ) が Slav 特有の音となつて居て、とても外國の表音法で書き表はされ得ないやうに支那の人の字の音も今日尙未だ一定した表はしかたが出來て居ない。佛蘭西語の j に似て而かも一層ゆるく且つ舌の尖が上後方に曲がつて發音せられて居る。なほ日本のザ行音などとも違ふ音である。去かし音の出る位置は丁度 L の音の出るところと餘程近い。音韻學上の微細な觀察は暫く爰に省略に從ひ、要は唯以上の大體を豫め含んで置いて左に人の字の音韻分布に就いて觀察を進めて見よう（尙本編第八章坪井博士の文書參照)。

先づ日本に於ける人の音にはジンとニンとの二樣がある。非科學的の呼びかたであるが兎に角從來

ジンは漢音でニンは吳音であるとして居る。次ぎに北平官話に於けるその字音を强ひて羅馬字で以つてうつすとすれば jên の音で表はされる。Sir Thomas Wade の式に據つて暫くかやうにして置く。此の北平音 jên は比較的日本のジンの方の音に近い。然るに尙之と同類の音は南の方浙江省及び厦門方面にもある。卽ち

人の字の方言音
- 北平音……jên　（俗音）
- 寧波音……jing
- 溫州音……zang（別に nang の音あり）
- 厦門音……jin　（讀書音）

而して日本の所謂吳音ニンに近い方の音は尙南方地方に多く見出される。卽ち

人の字の方言音
- 上海音……niang
- 寧波音……nging
- 溫州音……nang, ngiang
- 南安音……nyon, ñyên

之に依つて見ると人の字の二樣の音形式は支那の諸地方で少なからず相交錯して分布して居ることがわかる。のみならず其の語尾音の點に於いても假令それが韻鏡とか詩韻 Rhime の上などでは眞の字の韻卽ち -n で終るものときめられて居るけれども、事實は寧ろ八庚の韻に屬しても宜しい程に諸地方で -ng の語尾音 Auslaut として見えて居る。卽ち上海、溫州あたりで niang, nang の音であり、寧波で jing 溫州では又 zang の別音を併有して居る。依て攷ふるに人の字の音は必ずしも北平音のそれの如く -n の語尾音のみではなかつたことが察せられる。現に今日日本で之を讀む時も普通は jing 又は ning（ning-gyō 人形）と發音して居る位である。

かやうに觀察して來ると語頭音（Anlaut）及び語尾音（Auslaut）に就いて四通りの音形式が攷へられる。中間の母音には i, e, ia, a など種々あるが、假りに此の場合で最も根本の音と思はれる a を取つて左に四種の音形式を擧げて見よう。

I　j の語頭音に就いて
- 1. jan
- 2. jang

II　n の語頭音に就いて
- 1. nan
- 2. nang

併し大多數の方言の上から更に之を根本的の形に引き戻して古形を假定して見ると、

人の字の音韻形式
- I　jang
- II　nang

となる。或る方言にある nyang, ngiang などは nang の方の訛音と見る。さて此のI及びIIのうちで更に其孰れの方が古い音であるか。又其の間に原因結果の關係でも存しては居ないか。或は又第三者の位置に全く別音として存するものがあつて、それから此の兩者が共に生れ出たものではないかなどの種々の疑問が供提せられる。併し古音の點から云ふならば jang も nang も共に實際の古音ではなく寧ろ此れ等は二次的以後の音であるに過ぎないと推定することが出來る。然らば此の二音から更に由て泝り得可き根本の音は如何と云ふことになる。自分の今日までの研究では

人なる語の原音……lang

を以つてその根本的の音に推すのである。語源を同うする類似語の文字で云へば郎 lang が先づ之に近い語であらう。古から郎が男子の義に用ひられてあることがあるがこれは人と云ふ語と言葉の上に何か關係があるやうに思はれる。今も人のことを lang と云つて居る地方は厦門あたりから暹羅緬甸地方に見出される。即ち

人なる語
- lang……厦門方言(人の字の俗音)
- klang……緬甸の knyeng 語
- lan……暹羅語
- lu……緬甸語

尙臺灣でも人のことを lang と云ひ男 (nam) を (lam-tsu) (男子) と云ふて居る。lang が klang の音から脫化したものであるか否かは別問題として兎も角此の lang の音が變じ訛つて他の地方に見える諸語を生み出したものと思はれる。然るにそれ等の諸音は音韻學上互に相近い性質を有して居る爲め本末の關係が複雜になつて來て居る。即ち

人　lang ⟶ jang ⟶ jan (日本では jing)
　　lang ⟶ nang ⟶ nan (日本では ning)

若しこの音韻關係が事實上のものとして攷へられる爲めには少くとも支那語の性質として又その音韻史上に澤山の此の類例のあつた證據があがらなければならぬ。今左にLの音がJ(更に進んではS)となる例と他に又Nに轉じたる例を二三摘錄して見よう。

(1)　LがJとなる例

- 繚(來沼の反) liao ⟶ 繚(人沼の反) jiao　(人名)
- 率　lit ⟶ 率　sit　(蟀)
- 硫　liu ⟶ 硫　jiu　(厦門俗音)
- 劉(列)lat ⟶ 多　sat　(拶)
- 鮡(俗音) liu ⟶ 柔　ziu　(厦門讀書音)

（2）　LがNとなる例

林婪　lam ⟶ 林　na　（厦門俗音）
尼（客人音）li ⟶ 尼　nei　（廣州音）
女（厦門音）lu ⟶ 女　nöü　（廣州音）
龍　lung ⟶ 龍　nong　（朝鮮音）
南　lam ⟶ 南　nam　（廣州音）

かやうな事實を綜合して見ると今日S又はJの音で知られて居るものの中には更にその以前にLから出て居るもののあることが十分察せられる又Nの音で呼ばれて居るものも其の實Lに關係のあつたものの存することも攷へられるのである。NとLとの關係は音韻の性質上互に相轉換し易いものであるが、S又はJの方は普通L音のゆるみて生じたものであつて、今一層此の音がゆるんだ性質を帶びるとY音に進み遂には全くの母音とまでも變化することがあるのである。今その音韻發達の順序を人の字に就いて方言の上で云ふならば次ぎの如くになる。

人の字音
- 1．lang……厦門俗音
- 2．jang……溫州音
- 3．yang, yên ……廣州音
- 4．ang, in 인……朝鮮音

一方に此の音韻系統があり他方には別の系統として又次ぎのものがある。

人の字音
- 1．lang……厦門俗音
- 2．nang ……溫州音
- 3．nyang, nyên ……安南音
- 4．ning……日本音（吳音）

然るに爰に注意す可きは兩系統中にあるJとNとが又互に音聲學上極めて相轉換し易い性質を有して居ることである。これは日本（Nippon 又は Japan）の日が nit とも jit ともなり女が jo とも nio ともなり得ると同じ現象である。それ故人の字の音が J, N 兩音の間を動いて居るとは必ずしも第三の音Lに關聯してのみ起るものとは云へないのであると云ふ注意だけは必要である。

要するに現在の地理上の音韻觀察から人の音について J, N, L の三者を發見するに依り、吾人はその間に音韻關係を認めて人の音 Lang を以つて nang, ning, jang, jing よりも更に一層元始的の音たるに近くはないかと云ふ假定說を提出して置く迄である。但しこれは寧ろ言語上の根本問題であつて人と云ふ象形文字が創めて出來かゝつた當時に於いても尙果して lang の音で此の字を呼んで居たか或は此の時には既に二次的の音に進んで居たかどうかそこらの點は頗るむづかしい問題である。け

れども文字の音を論ずるに當つては文字そのものの音よりも支那の言語そのものの方面から觀察することが必要である。かゝる言語學上の立ち場から人の字の古音は最初 lang の音であつてそれが厦門臺灣地方の土語に殘り又暹羅あたりの言葉のうちにその俤をとゞめて居るものではないかと思はれるのである。Hunter 氏の調査によるとマレイ語で人は orang と云ふといつて居る。

以上に述べ來たつた鹽、吉、人の三文字の音に就いて其の北平音と及び之に最も遠ざかれる古形の方言音とを比較して再錄すると次の表の如くになる。卽ち

而して此の古音の形を有する厦門の音が凡べて我が臺灣の俗音又は地名に於いて窺ふことの出來ると云ふことは頗る支那古韻研究上面白い現象である。

以上に種々觀察して來た例は僅か二三のものに過ぎないが、支那の諸地方の方言中で發達の最も後れて居る音韻の名殘りが厦門方言の間に見出されると云ふことの一斑を見る爲めにこの實例を採つて述べたのである。素とより今日生きて居る方言のことであるから又一方にはその地方特有の訛音を發達させて語源上直接何等の關係もなくして別音の行はれて居るやうなことも隨分あるのである。此の點の注意は獨り厦門方言に限らず方言觀察の上には常に必要なる條件である。

同じ厦門の方言音のうちでも例へば

龍の字の音
- 1. liong ……讀書音
- 2. gieng ……俗音

臉の字の音
- 1. liam ……讀書音
- 2. giam ……俗音

のやうな相違のあることがある。これは他に樂の字などに lak（轉じて又 ǵak とも yak ともなる）音と gak の音の竝び存するが如き例であつて、取りわけ別に之を訛音とする程のものでもないかも知れないが、併し外には時として隨分なものもある。例へば臺灣で

琶 (pi) の俗音……gi
批 (pi) の俗音……gi
到 (tou) の俗音……kau

電 (tien)　の俗音……na

の如き甚しい類もある。それ故一概に此の地方の俗音が古めかしいとばかりもいはれない。唯たゞかし此れ等の訛音と云つても何の理由もなしに偶然とび離れた音現象を呈して來るのではない。普通音韻學上の理由とか心理學上の類推作用とかの原因に依つて支配せられて居るのが一般である。

支那の古音は以上に述べた厦門地方のみに殘つて居るのではなく、其の他尙北方では福州方言西南の方では汕頭(スワトウ)方言、廣州方言客家(ハッカ)方言などにてもそれぞれ其の特有の訛音を認むると共に又少なからず古音と認められ得可き音を有して居る。併しこれ等南支地方の各方言に就いて一々叙述するだけの紙面を有して居ないから暫く割愛して置いて、最後に支那の南境を越え安南に這入つて同地の音韻に就いて少しく觀察して見よう。

先づ陽の字の音に就いて見るに陽の語頭音 Anlaut は普通 y である。

陽の字音 { 支那音……yang
　　朝鮮音……yang [양]

素と陽の字は昜の音符に依つて其の音を出して居たもので旦 tan 東 tong などと同類語であるからその古音は tang である（字音轉換の部參照）。今日陽の音が tang であるとは決して考へられて居ないけれども、安南では餘程之と近い音を以つて現に發音して居る。卽ち

二　陽の字の安南音……doung, danh

である支那の清音が安南で濁音となることは少なからずあるのである。それ故陽の音は toung, tanh の音として攷へることが出來る。尙安南の地名にも

海陽……Hai-Doung

と讀まれて居るのも玆に考へ合す可きものである。つまり陽の安南音 doung は古音の tang 訛音として而かも古音に近い音である。

次ぎに續の字の音韻に就いて見るに之が支那方言及び朝鮮音は左の通りである。卽ち

續の字音 { 北平音……hsü
　　上海音……zok
　　厦門音……siok
　　廣州音……tsuk
　　朝鮮音……sok

此れ等諸音の中で最も根本となる音は廣州音の tsuk である。然るに tsuk の音は更に一層古形の音 tuk に泝ることが出來る。何となれば今この續の字の音符賣卽(上圖)に依つて音の出て居るものに瀆讀牘の tok 覩の tek など云ふ音が見えて居る所から

攷へると、賣の音符に依て居る續の字も嘗つて一度 tok とか tuk とか云ふTの語頭音を有して居たことが十分察せられる。果して此の考が誤つて居ないとするならば廣州音の tsuk が之に最も近い訛音と見られるのである。然るに更に泝つて

續の字の安南音は……tuk

である。安南で支那音のS又はその類の音がTで現はれて居ることは尙類例に乏くしない。例へば

安南音
- 速の音……tuk
- 族の音……touk, tuk
- 賣の音……trik, trak
- 深の音……t'êm
- 十の音……t'ep
- 紫の音……ti

之に依つて見ても續の安南音に tuk の音が現れて居るのも偶然の訛音でないことがわかる。卽ち音の發達史上から云つて安南に此の音の最も古い形が殘つて居ると云はれる。尙併し安南には又その地特有の訛音を發達させて居ることもあるのであるから一概に云へないことは無論である。

要するに地理上に於ける音韻の分布は福建廣東兩省の各方言に古代の音の名殘りを留めて居ることが多く而して更に安南に這入ると又支那の古音が辿られる。假令國名の上でこそ今日安南は支那に對して外國であるけれども音韻の地理學的分布の上よりすれば明かに支那の一方言音として取扱ふことが出來る。此れは安南の歷史と相俟つて面白い聯絡が玆に存して居る譯である。

安南及び南淸地方にはかやうに古音が殘つて居るが北淸地方は之と非常な徑庭がある。支那語全分布の上で北支地方程音韻の發達を遂げて居る地方はない。中支の浙江湖北地方は音韻發達上亦南北兩地方の中間の過渡時代に在る觀がある。それ故に支那音韻の發達の順序はさながら地理の上で北平地方を基點として此れから漸次南下して考へるならば大體に於いて音韻の歷史を今日から古代に逆に泝つて觀察したのと同じ理屈に歸するのである。

四　結　論

以上支那文字に現れた音韻の現象に就いて觀察したところは著者が嘗て大學卒業當時、史學雜誌上に連載したもので、素とより材料の不備の點、研究法の不十分な箇所など定めし多かる可き上に叙述の方法のまづかつた爲め自分ながら慊焉たるところが少くない。依つて今妥に結論を下すにあたつて及ぶだけ明かに此の研究の主意とするところを總括して述べて置く。

支那の言葉の研究は今更らしく云ふ迄もなく頗る困難な事業であるがわけて此の音韻の側の研究に

なると發音の手懸りを中々具體的に拉することが出來ないだけそれだけ一層困難の度を加へる。殊に古代の音韻現象に到つては難澁の極みである。此の難問題を取扱ふ爲めに自分は言語學上の立脚地から支那文字の方便によりその音韻觀察に這入つたのである。その觀察の結果を項目に分けて云つて見ればつまり次ぎの如くになる。

(一)　支那文字は從來義字とばかり目せられて居つて音韻學の方面から之を音字として觀るものは殆んど全くなかつた。自分は敢て之を純粹の音字として觀るのでは無論ない。けれども事實苛訶珂柯何河の如き文字の一群が可の音符によつて其音が出て居り又迭帙秩佚の如き今日の音でこそ一寸違つては居るものがあつても元來失なる同一音符によつてそれ等の音が出て居たと云ふやうな點から觀ると可とか失とか云ふ文字そのものも唯單なる音符號として考へられることになる。かくの如き事實から支那文字は支那式の表音文字と云ふことが出來る。少くとも支那文字はその義字たる性質の外に又音字たる要素をも大いに發達させてゐると云ふことが考へられる。而してその相違せる音韻相互の間には普通一定のきまつた音韻變化の通則が横たはつてゐて其れに支配せられて居ることがわかる。或は又時として文字そのものは互に違つて居ることがあつても言葉の音の方面から觀て同一又は同種のものとして取扱ふことの出來る場合もある。憂 (yū) 愁 (sū) が同じく悲しき意義を表はし、抹 (met) 滅 (met) 沒 (mot) 密 (mit) 莫 (mak) が孰れも無の義を示して居るなどの例のに依つても之が察せられる。それ故文字によりて音韻現象を見ると云ふことは一面に支那文字の表音的特質を曉知せしめると同時に他の一面で支那上代の言語關係を綜合せしめると云ふ結果を提供するのである。これは文字上から論じた結論である。

(二)　更に之を歴史的に縱に泝つて見ると支那音の沿革は非常に複雜で且つ著しい變遷を經て來て居るのであつて、殊に西暦十三四世紀卽ち宋末元初の頃に最もはげしい變動があつた。此の時代には嘗て古くから傾向のあつた入聲音消滅の現象が最も劇烈に行はれたのである。又各音に就いて云ふとKとかTとかのきつい發音を有する音又G音の凡ての種類は後世になるに從つて軟化した音と變じたのである。或は甚だしくゆるんで別種の音に轉訛した者も隨分ある。江の古音 kung が ĉiang となり、上、尙の古音 tang が śang となり又壹及び鵡などは kit (kat) の古音から yit 更に變遷してiの音とまでも成つた如き例其の他越の古音 kuat (kuot) が變遷に變遷を重ねて今日 yüe の音になつて來て居るなど孰れも皆此の種の現象である。尙母音に就いて云ふならばaiがeiとなり更にeとなり遂に最も挾まりてiの音となる。次ぎには二重母音 (diphthong) でなく唯の單母音がaとかe（時としてはê卽ち西洋音聲學者の書く逆樣のeの音に近いもの）とかの音などに變遷して居るものがあり又單母音aから反つて二重母音のiaを發達させて居るものもある。

(三)　次ぎに地理上の方面から横に音韻現象を觀察して見るとyとか ʐ, ʑ, ʂ とかの軟かな音は主と